沖縄県南城市文化財調査報告書第 23 集

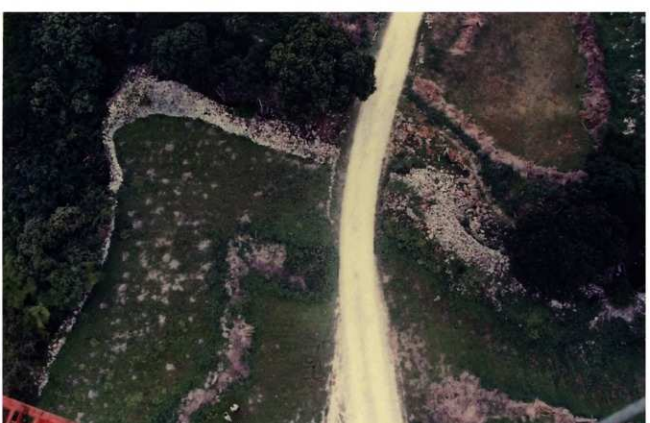
糸 数 城 跡

－整備事業報告書Ⅰ－

2024年 3月

沖縄県南城市教育委員会

巻頭図版1　北のアザナ



巻頭図版2　西のアザナ

序　文

糸数城跡は、南城市玉城字糸数に所在し、標高約 180m の琉球石灰岩丘陵上に築かれたグスクです。城壁の構えが見事であり、直線状の城壁に北のアザナ、南のアザナといった突出した物見台を設けていることは、県内でもほとんど例をみない築城技術となっております。また、本島南部地域でも標高の高い場所にあるため、北側には勝連半島・中城湾、西側は首里城・南山城跡等の他、遠くに慶良間諸島を眺めることができる景勝地でもあります。

本書は、沖縄県南城市（旧玉城村）教育委員会が文化庁の補助を受け、昭和 61 年度から平成 11 年度に実施した国指定史跡糸数城跡の史跡整備事業の成果をまとめたものです。これまでの史跡整備の成果が、調査研究に寄与するとともに、市民をはじめ多くの方々に親しまれ、ご活用いただければ幸いに存じます。また、今後も継続して史跡の保存と整備に努めてまいります。

末尾になりますが、これまでの史跡整備にあたりご指導、ご協力を賜りました諸先生方、文化庁及び県文化財課、糸数区をはじめとした地域の方々、関係各位に心から御礼を申し上げます。

2024(令和 6)年　3　月
沖縄県南城市教育委員会
教育長　具志堅　兼栄

例　言

1. 本報告書は、沖縄県南城市玉城字糸数地内に所在する国指定史跡　糸数城跡にて実施した保存整備事業の成果をまとめた整備報告書である。

2. 保存整備事業は、文化庁及び沖縄県より補助金を受けて実施した。

3. 事業の実施にあたり、平成 10 年度以降においては糸数城跡整備委員会を組織し、同委員会の指導及び助言に基づいて南城市(旧玉城村)教育委員会が主体となり実施した。

4. 本報告書は、金城亀信、西平剛の協力を得て眞志喜陽子が執筆し、全体の編集及び構成は眞志喜が行った。

5. 本報告書に掲載した測量図面及び工事図面等は、原図を A4・A3 サイズに合わせて任意に縮小し、成果品においても加筆修正を加えた。

6. 本報告書に掲載した写真・図面等の資料は、南城市教育委員会が保管している。

目　　次

巻頭図版1、2
序文
例言

第1章　糸数城跡の概要
　第1節　南城市の概要……1
　第2節　糸数城跡及び周辺の概要……5

第2章　事業の概要
　第1節　事業目的……9
　第2節　事業体制……9
　第3節　整備計画……12
　第4節　各年度の事業概要……21

第3章　各整備状況
　第1節　昭和61年度整備……41
　第2節　昭和62年度整備……52
　第3節　昭和63年度整備……61
　第4節　平成元年度整備……68
　第5節　平成2年度整備……73
　第6節　平成3年度整備……78
　第7節　平成4年度整備……82
　第8節　平成5年度整備……88
　第9節　平成6年度整備……93
　第10節　平成7年度整備……96
　第11節　平成8年度整備……107
　第12節　平成9年度整備……110
　第13節　平成10年度整備……114
　第14節　平成11年度整備……119

第4章　総括
　第1節　事業の成果……127

引用・参考文献……128

表　目　次

第１表　石積タイプの区分表 …… 18
第２表　糸数城跡保存修理事業年度別一覧表 …… 36

挿 図 目 次

第１図　南城市位置図 …… 2
第２図　南城市地形図 …… 4
第３図　指定範囲図及び周辺遺跡図 …… 8
第４図　平面形態設定図 …… 14
第５図　復元整備高さの設定１ …… 16
第６図　復元整備高さの設定２ …… 16
第７図　復元整備高さの設定３ …… 16
第８図　石積断面図 …… 17
第９図　石積形態設定図 …… 19
第10図　糸数城跡年度別整備箇所 …… 37
第11図　糸数城跡発掘グリッド設定図 …… 39
第12図　年度別測量箇所一覧図 …… 43
第13図　昭和61年度 城壁立面図１ …… 44
第14図　昭和61年度 城壁立面図２ …… 45
第15図　昭和61年度 城壁立面図３ …… 46
第16図　昭和61年度 城壁立面図４ …… 47
第17図　昭和61年度 城壁立面図５ …… 48
第18図　昭和61年度 城壁立面図６ …… 49
第19図　昭和61年度 城壁立面図７ …… 50
第20図　昭和61年度 城壁立面図８ …… 51
第21図　昭和62年度 城壁立面図１ …… 54
第22図　昭和62年度 城壁立面図２ …… 55
第23図　昭和62年度 城壁立面図３ …… 56
第24図　昭和62年度 城壁立面図４ …… 57
第25図　昭和62年度 城壁立面図５ …… 58
第26図　昭和62年度 城壁立面図６ …… 59
第27図　昭和62年度 城壁立面図７ …… 60
第28図　昭和63年度 城壁立面図１ …… 63
第29図　昭和63年度 城壁立面図２ …… 64
第30図　昭和63年度 城壁立面図３ …… 65
第31図　昭和63年度 城壁立面図４ …… 66
第32図　昭和63年度 城壁立面図５ …… 67
第33図　平成元年度 城壁立面図（合成） …… 71
第34図　平成２年度 城壁立面図１ …… 74
第35図　平成２年度 城壁立面図２ …… 75
第36図　平成２年度 城壁立面図３ …… 76
第37図　平成２年度 城壁立面図４ …… 77
第38図　平成３年度 城壁立面図１ …… 79
第39図　平成３年度 城壁立面図２ …… 80
第40図　平成３年度 城壁立面図３ …… 81
第41図　平成４年度 城壁立面図 …… 83
第42図　平成４年度 城壁展開図 …… 84
第43図　平成４年度 平面図及縦断図 …… 85
第44図　平成４年度 横断図 …… 86
第45図　平成４年度 城壁修復箇所 …… 87
第46図　平成５年度 平面図 …… 90
第47図　平成５年度 出来形断面図１ …… 91
第48図　平成５年度 出来形断面図２ …… 92
第49図　平成６年度 城壁修復工事図面 …… 95
第50図　平成７年度 平面図 …… 101
第51図　平成７年度 標準断面図・抑止杭工 …… 102
第52図　平成７年度 アンカー詳細図 …… 103
第53図　平成７年度 アンカー部品図 …… 104
第54図　平成７年度 注入工配置図

・ロックネット展開図 …… 105
第55図　平成7年度 求籍図・探査測線図
・異常点位置図 …… 106
第56図　平成8年度 平面図 …… 107
第57図　平成8年度 断面図 …… 108
第58図　平成9年度 工事竣工図1
(断面図) …… 112
第59図　平成9年度 工事竣工図2
(外壁・内壁立面図) …… 113
第60図　平成10年度 平面図 …… 116
第61図　平成10年度 城壁断面図 …… 117
第62図　平成10年度 城壁展開図 …… 118
第63図　平成11年度 平面図 …… 122
第64図　平成11年度 城壁断面図1 …… 123
第65図　平成11年度 城壁断面図2 …… 124
第66図　平成11年度 城壁展開図1 …… 125
第67図　平成11年度 城壁展開図2 …… 126

挿図版目次

図版1. 斜面崩落箇所近景（東側より）…… 31
図版2. 斜面崩落箇所近景（西側より）…… 31
図版3. 測量箇所（正門南側城壁南側より）… 42
図版4. 測量箇所（南の虎口跡北側より）…… 42
図版5. 測量箇所（正門北側南側より）…… 42
図版6. 測量箇所（城外正門東側より）…… 42
図版7. 測量作業状況（北側より）…… 42
図版8. 測量箇所（城内正門北側南側より）… 42
図版9. 正門修復前（城外北東側より）…… 53
図版10. 正門修復前（城外南東側より）…… 53
図版11. 測量箇所（南のアザナ北側より）…… 53
図版12. 測量箇所（南の虎口跡東側より）…… 53
図版13. 城壁露出作業（D地区南側より）…… 53
図版14. 城壁露出作業（Q地区南側より）…… 53
図版15. 正門修復工事（城内南西側より）…… 62
図版16. 正門修復工事（城内南西側より）…… 62
図版17. 正門修復工事（南側より）…… 62
図版18. ナンバリング状況 …… 62
図版19. 工事竣工状況（城外東側より）…… 62
図版20. 工事竣工状況（城内南西側より）…… 62
図版21. 根石確認調査（O地区南側より）…… 68
図版22. 根石確認調査（K地区北側より）…… 68
図版23. 石材集積状況（P地区南側より）…… 69
図版24. 測量箇所（城外正門北側北側より）… 69
図版25. 根石確認調査（K地区南側より）…… 69
図版26. スカイマスター撮影（北東側より）… 69
図版27. スカイマスター撮影（西側より）…… 69
図版28. スカイマスター撮影（北のアザナ）… 69
図版29. スカイマスター撮影（正門）…… 70
図版30. スカイマスター撮影（南の虎口跡）… 70
図版31. スカイマスター撮影（南のアザナ）… 70
図版32. スカイマスター撮影（殿舎跡南側）… 70
図版33. スカイマスター撮影（C地区）…… 70
図版34. スカイマスター撮影（A・B地区）… 70
図版35. 測量箇所（I地区西側より）…… 73
図版36. 測量箇所（I地区西側より）…… 73
図版37. 測量箇所（I地区南西側より）…… 73
図版38. 測量箇所（H～J地区北側より）…… 73
図版39. 測量箇所（東のアザナ跡南側より）… 78
図版40. 門跡と想定される箇所
（I地区南側より）…… 78
図版41. 残土処理作業（I地区西側より）…… 78

図版 42. 残土処理完了状況
（Ⅰ地区西側より）…… 78
図版 43. 城壁修復工事着工前（東側より）…… 82
図版 44. 城壁解体状況（北側より）…… 82
図版 45. 城壁修復工事竣工（東側より）…… 82
図版 46. 城壁修復工事竣工（北東側より）…… 82
図版 47. 城壁修復工事着工前（東側より）…… 88
図版 48. 城壁修復工事着工前（南側より）…… 88
図版 49. 城壁解体状況（南側より）…… 89
図版 50. 城壁積直し状況（南西側より）…… 89
図版 51. モルタル流し込み状況(南西側より)…… 89
図版 52. 城壁修復工事竣工（東側より）…… 89
図版 53. 城壁修復工事竣工（南側より）…… 89
図版 54. 城壁修復工事竣工（南東側より）…… 89
図版 55. 城壁修復工事着工前（南西側より）…… 94
図版 56. 城壁積直し状況（北東側より）…… 94
図版 57. 城壁積直し状況（南東側より）…… 94
図版 58. 城壁勾配確認状況（北西側より）…… 94
図版 59. 城壁修復工事竣工（南東側より）…… 94
図版 60. 城壁修復工事竣工（南西側より）…… 94
図版 61. 斜面崩落箇所遠景（南西側より）…… 97
図版 62. 斜面崩落箇所（南西側より）…… 97
図版 63. 探査状況（モルタル注入区域内）…… 97
図版 64. 探査状況（洞窟内区域内）…… 97
図版 65. 落石防護網…… 98
図版 66. 使用機材（リーダー）…… 98
図版 67. 材料検収（H 型鋼）…… 98
図版 68. H 型鋼建込状況…… 98
図版 69. 削孔径…… 98
図版 70. モルタル充填状況…… 98
図版 71. 杭間確認…… 99
図版 72. 抑止杭工完了…… 99
図版 73. アンカー工仮設足場設置…… 99
図版 74. アンカー体挿入状況…… 99
図版 75. 適正試験…… 99
図版 76. 適正試験…… 99
図版 77. ボーリングマシーン穿孔角度…… 100
図版 78. 確認試験…… 100
図版 79. 防錆材孔口確認…… 100
図版 80. 地盤改良工注入口間隔確認…… 100
図版 81. グラウト注入…… 100
図版 82. 材料検収（転落防護網）…… 100
図版 83. 城壁修復工事着工前（南西側より）…… 109
図版 84. 城壁積直し状況（南西側より）…… 109
図版 85. 城壁積直し状況（南側より）…… 109
図版 86. 城壁修復工事竣工（南東側より）…… 109
図版 87. 城壁修復工事竣工（南西側より）…… 109
図版 88. 城壁修復工事竣工（南西側より）…… 109
図版 89. 城壁修復工事着工前（東側より）…… 110
図版 90. 城壁積直し状況（東側より）…… 110
図版 91. 城壁積直し状況（北東側より）…… 111
図版 92. 城壁積直し状況（南側より）…… 111
図版 93. 鉛板設置状況…… 111
図版 94. 城壁修復工事竣工（南側より）…… 111
図版 95. 城壁修復工事竣工（南西側より）…… 111
図版 96. 城壁修復工事竣工（北西側より）…… 111
図版 97. 城壁修復工事着工前（西側より）…… 115
図版 98. 城壁積直し状況（南西側より）…… 115
図版 99. 城壁積直し状況（北東側より）…… 115
図版 100. 城壁積直し状況（北東側より）…… 115
図版 101. 城壁修復工事竣工（西側より）…… 115
図版 102. 城壁修復工事竣工（北東側より）…… 115
図版 103. A'～C'城内側積石状況（東側より）…… 120
図版 104. E'～F'城内側積石状況（西側より）…… 120
図版 105. G'～H'城内側積石状況（北側より）…… 120
図版 106. A～H クレーン使用状況（北側より）120
図版 107. 城壁修復工事着工前（南側より）…… 121
図版 108. 城壁修復工事竣工（南側より）…… 121
図版 109. E 付近城外側着工前（東側より）…… 121
図版 110. E 付近城外側竣工（東側より）…… 121
図版 111. G 付近城内側着工前（南側より）…… 121
図版 112. G 付近城内側竣工（南側より）…… 121

第１章　糸数城跡の概要

本章では、第１節で南城市の概要として地理、歴史的環境、第２節で糸数城跡周辺の概要として地理、歴史的環境を記述する。

第１節　南城市の概要（第１・２図）

１．地理的環境

南城市は、沖縄本島南部の東海岸、県庁所在地である那覇市から南東へ約 12km に位置しており、東西 18km、南北 8km に広がり、面積 49.94km² を測る。市の北西側に与那原町・南風原町、南西側に八重瀬町が接しており、静穏な中城湾及び太平洋に面している。市内には都市部と各地域間とを結ぶ主要道路として、海岸線に沿って走る国道 331 号をはじめ、県道 77 号線、48 号線、86 号線などで構成されている。

地形は、東部及び南部の海岸部の後方から西部地域にかけて、なだらかな傾斜地と比較的急峻な断崖部がみられ、海岸線に沿うように豊かな緑に覆われた琉球石灰岩の丘陵地がひろがっている。北部の丘陵地から西部にかけては漸次傾斜していき、60～100m 前後の小丘状の地形が断続的に所在する平野部となっている。

地質は、第三紀島尻層群のシルト質泥岩、砂岩、凝灰岩、第四紀琉球層群の砂質石灰岩、石灰岩、第四紀の沖積層、海浜堆積層からなる。石灰岩丘陵には琉球層群、海岸に面した地に沖積層、琉球層群を取り巻くように第三紀島尻層群が分布する。土壌は、石灰岩丘陵上にその風化土である赤褐色の島尻マージ、石灰岩台地以外には島尻層群が広く分布している。

石灰岩丘陵からの湧水は豊富であり、国指定有形文化財（建造物）の仲村渠樋川や名水百選に選ばれた垣花樋川、稲作発祥の伝承が残る知念大川など数多くの井泉が点在する。河川は、主要な河川である饒波川、報得川、宮平川、雄樋川、長堂川等が市域内を源流とし、南西側へと流れている。

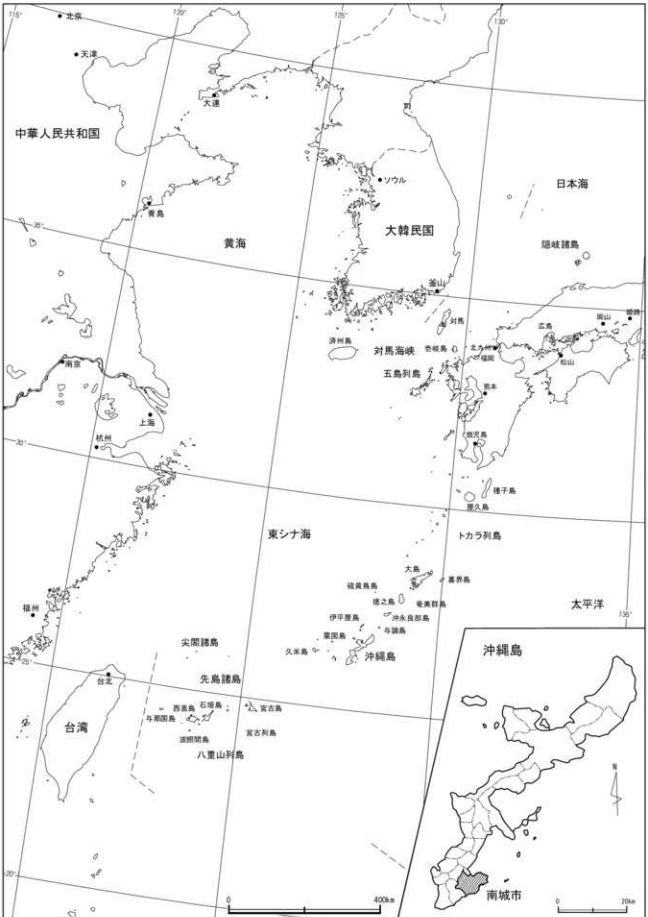
海洋は、太平洋の面した外洋部に発達したサンゴ礁やイノーが南側から北側の冨祖崎付近まで続いており、中城湾に面した佐敷海岸では干潟と砂嘴が展開している。

気候は亜熱帯海洋性気候であり、高温・多湿で年間降水量が多くなっている。特に、梅雨時期（5 月中旬から 6 月下旬）、台風期（7 月から 10 月）に降水量が多くなっており、年間降水量は 1,800～2,500mm 程である。年平均気温は 22.4℃と四季を通じて温暖である。

２．歴史的環境

本市は、近世期に琉球王府により東方（東四間切）として一つの行政区とされていた。また、琉球王府が国家安泰と五穀豊穣を祈願するため行われた「東御廻り」に関する多くの拝所が残る場所として、古くから関わりの深い地域である。

「東御廻り」に代表されるように本市においては、琉球開闢の神話が数多く残っている。神の島である久高島をはじめ、ヤハラヅカサ・浜川御嶽・ミントングスクなどの拝所、稲作発祥の伝承を残す受水・走水や知念大川（井泉）が現存しており、現在も多くの人が本市を訪れている。


北京
天津
大連
中華人民共和国
ソウル
日本海
青島
黄海
大韓民国
隠岐諸島
釜山
対馬
広島
姫路
岡山
清州島
対馬海峡
壱岐島
北九州
福岡
松山
五島列島
南京
熊本
上海
杭州
鹿児島
種子島
屋久島
東シナ海
トカラ列島
大島
奄美諸島
徳之島
沖永良部島
与論島
伊平屋島
粟国島
久米島
沖縄島
尖閣諸島
福州
台北
先島諸島
台湾
西表島
石垣島
与那国島
宮古島
宮古列島
波照間島
八重山列島
太平洋
沖縄島
南城市
400km
20km

第１図　南城市位置図

一方、本市の周知の遺跡総数は 160 ヵ所であり、先史時代(沖縄貝塚時代)の遺跡が 46 ヵ所、グスク時代の遺跡が 80 ヵ所、近世以降の遺跡が 34 ヵ所確認されている。

旧石器時代は、サキタリ洞遺跡から近年の発掘調査において、約 3 万年前とされる人骨や世界最古の巻貝製釣針を含む貝器などが出土している。

縄文時代早・前期は、雄樋川沿いの堀川遺跡や宇和川原半洞穴遺跡、真手川原遺跡、武芸洞遺跡が挙げられる。グスク時代を主体とする真手川原遺跡だが、その下層から、縄文時代前期(沖縄貝塚時代早期)の条痕文土器をはじめ、縄文時代中期の仲泊式土器、古我知原式土器が出土している。また、武芸洞遺跡からは墓が確認されている。

続く縄文時代後期(沖縄貝塚時代前期)は、16 ヵ所の遺跡が確認されている。石灰岩地帯を中心に百名第 2 貝塚、熱田原貝塚、久高貝塚などが各地に分布するほか、久高島などの離島にまで人々が生活を始め、先史時代における交流が活発化する時期である。中でも熱田原貝塚は当時期を代表する遺跡であり、獣形貝製品など豊富な装飾品が出土している。

縄文時代晩期(沖縄貝塚時代中期)は 6 ヵ所の遺跡が確認されている。遺跡は石灰岩台地上に所在しており、下上原遺跡や中山小禄原遺跡が確認されている。

弥生時代から平安時代(沖縄貝塚時代後期)は 29 ヵ所の遺跡が確認されている。この時期の発掘調査報告書を調べた新田重清氏によれば、当時期の遺跡の 1 割近くが南城市で確認されているとのことである。

グスク時代の遺跡の内、島添大里城跡や玉城城跡など 36 ヵ所がグスクで、ほかの 44 ヵ所は集落遺跡や生産遺跡などである。また、各地の主要なグスクを中心に集落遺跡が近接して確認されることから、グスクと集落が一体的に発展したことが想定されている。

各地にグスクが割拠するグスク時代の本市は、佐敷小按司(尚巴志)の登場によって大きな展開を迎える。尚巴志は、島添大里城跡を倒し、それを足がかりに三山を統一し、琉球王府を立てた。

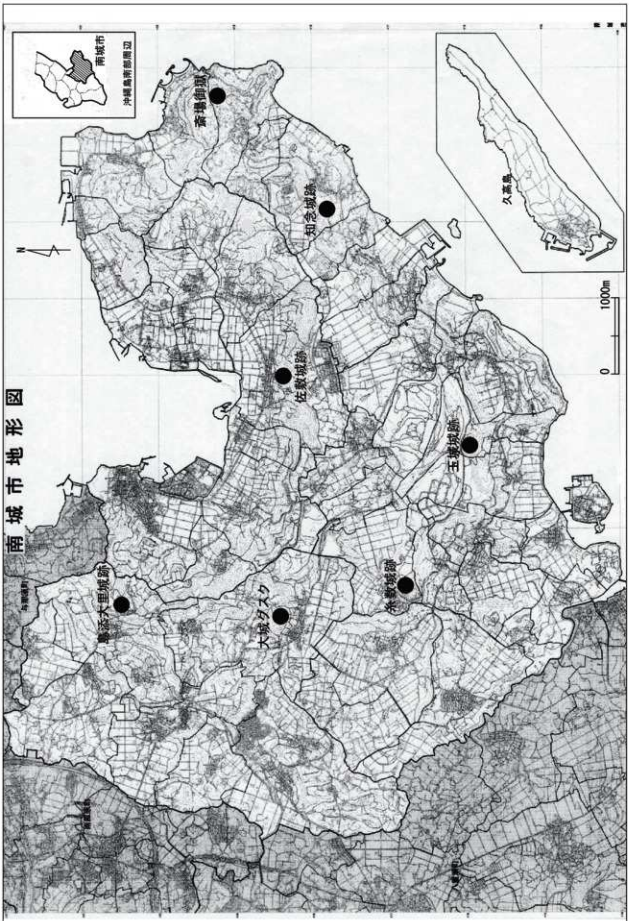
その後、第一尚氏王統第 5 代尚金福の死後、世子の志魯と王弟の布里による王位継承をめぐる争いが起こり、布里は首里を追われ玉城字当山村(現當山)に隠棲したと伝わる。また、第 7 代尚徳即位時には、兄弟らが首里から離れて同地周辺に移り住んだと伝わる。

本市域は、先述のとおり琉球王府時代を通して、王府が直轄する祭祀儀礼と密接に結びついており、国王が巡幸する「東御廻り」や琉球最高のノロである聞得大君の就任式である「御新下り」が行われた。現在では「東御廻り」が民間にまで広がっており、市内に点在する拝所へ多くの人びとが訪れている。

近世期は、地方行政の区画として間切制度が用いられており、本市は大里・佐敷・知念・玉城の 4 つの間切に区分されており、明治の村制施行に伴って、大里村・佐敷村・知念村・玉城村となった。

太平洋戦争末期の沖縄戦時下には、旧日本軍によって陣地化が進み、眺望の良い糸数城跡や島添大里城跡には戦闘指揮所やトーチカなどが構築された。

戦後、避難収容所があった知念地区に知念市が誕生したが、避難民の帰村による人口減少のため、自然解消した。1946(昭和 21)年 10 月には米国軍政府が玉城村に設置され、沖縄民政府も石川から佐敷村新里の高台に移転し、以後、約 3 年間、沖縄の政治と行政の中心地となった。1949(昭和 24)年に


南城市地形図
南城市
沖縄島南部周辺
斎場御嶽
知念城跡
佐敷城跡
玉城城跡
糸数壕跡
大城ダム
馬天大里城跡
久高島
0
1000m
N

第２図　南城市地形図

は与那原、上与那原、板良敷、大見武が大里村より分離し与那原町となり、1980(昭和 55)年に佐敷村が町制に移行し佐敷町となった。そして、2006(平成 18)年 1 月に 4 町村が合併し、南城市が誕生した。

第 2 節　糸数城跡及び周辺の概要

1．地理的環境

糸数城跡が所在する玉城地区を地形的にみると、地区中央部から標高約 150m 前後の琉球石灰岩台地がおよそ東西に、知念半島の東端まで延びており、南東側は海岸部まで舌状地がせりだしている。南西側にかけては八重瀬町との境を流れる雄樋川流域まで緩やかな傾斜地となっており、比較的なだらかな平坦地の多い沖縄島南部にあって、全般的に起伏の激しい地形を呈している。

糸数城跡周辺の地形は、東側が玉城城跡や垣花城跡の立地する石灰岩丘陵へと連なる。東南から西側は丘陵縁辺で断崖上の地形となり、崖下から海岸及び雄樋川までは緩やかな段丘状の地形を保持しながら移行する。北西側は糸数集落の立地する丘陵がある。この丘陵西側縁辺は南北に延びる断崖状の地形となっている。北側も石灰岩丘陵が崖状に落ち込むが他より傾斜は緩く、そのまま平坦部へ移行する。城跡のある丘陵は、遠くは斎場御嶽まで続く、一連の石灰岩台地であり、この台地の西端部分に城壁は築かれている。

城壁のある丘陵やその周辺は、沖縄本島南部に普遍的にみられる第四期層の琉球層群と称される石灰岩に属するものと、石灰岩丘陵の基盤である新第三紀～第四紀早期の島尻群層とよばれている泥岩(シルト岩)のグループのひとつである新里層が分布する。

海岸は、奥武島やその対岸地域には内湾－転石域、八重瀬町港川から知念半島にかけてサンゴ礁域(イノー)がひろがるほか、雄樋川の河口部は、かつては干潟・マングローブ域と想定され、多種多様な魚貝類の生息地であったと考えられる。

本市を東西に横断する標高 120～150m の琉球石灰岩丘陵上には、北西端に島添大里城跡が位置し、そこから東に大城城跡、糸数城跡、玉城城跡、垣花城跡、佐敷城跡、知念城跡などが点在し、東端には、世界遺産「斎場御嶽」が所在する。また、稲福遺跡、垣花遺跡などのグスク時代の遺跡も台地上や尾根筋、あるいは中腹に数多く形成されている。

2．歴史的環境

糸数城跡は、糸数城跡の東側に所在する玉城城跡に居られた玉城按司が玉城城跡を守るため、西の守りとして、次男を大城城跡(大里字大城)に、三男を糸数城跡に派遣して築城させたといわれている。糸数城跡は東側を除き、三方を断崖又は急斜面で、特に南側は最も高い断崖となっている。東側は、糸数城跡から玉城城跡までの間の丘陵上がほぼ平坦地となっており、視界が良く、両グスクを遮るものはみられない。そのため、糸数城跡では防備の弱い東側に高い城壁を築くとともに、正門も本家のグスクである玉城城跡に向けて、両グスクの連携を図っていたと考えられる。

『中山世鑑』や『中山世譜』によれば、玉城王の治世下に国が三つに分かれ、大里按司が大里・佐敷・知念・玉城・具志頭・東風平・島尻・喜屋武・摩文仁・真壁・兼城・豊見城を討ち、自らを山南王と称したとあることから、玉城城跡からの西の守りとして築城された糸数城跡は、その役割を担うことができず、大

里按司の侵攻を許し、三山鼎立の頃には山南王の支配下にあったと推測される。また、伝承によると兵頭役の「比嘉ウチョー」という人物が、グスク増築のため、国頭へ資材を購入しに行った際の隙を狙って、上間按司が大軍を率いて攻撃してきたため落城したという話が伝わっている。

糸数城跡の東側に隣接する形で蔵屋敷跡の広がる平場があり、佐南村と呼ばれていた。この地には先述した糸数城跡築城までの居城であったとされる根石グスクが所在しており、糸数城跡築城以前のグスクであることから「元グスク」とも称されている場所である。麓には、佐南村の村立ての祖霊を祀る拝所である「根石城之嶽」がみられ、現在でも糸数集落が村落祭祀にあたって最初に拝む拝所であり、本地域が現在の糸数集落の基礎をなしていたことが確認できる。

平成 30 年度に根石グスク後方(北側)の試掘調査を行ったところ、建物の柱穴等の遺構やグスク土器、カムィヤキ、青磁等の遺物が出土した。このことから、糸数グスクと同時代の遺跡が広がることを確認(根石グスク周辺遺跡)し、さらに、その後方(北側)の丘陵を戦争遺跡として使用していることも確認された(根石グスク周辺陣地壕)。

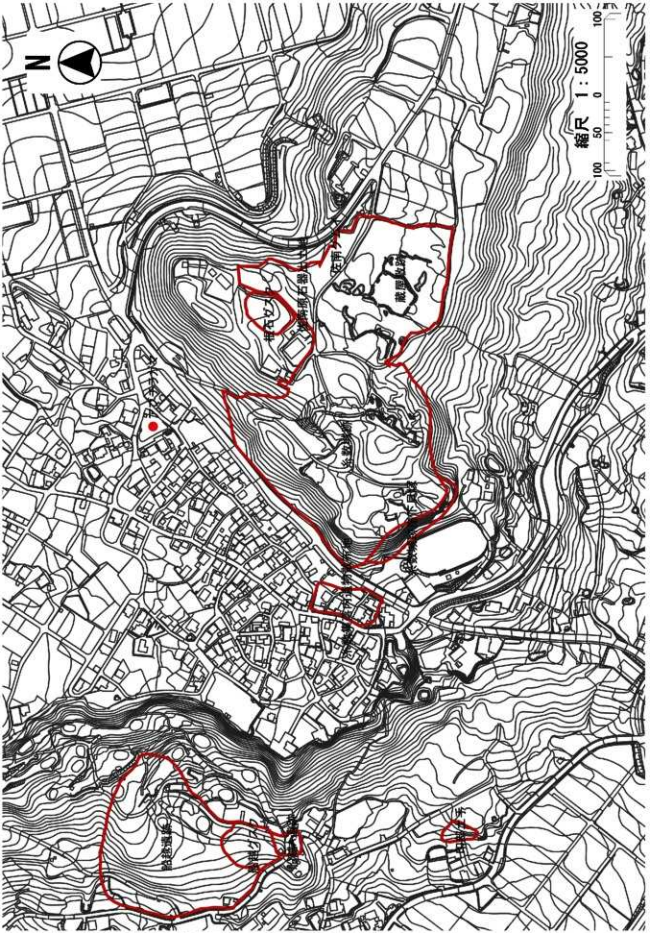
蔵屋敷地域には、サナン・クルーク・イトウカジ・メーバル・シキナ・アダンロ・ヤカンなどの血縁小集落が存在しており、それらを糸数按司が束ね、グスクの城下集落としていた。落城後、城跡が使用されなくなった後も集落はそのまま営まれていたが、明治 19 年の天然痘の流行により多くの人が命を落としたため、当地域を放棄し、現在の城跡西側に転居したといわれている。

蔵屋敷跡からは、現存する 2 つの石積囲いのほか、多くの小穴が確認され、建物跡と想定される平面プランを1基確認している。石積囲いは一部崩れているものの、南北に所在する石積については、残存状況が比較的良好で、石面も丁寧に整形されたものが使用されている。一方、東西に所在する石積については、石面が統一されておらず、残存状況が悪い傾向がみられた。その工法には 2 通りあり、共に基盤部を整地した後、両側に石面を整えた石材を積み上げ、内部に中込石を詰めて積み上げたものと、中込部を盛土成形した後、両側に石面を整えた石材を積み上げたものがみられた。前者が南北に所在する石積に、後者が東西に所在する石積に該当するものとみられる。建物跡については、石積の手前から確認されており、さらに周辺からも多くの小穴が検出されたことから、複数の建物があったことが想定できる。しかし、蔵屋敷跡は明治時代に集落が移転して以降、耕作地として使用され、さらに戦後に耕作地の転地返しが行われた結果、地下に埋蔵されていた多くの遺構が破壊されてしまい、集落の広がりを確認することが困難な状況となっていることが確認された。遺物については、グスク土器、カムィヤキ、中国産陶磁器、沖縄産陶器などが出土していることから、遅くとも 14 世紀頃に成立したと考えられ、14 世紀以降、伝承に伴う集落が展開していったのではないかと考えられる。これは小穴からの出土遺物の大半が当該時期に相当することからである。しかし、現存する石積の成立時期については、なお不明確な状況が多い。

堀切状遺構は、城郭と蔵屋敷跡の集落を隔絶するように所在している。調査地においては、一部を除き、毛抜堀状に掘り込まれていることが確認された。幅は約 8m 、深さは約 2m を測る。城郭側の上端には石積が積み上げられており、防御を意識したものと考えられる。石積は堀切を掘った際に出た土を利用し、盛土造成を行った後に両側より石を積み上げていたと考えられる。石積の高さは約 1m を測り、高い場所では約 1.5m と容易に越えられない高さとなっている。堀切は南北軸と東西軸の2方向にL字状

に所在している南北軸の南側については、そのまま崖まで延びていると想定され、城郭への侵入を阻止する役割を担っていたと想定される。また、平地が続く北側については、北東側にまっすぐ延びていくことが想定されており、その延長線上に所在する石積まで延びていた可能性が考えられる。

遺物については、蔵屋敷跡と同様の出土状況となっており、中国産陶磁器が最も多く、グスク土器、沖縄産陶器と続いており、その年代についても中国産陶磁器の年代から蔵屋敷と同時期に相当すると考えられる。



第３図　指定範囲図及び周辺遺跡図

第２章　事業の概要

第１節　事業目的

糸数城跡は、昭和 34 年 12 月 16 日、琉球政府文化財保護委員会による指定を受け、沖縄の本土復帰に伴って、昭和 47 年 5 月 15 日に城郭を中心に 49,806m² が国の史跡指定を受けている。国指定当時の糸数城跡は、築城から数百年を経ていたが、大部分の城壁及び城門は残存していた。しかし、正門の櫓門遺構は倒壊の恐れがあり、現存する城壁の随所で崩落や孕みが生じていた。また、雑木雑草が繁茂していたことから往時の地形等不明な点が多く、戦後の道路建設により、城壁が破壊・撤去された箇所もあった。これを鑑み当時の玉城村（現南城市）教育委員会では、文化庁、沖縄県教育委員会文化課の指導の下に国庫補助事業として、昭和 51 年度に『国指定史跡　糸数城跡保存管理計画』を策定し、昭和 55～59 年度にかけて土地公有化事業を実施した。その後、指定地の公有化に伴い、昭和 61 年度より遺構調査や城壁修復工事など保存修理事業に着手し進めてきた。

平成 2 年度には『糸数城跡及び周辺整備構想（基本構想）』を策定。平成 8 年 1 月 22 日には、国指定史跡「糸数城跡」の関連遺跡として、根石グスクや蔵屋敷地区等が追加指定され（33,000m²）、平成 8 年度～11 年度にかけて、追加指定地の土地公有化事業を実施した。

現在もなお整備事業は継続中であるが、本報告書は昭和 61 年度から平成 11 年度までの整備事業内容をまとめたものとなっている。

第２節　事業体制

整備事業は、玉城村（現南城市）教育委員会が主体となって実施した。整備にあたっては、文化庁文化財部記念物課文化財調査官（現資源活用課）、沖縄県教育委員会文化課（現文化財課）職員、各専門家に指導・助言を受けながら進めていたが、平成 10 年度より各種の専門家からなる「糸数城跡整備委員会」を組織し、同委員会において整備案の検討を行うとともに、指導・助言を仰ぎ事業を実施した。また、同委員会には文化庁文化財部記念物課文化財調査官、沖縄県教育委員会文化財課職員にも併せて同席を仰ぎ、重ねて指導・助言を受けながら事業を実施した。

以下、事業を実施した昭和 61 年度～平成 11 年度までの整備委員会、文化庁、沖縄県教育委員会文化課、玉城村（現南城市）教育委員会事務局の体制について記す。（※敬称略、順不同）

○整備委員会

糸数城跡整備委員会委員（平成 10・11 年度）

嵩元　政秀〔沖縄考古学会会長〕
木全　敬蔵〔元奈良国立文化財研究所測量研究室長〕
中山　俊彦〔玉城村文化財保護審議会長〕
井上　秀雄〔沖縄県立芸術大学音楽学部教授〕
湧上　元雄〔玉城村文化協会長〕
福島　俊介〔琉球大学工学部教授〕

○指導

文化庁文化財保護部記念物課（当時職名）

仲野　浩〔主任文化財調査官〕
狩野　久〔主任文化財調査官〕
加藤　允彦〔文化財調査官〕
増渕　徹〔文化財調査官〕
本中　眞〔文化財調査官〕
安原　啓示〔主任文化財調査官〕

沖縄県教育委員会文化課（当時最終職名）

比嘉　賀幸〔文化課長〕
宜保　栄治郎〔文化課長〕
當眞　嗣一〔文化課長〕
西平　守勝〔文化課長〕
大城　将保〔文化課長〕
糸数　兼治〔県立図書館八重山分館館長〕
日越　国昭〔文化財係長〕
安里　嗣淳〔史跡・埋蔵文化財係主幹兼係長〕
大城　慧〔史跡埋蔵文化財係長〕
上原　静〔史跡整備係長〕
金城　亀信〔文化課主任〕
盛本　勲〔文化課主任〕
金城　透〔文化課主任〕
玉城　朝健〔史跡係主任専門員〕
上原　静〔史跡係主任専門員〕
津波　清〔指導主事〕
我那覇　念〔文化課指導主事〕
上地　博〔史跡整備係専門員〕
高嶺　朝誠〔史跡整備係専門員〕

奈良国立文化財研究所

木全　敬蔵

村田　修三

千葉県立中央博物館

黒住　耐二

早稲田大学教育学部

金子　浩昌

兵庫県立兵庫工業高校

北垣　總一郎

玉城村文化財保護委員会

中山　俊彦、中村　直雄、大城　真常、井上　秀雄、中村　康雄、大城　康洋、仲村　正雄、糸数　兼治

○実施体制

玉城村教育委員会

教育長	新城　安儀	（昭和 61～63 年度）
	井上　能春	（平成元～11 年度）
社会教育課長	照屋　盛三	（昭和 61～平成 2 年度）
	當山　全章	（平成 3～9 年度）
	比嘉　幸男	（平成 10・11 年度）
課長補佐	八幡　正光	（平成 3～5 年度）
	稲福　栄	（平成 6～9 年度）
	上原　トシ子	（平成 10・11 年度）
文化財係	大城　カヨ子	（昭和 61・62 年度）
	八幡　正光	（昭和 63～平成 2 年度）
	西平　剛	（平成 5～11 年度）

第３節　整備計画

平成 11 年度に『糸数城跡整備実施計画』を策定している。計画では、対象地全体の導線計画や造成計画、植栽計画、各種施設計画を取りまとめたほか、対象地を 6 つのエリアに区分し、エリアごとの整備計画を位置付けている。本報告書の整備範囲である城郭エリアの整備計画については下記のとおりである。(※但し、本報告書に合わせて章番号は修正している。また、現在は令和元年度に改訂版である『国指定史跡糸数城跡整備基本計画書』を策定しており、これに基づいて整備を進めている。)

１．現況

①主要施設

・城郭石積（正門及び裏門を含む）
・殿舎跡
・掘建柱建物跡
・糸数城之嶽
・自然壕（日本軍が利用した壕）

②現状

・戦後建設された道路が城郭内への主要なアクセスとなっている。
・城郭石積は、道路建設により北側と北東側の 2 箇所が完全に破壊・撤去されており、また崩落した石材が散在している区間やはらんでいる箇所がある。
・南側から西側にかけての断崖上部に位置する城郭石積は、雑木雑草に覆われていて、現状確認が難しい。
・殿舎跡とされる場所には、建物の礎石が 1 個確認できる。
・発掘調査により、裏門近くで掘建柱建物跡が確認されている。
・地域社会と結びつきの強い施設であり、村落祭祀の重要な場所である糸数城之嶽がある。
・城郭のほぼ中央に日本軍が利用した自然壕があり、入口部には日本軍が構築した石垣が残っている。
・グスク時代の遺跡でない糸数按司の墓が建設されている。
・南側の断崖は一部区間で岩盤崩落が発生したため、崩落防止対策が施されている。

２．計画方針

・本整備計画の各エリアと位置づけ、往時の形態を可能な限り再現する。
・施設の整備にあたっては発掘調査に基づき、文献資料、ヒアリング調査及び他城跡の整備事例等も参考にしながら、整備委員会での検討を基に行う。
・城郭石積の保存修理にあたっては、原形の大幅な変更を伴う整備は行わない。
・道路建設により破壊・撤去された城郭石積は、両端に残る城郭石積を参考にして復元する。

・糸数城之嶽は現況保存を基本とし、ビロウ、ガジュマル等の御嶽林を構成する樹木の保護・育成を図る。
・日本軍が利用した自然壕は糸数壕との連携を図り、戦跡として現況保存する。
・糸数按司の墓は元の場所（糸数竹之口原の崖下）への移設を検討する。

3．造成

・現時点では往時の正確な地形が不明であるため、地形の大幅な改変を伴う造成は行わない。
・遺構保護のために張芝を行う場合には、有効土層を確保するため客土を行う。

4．植栽

・基本的には、往時の植生が不明であるため新規の植栽は行わない。但し、遺構保護のための芝張は行う。
・糸数城之嶽周りの植生は保護・育成を図るものとする。但し、神聖な御嶽空間になじまない外来樹木は撤去する。
・城郭石積に着生している樹木や城郭石積近傍に育成して石積崩落の原因となる樹木は撤去する。

5．園路

・往時の各施設間移動の形態が不明であるため、エリア内は現状保存を基本とし、新規の園路は配置しない。
・エリア内は、現道を利用した自由な散策を図るものとする。なお、安全で快適な移動を図るために散在する石材は整理し、通行に支障となる樹木は整枝・剪定を行う。
・将来的に社会的な要求が高まり、エリア内への身障者の導入を検討する段階で、発掘調査に基づき園路計画を行う。

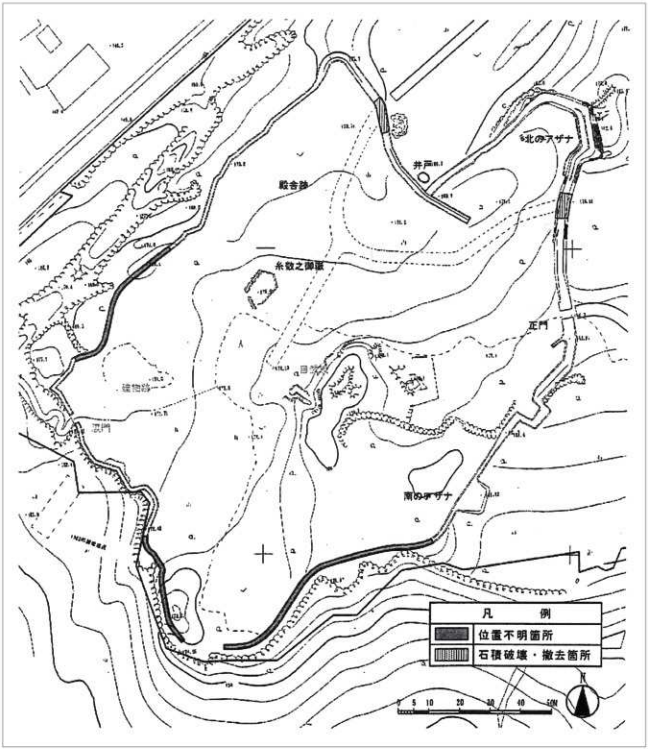
6．主要施設

（1）城郭石積

平面形態は発掘調査に基づき決定し、石積工法、石積高さ等の立面形態の主要素については周辺遺構に留意して設定するものとする。なお、発掘調査で石積の根石が確認できない場合には、石積を行わないものとする。

①平面形態の設定

平面形態は石積遺構に基づき設定した。位置が不明確な南側及び西側の断崖上部の石積については概略的なラインとし、道路建設により破壊・撤去された箇所については両端の石積遺構を相互に結び設定した。ただし、南側断崖上部の一部区間については石積遺構が確認されていないため、石積ラインを設定しなかった。なお、位置が不明確な箇所については、今後、発掘調査及び測量調査等に基づき石積のラインを確認する必要がある。


北のアザナ
井戸
殿舎跡
糸数之御嶽
正門
建物跡
西門
南のアザナ
凡　例
位置不明箇所
石積破壊・撤去箇所
0 5 10 20 30 40 50M

第４図　平面形態設定図

②石積工法の設定

石積工法は現地調査を行うと同時に、写真測量の資料を基に設定した。

城郭石積で確認できる石積工法は野面積、雑割石積及び布積の 3 種類があり、「北のアザナ」から正門にかけての城外側石積は、布積と雑割石積との二層積という、特異な形態を呈している。なお、石積遺構が確認できない箇所については、近傍の石積遺構に倣い設定した。

以下に、各々の工法、形態の特徴及び確認できる箇所について整理した。

a. 野面積

自然石に荒い加工を施した、やや丸みを帯びた石材を使用する。合端が雑な仕上げとなり、目地幅が大きく、また石積の面も凹凸が大きい。

【確認箇所】

・正門から鍵状の城門跡遺構（※南の虎口跡）にかけての石積

・鍵状の城門跡遺構（※南の虎口跡）から「南のアザナ」にかけての石積

・「南のアザナ」から「北のアザナ」にかけての石積（断崖側）

・「北のアザナ」の胸壁

b. 雑割石積

自然石を積み上げる際に粗加工を施した、やや矩形の石材を使用する。合端は比較的整形され、野面積に比べて目地幅も小さく、石積面にも加工が見られる。

【確認箇所】

・「北のアザナ」に接続する城外側石積

・「北のアザナ」から正門にかけての城内側石積

c. 布積

長方形に加工した石材を使用し、横目地を通して積上げる工法である。合端や石積の面は丁寧な加工が施されている。

【確認箇所】

・正門

・「南のアザナ」の城外側石積

d. 布積と雑割石積との二層積

布積の上方に更に雑割石積を施した特異な形態である。

【確認箇所】

・「北のアザナ」から正門にかけての城外側石積

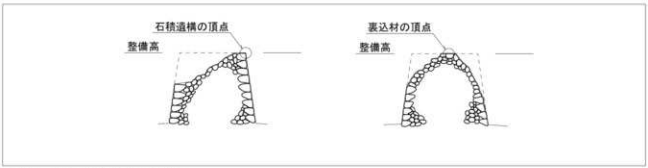
・鍵状の城門跡遺構（※南の虎口跡）の城外側石積

③復元整備高さの設定

復元整備高さは石積遺構の残存状況や保存修理の原則等を踏まえ、石積の安定性の確保や風格ある城郭の再生を図る観点より、以下の点に留意して設定した。

a. 断面における考え方

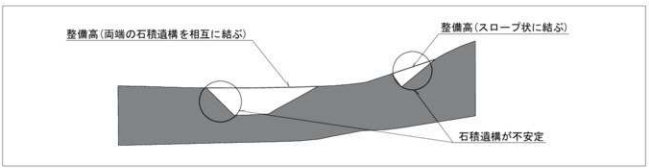
石積遺構または裏込め材の頂点を復元整備の天端高とし、残存石積の原形を失するような積み上げは行わない。



第５図　復元整備高さの設定1

b. 立面における考え方

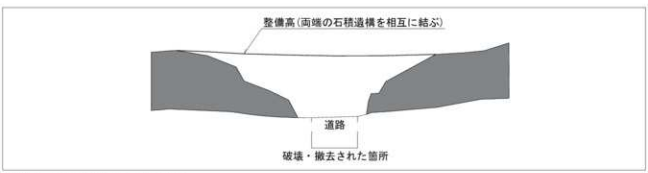
隣り合う石積遺構相互のレベル差（段差）が大きく不安定な状態にある場合には、遺構保護の観点より、緩やかなスロープ状に結び整備する。



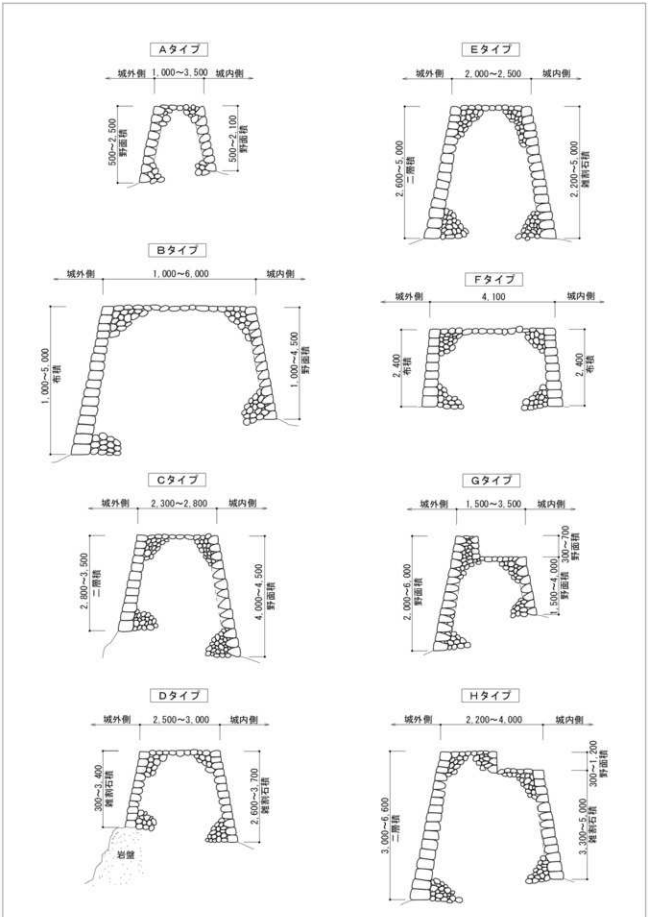
第６図　復元整備高さの設定2

c. 破壊・撤去された箇所の考え方

道路建設により破壊・撤去された箇所は、両端の石積遺構を参考にし、復元整備高さを設定する。



第７図　復元整備高さの設定3


Aタイプ
城外側
1,000～3,500
城内側
500～2,500
野面積
500～2,100
野面積
Eタイプ
城外側
2,000～2,500
城内側
2,600～5,000
二帯積
2,200～5,000
雑割石積
Bタイプ
城外側
1,000～6,000
城内側
1,000～5,000
布積
1,000～4,500
野面積
Fタイプ
城外側
4,100
城内側
2,400
布積
2,400
布積
Cタイプ
城外側
2,300～2,800
城内側
2,800～3,500
二帯積
4,000～4,500
野面積
Gタイプ
城外側
1,500～3,500
城内側
2,200～6,000
野面積
300～700
野面積
1,500～4,000
野面積
Dタイプ
城外側
2,500～3,000
城内側
300～2,400
雑割石積
2,600～3,700
雑割石積
岩盤
Hタイプ
城外側
2,200～4,000
城内側
3,000～6,600
二帯積
300～1,200
野面積
3,300～5,000
雑割石積

第８図　石積断面図

④断面形態の設定

断面形態を構成する諸要素の中から、断面形状および石積工法について整理し、各々の場所における石積タイプを設定した。なお、石積勾配については、石積遺構の状態を踏まえ設定する必要がある。

a. 断面形状

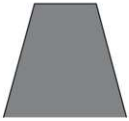
城郭石積の断面形状は下記の 2 種類である。

・胸壁が無い複合断面

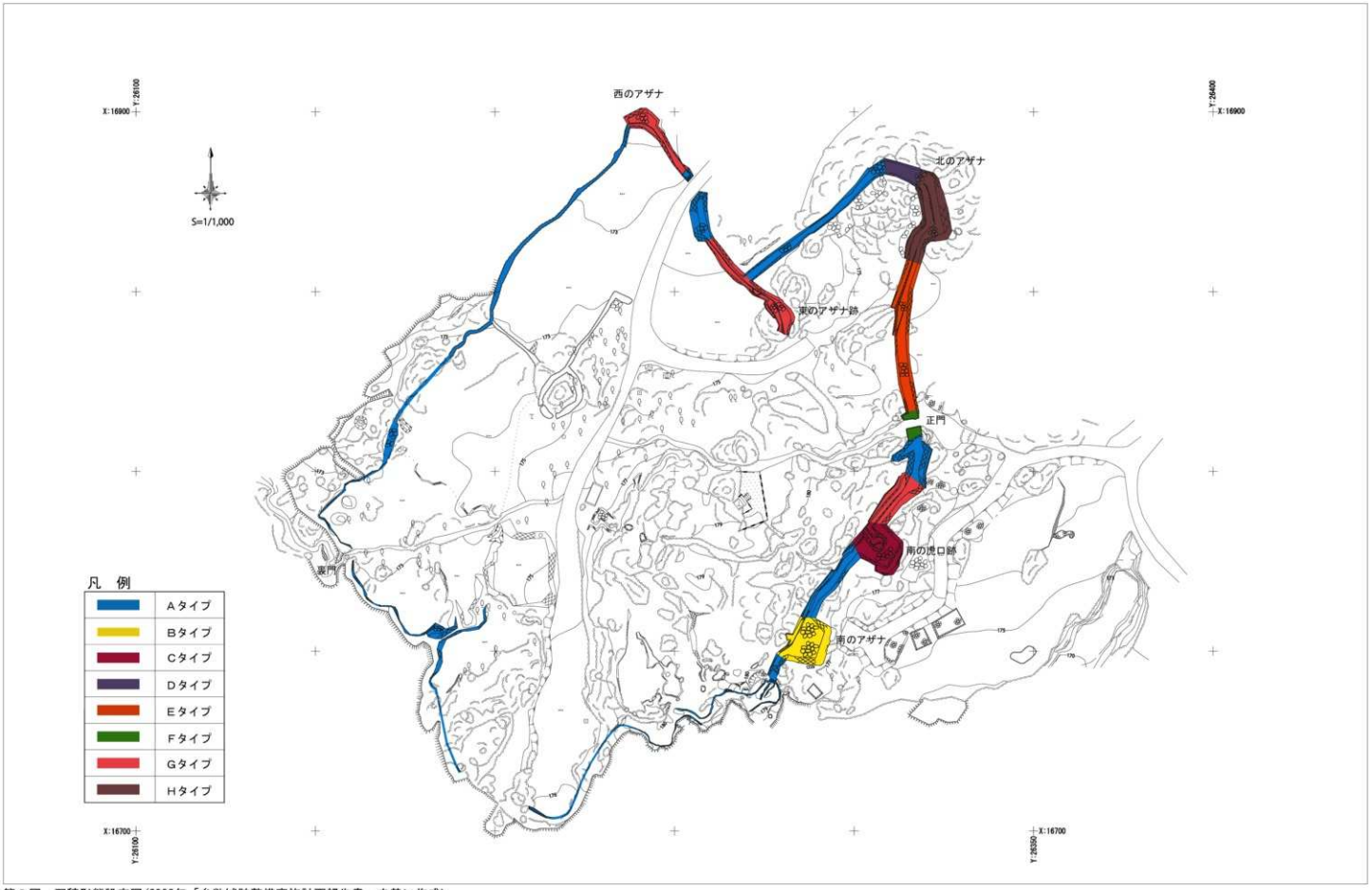
・胸壁が有る障壁断面

b. 石積工法

石積工法は「②石積工法の設定」に倣い設定した。

断面形式	断面形状	石積工法			石積タイプ
		城内側	城外側	胸　壁	
胸壁が無い複合断面		野面積	野面積	―	Aタイプ
		野面積	布　積	―	Bタイプ
		野面積	二層積	―	Cタイプ
		雑割石積	雑割石積	―	Dタイプ
		雑割石積	二層積	―	Eタイプ
		布　積	布　積	―	Fタイプ
胸壁が有る障壁断面		野面積	野面積	野面積	Gタイプ
		雑割石積	二層積	野面積	Hタイプ

第 1 表　石積タイプの区分表



第９図　石積形態設定図（2000年「糸数城跡整備実施計画報告書」を基に作成）

第４節　各年度の事業概要

昭和 61～平成 11 年度の整備事業においては、正門及び西のアザナ～北のアザナ北側城壁までの保存修理を実施した。以下に年度別事業概要を記す。

【昭和 61 年度】

１．事業内容および経過

１）遺構確認調査

城内南西側（A 地区）の遺構確認のため発掘調査を実施した。また、発掘調査後は、G・Q・P 地区城壁下の集石除去及び城壁の形態確認を行った。

２）写真測量委託業務

北のアザナ南側から南の虎口跡北側城壁の写真実測と図化を(株)与那嶺測量設計に委託して実施した。

委託期間：昭和 61 年 11 月 23 日～昭和 62 年 3 月 10 日

委託金額：1,470,000 円

３）糸数城跡城壁立面図縮小版作成

城壁立面図の縮小版作成を(株) 与那嶺測量設計に委託して実施した。

委託期間：昭和 62 年 3 月 10 日～昭和 62 年 3 月 20 日

委託金額：30,000 円

２．事業期間

昭和 61 年 9 月 1 日～昭和 62 年 3 月 28 日

３．事業費

事業費総額　5,005,860 円

【収入の部】		【支出の部】	
国庫補助金	4,000,000 円	賃　　金	2,588,000 円
県費補助金	500,000 円	旅　　費	458,840 円
一 般 財 源	505,860 円	需　用　費	259,020 円
		委　託　料	1,500,000 円
		使用料及び賃借料	200,000 円

【昭和 62 年度】

1．事業内容および経過

1）遺構確認調査

城内南西側（A 地区）の遺構確認のための発掘調査及び南の虎口跡から南のアザナ南側城壁の遺構確認調査を実施した。

2）城壁写真測量一式及び基準点測量委託業務

南の虎口跡から南のアザナ南側城壁の写真実測と図化、城跡内の基準点設置を(株)与那嶺測量設計に委託して実施した。

委託期間：昭和 62 年 12 月 10 日～昭和 63 年 3 月 25 日

委託金額：2,100,000 円

3）城壁修復工事

正門修復を、市教育委員会が合資会社我喜屋石材造園（現：株式会社がきや興産）の石工を雇用して実施した。

実施期間：昭和 62 年 11 月 6 日～昭和 62 年 12 月 26 日

4）植生調査

植生調査を実施した。

2．事業期間

昭和 62 年 5 月 1 日～昭和 63 年 3 月 31 日

3．事業費

事業費総額　10,001,150 円

【収入の部】		【支出の部】	
国庫補助金	8,000,000 円	賃　　金	6,086,500 円
県費補助金	1,000,000 円	報 償 費	100,000 円
一 般 財 源	1,001,150 円	旅　　費	659,070 円
		需 用 費	400,580 円
		委 託 料	2,100,000 円
		工 事 費	655,000 円

【昭和 63 年度】

1．事業内容および経過

1）遺構確認調査

B 地区遺構確認のため、発掘調査を実施した。

2）写真測量委託業務

北のアザナ城壁の写真実測と図化を(株)与那嶺測量設計に委託して実施した。

委託期間：昭和 63 年 11 月 1 日～平成元年 3 月 25 日

委託金額：1,500,000 円

3）城壁修復工事

正門城壁修復を、市教育委員会が合資会社我喜屋石材造園（現：株式会社がきや興産）の石工を雇用して実施した。

実施期間：平成元年 1 月 11 日～平成元年 2 月 13 日

4）植生調査

植生調査を実施した。

2．事業期間

昭和 63 年 5 月 12 日～平成元年 3 月 31 日

3．事業費

事業費総額　12,015,490 円

【収入の部】

国庫補助金	9,600,000 円
県費補助金	1,200,000 円
一 般 財 源	1,215,490 円

【支出の部】

賃　　金	8,718,300 円
報 償 費	100,000 円
旅　　費	565,200 円
需 用 費	482,850 円
委 託 料	1,500,000 円
共 済 費	74,390 円
使用料及び賃借料	574,750 円

【平成元年度】

1．事業内容および経過

1）遺構確認調査

北側城壁（O 地区）の根石確認のため、遺構調査を実施した。

2）写真測量委託業務

北側城壁の写真測量図化を(株)与那嶺測量設計に委託して実施した。

委託期間：平成元年 12 月 15 日～平成 2 年 3 月 26 日

委託金額：1,751,000 円

3）資料整理

発掘調査によって出土した遺物の分類・復元作業を行った。

4）城跡内の写真撮影

クレーン車を賃借して 50m上空から城跡内の写真撮影を行った。

2．事業期間

平成元年 6 月 20 日～平成 2 年 3 月 31 日

3．事業費

事業費総額　12,193,173 円

【収入の部】		【支出の部】	
国庫補助金	9,688,000 円	賃　　金	8,574,600 円
県費補助金	1,211,000 円	旅　　費	445,320 円
一 般 財 源	1,294,173 円	需 用 費	725,053 円
		委 託 料	1,751,000 円
		工事請負費	697,200 円

【平成２年度】

１．事業内容および経過

１）遺構確認調査

西のアザナ城壁（H 地区）の根石確認のため、発掘調査を行った。

２）資料整理

発掘調査によって、出土した遺物の整理を行った。

３）写真測量委託業務

西のアザナから北のアザナに至る城外側城壁の写真測量図化を(株)与那嶺測量設計に委託して実施した。

委託期間：平成 3 年 1 月 21 日～平成 3 年 3 月 26 日

委託金額：1,545,000 円

４）報告書作成

昭和 61・62 年度に実施したＡ地区の発掘調査報告書を作成し、印刷製本業務を(株)南西印刷が実施した。

請負期間：平成 3 年 2 月 21 日～平成 3 年 3 月 28 日

請負金額：1,751,000 円

２．事業期間

平成 2 年 7 月 2 日～平成 3 年 3 月 30 日

３．事業費

事業費総額　10,055,199 円

【収入の部】

国庫補助金	8,000,000 円
県費補助金	1,000,000 円
一 般 財 源	1,055,199 円

【支出の部】

賃　　金	5,752,800 円
旅　　費	356,132 円
需 用 費	2,042,827 円
委 託 料	1,545,000 円
使用料及び賃借料	358,440 円

【平成３年度】

１．事業内容および経過

１）遺構確認調査

西側城壁（I 地区）の遺構調査及び城壁を覆っている残土処理を行った。

２）資料整理

遺構調査によって出土した遺物の整理、トレース、図化、獣魚骨類等の鑑定を行った。

３）写真測量委託業務

東のアザナ跡（平成 6 年度確認・詳細は後述記載）から農道に至る城壁の写真測量図化を(株)与那嶺測量設計に委託して実施した。

委託期間：平成 4 年 2 月 28 日～平成 4 年 3 月 27 日

委託金額：1,545,000 円

２．事業期間

平成 3 年 10 月 15 日～平成 4 年 3 月 31 日

３．事業費

事業費総額　8,055,410 円

【収入の部】		【支出の部】	
国庫補助金	6,400,000 円	賃　　金	5,040,000 円
県費補助金	800,000 円	旅　　費	366,220 円
一 般 財 源	855,410 円	需　用　費	424,190 円
		委　託　料	1,545,000 円
		使用料及び賃借料	680,000 円

【平成４年度】

１．事業内容および経過

１）写真測量委託業務

殿舎跡北西側（H 地区）城壁の写真測量図化を(株)与那嶺測量設計に委託して実施した。

委託期間：平成 5 年 2 月 23 日～平成 5 年 3 月 25 日

委託金額：741,600 円

２）城壁測量設計監理

南のアザナ南側城壁修復において、城内側、城外側の測量設計監理を(株)与那嶺測量設計に委託して実施した。

委託期間：平成 5 年 2 月 23 日～平成 5 年 3 月 25 日

委託金額：278,100 円

３）城壁修復工事

南のアザナ南側城壁修復を(株)がきや興産が請け負って実施した。

工事期間：平成 5 年 2 月 23 日～平成 5 年 3 月 25 日

工事金額：1,854,000 円

４）遺物、資料整理

遺構調査によって出土した遺物の整理を行った。

２．事業期間

平成 4 年 8 月 3 日～平成 5 年 3 月 31 日

３．事業費

事業費総額　10,054,354 円

【収入の部】

国庫補助金	8,000,000 円
県費補助金	1,000,000 円
一 般 財 源	1,054,354 円

【支出の部】

賃　　金	6,355,000 円
旅　　費	338,052 円
需 用 費	158,002 円
委 託 料	2,873,700 円
使用料及び賃借料	329,600 円

【平成５年度】

１．事業内容および経過

１）遺構確認調査

城内南西側（B 地区）の遺構確認のため、発掘調査を行った。

２）城壁測量設計監理

西のアザナ城壁修復において、城内側、城外側の測量設計監理を(株)与那嶺測量設計に委託して実施した。

委託期間：平成 6 年 1 月 20 日～平成 6 年 3 月 20 日

委託金額：458,350 円

３）城壁修復工事

西のアザナ城壁修復を(株)がきや興産が請け負って実施した。

工事期間：平成 6 年 1 月 20 日～平成 6 年 3 月 20 日

工事金額：4,894,000 円

４）遺物、資料整理

発掘調査によって出土した遺物の整理を行った。

２．事業期間

平成 5 年 7 月 1 日～平成 6 年 3 月 31 日

３．事業費

事業費総額　12,062,709 円

【収入の部】

国庫補助金	9,600,000 円
県費補助金	1,200,000 円
一 般 財 源	1,262,709 円

【支出の部】

賃　　金	4,796,000 円
旅　　費	449,524 円
需 用 費	251,835 円
委 託 料	458,350 円
工 事 費	4,894,000 円
使用料及び賃借料	1,213,000 円

【平成６年度】

１．事業内容および経過

１）遺構確認調査

西側城壁（Ⅰ地区）の遺構確認のため、発掘調査を行った。

２）城壁測量設計監理

西側城壁（Ⅰ地区）修復において、城内側、城外側の測量設計監理を(株)与那嶺測量設計に委託して実施した。

委託期間：平成７年２月 17 日～平成７年３月 20 日

委託金額：526,000 円

３）城壁修復工事

西側城壁修復を(株)がきや興産が請け負って実施した。

工事期間：平成７年２月 27 日～平成７年３月 20 日

工事金額：4,400,000 円

４）遺物、資料整理

遺構調査によって出土した遺物の整理を行った。

２．事業期間

平成６年９月１日～平成７年３月 31 日

３．事業費

事業費総額　12,019,156 円

【収入の部】		【支出の部】	
国庫補助金	9,600,000 円	賃　　金	6,369,250 円
県費補助金	1,200,000 円	旅　　費	408,360 円
一般財源	1,219,156 円	需用費	315,546 円
		委託料	526,000 円
		工事費	4,400,000 円

【平成７年度】

当該年度は、補助金 6 月申請にて事業費 12,000,000 円を申請して事業を実施していたが、同年度途中の 9 月に再度補助金申請を行い、工事費及び設計管理委託業務の委託料である事業費 33,578,000 円も合わせて実施した。どちらも国宝重要文化財等保存整備費補助金のため、ここでは事業内容について合わせて記述することとする。

１．事業内容および経過

１）糸数城跡 C 地区発掘調査

糸数城跡の南側に位置する C 地区の発掘調査を行った。

２）斜面崩落防止調査設計（土質調査）

糸数城跡の南側、斜面崩落防止工事予定箇所の土質調査を(株)協和建設コンサルタントに委託して実施した。

委託期間：平成 7 年 11 月 1 日～平成 7 年 12 月 20 日

委託金額：4,800,000 円

３）設計監理

糸数城跡南側の斜面崩落防止工事において、設計監理を(株)協和建設コンサルタントに委託して実施した。

委託期間：平成 8 年 2 月 9 日～平成 8 年 3 月 28 日

委託金額：1,578,000 円

４）糸数城跡斜面崩落防止工事

糸数城跡の南側、崩落の恐れのある琉球石灰岩塊の崩落防止工事を(有)宮平組が請け負って実施した。

工事期間：平成 8 年 2 月 9 日～平成 8 年 3 月 28 日

工事金額：32,000,000 円

５）遺物、資料整理

発掘調査によって出土した遺物の整理を行った。

２．事業期間

平成 7 年 7 月 1 日～平成 8 年 3 月 29 日（6 月申請）

平成 8 年 1 月 10 日～平成 8 年 3 月 31 日（9 月申請）

３．事業費

事業費総額　45,639,857 円

【収入の部】

国庫補助金	38,141,000 円
※内、6 月申請	9,600,000 円
9 月申請	28,541,000 円
県費補助金	3,718,000 円
一 般 財 源	3,780,857 円

【支出の部】

賃　　金	6,046,250 円
旅　　費	495,896 円
需 用 費	649,711 円
委 託 料	6,378,000 円
※内、9 月申請	1,578,000 円
工 事 費	32,000,000 円
使用料及び賃借料	70,000 円

図版 1．斜面崩落箇所近景（東側より）

図版 2．斜面崩落箇所近景（西側より）

【平成８年度】

１．事業内容および経過

１）糸数城跡Ｃ地区及びＩ地区発掘調査

糸数城跡Ｃ地区と城壁修復箇所の根石の検出（Ｉ地区）の発掘調査を行った。

２）設計監理

東のアザナ跡（平成６年度確認・詳細は後述記載）城壁修復工事において、設計監理を(株)アイピー計画に委託して実施した。

委託期間：平成９年１月 20 日～平成９年３月 25 日

委託金額：600,000 円

３）城壁修復工事

東のアザナ跡の城壁修復工事を(株)がきや興産が請け負って実施した。

工事期間：平成９年２月３日～平成９年３月 25 日

工事金額：5,000,000 円

４）遺物・資料整理

発掘調査によって出土した遺物の整理を行った。

２．事業期間

平成８年７月１日～平成９年３月 31 日

３．事業費

事業費総額　12,005,264 円

【収入の部】

国庫補助金	9,600,000 円
県費補助金	1,200,000 円
一般財源	1,205,264 円

【支出の部】

賃　　金	5,658,750 円
旅　　費	316,524 円
需用費	399,990 円
委託料	600,000 円
工事費	5,000,000 円
使用料及び賃借料	30,000 円

【平成９年度】

１．事業内容および経過

１）糸数城跡Ｂ地区及びＫ地区発掘調査

糸数城跡Ｂ地区と城壁修復箇所の根石の検出（Ｋ地区）の発掘調査を行った。

２）設計監理

北のアザナへ延びる城壁（Ｋ・Ｏ地区）城壁修復工事において、設計監理を(株)アイビー計画に委託して実施した。

委託期間：平成 10 年 2 月 23 日～平成 10 年 3 月 27 日

委託金額：800,000 円

３）城壁修復工事

北のアザナへ延びる城壁（Ｋ・Ｏ地区）の城壁修復工事を(株)がきや興産が請け負って実施した。

工事期間：平成 10 年 2 月 23 日～平成 10 年 3 月 27 日

工事金額：7,738,500 円

４）遺物・資料整理

発掘調査によって出土した遺物の整理を行った。

２．事業期間

平成 9 年 7 月 1 日～平成 10 年 3 月 31 日

３．事業費

事業費総額　15,048,485 円

【収入の部】

国庫補助金	12,000,000 円
県費補助金	1,500,000 円
一般財源	1,548,485 円

【支出の部】

賃金	5,443,674 円
旅費	348,514 円
需用費	623,297 円
委託料	800,000 円
工事費	7,738,500 円
使用料及び賃借料	94,500 円

【平成 10 年度】

1．事業内容および経過

1）糸数城跡 B 地区及び I 地区発掘調査

糸数城跡 B 地区と城壁修復箇所の根石の検出（I 地区）の発掘調査を行った。

2）設計監理

平成 9 年度に引き続き、北のアザナへ延びる城壁（N・O 地区）の城壁修復工事において、設計監理を(株)国建に委託して実施した。

委託期間：平成 11 年 2 月 3 日～平成 11 年 3 月 30 日

委託金額：1,575,000 円

3）城壁修復工事

北のアザナへ延びる城壁（K・O 地区）の城壁修復工事を(株)武村石材建設が請け負って実施した。

工事期間：平成 11 年 3 月 10 日～平成 11 年 3 月 30 日

工事金額：4,725,000 円

4）遺物・資料整理

発掘調査によって出土した遺物の整理を行った。

2．事業期間

平成 10 年 7 月 1 日～平成 11 年 3 月 31 日

3．事業費

事業費総額　12,036,007 円

【収入の部】

国庫補助金	9,600,000 円
県費補助金	1,200,000 円
一 般 財 源	1,236,007 円

【支出の部】

賃　　金	4,398,196 円
報 償 費	37,000 円
旅　　費	500,666 円
需 用 費	516,645 円
委 託 料	1,575,000 円
工 事 費	4,725,000 円
使用料及び賃借料	283,500 円

【平成 11 年度】

1．事業内容および経過

1）糸数城跡 K・O 地区及び P 地区遺構確認調査

樹木による孕みや崩落が著しい北のアザナの城壁修復に先立ち、同箇所の城壁ライン及び構築時期を確認するための遺構調査を実施した。

調査終了後、平面図及び断面図作成のための測量も行った。

2）遺物・資料整理

発掘調査によって出土した遺物の整理を行った。

3）設計監理

遺構調査の成果等を基に整備委員会に諮り、北のアザナ城壁修復工事の設計監理を(株)国建に委託して実施した。

委託期間：平成 11 年 11 月 4 日～平成 12 年 3 月 24 日

委託金額：1,575,000 円

4）城壁修復工事

北のアザナ城壁修復工事を(株)武村石材建設が請け負って実施した。

工事期間：平成 12 年 2 月 1 日～平成 12 年 3 月 24 日

工事金額：4,725,000 円

2．事業期間

平成 11 年 5 月 24 日～平成 12 年 3 月 31 日

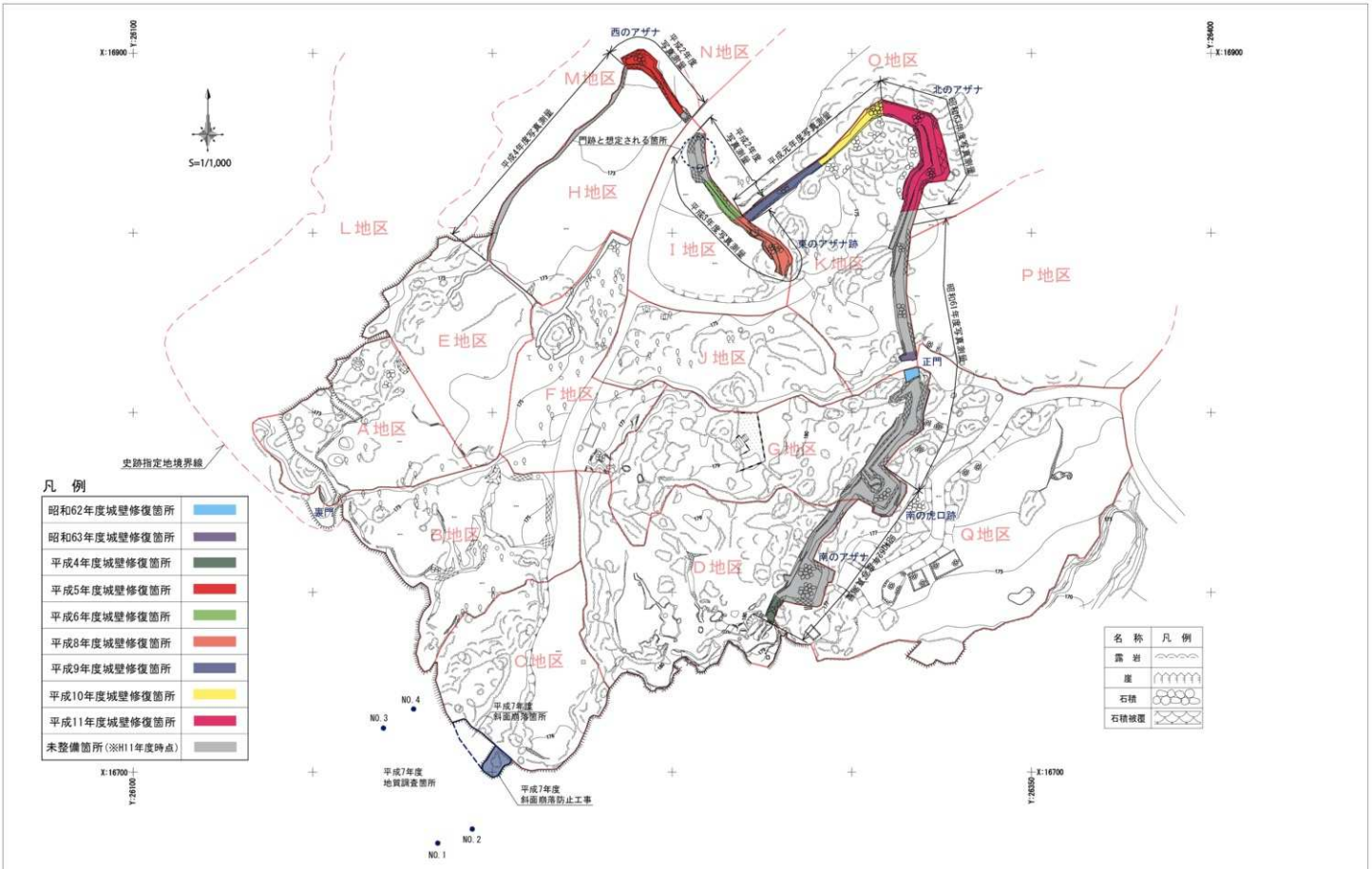
3．事業費

事業費総額　11,849,168 円

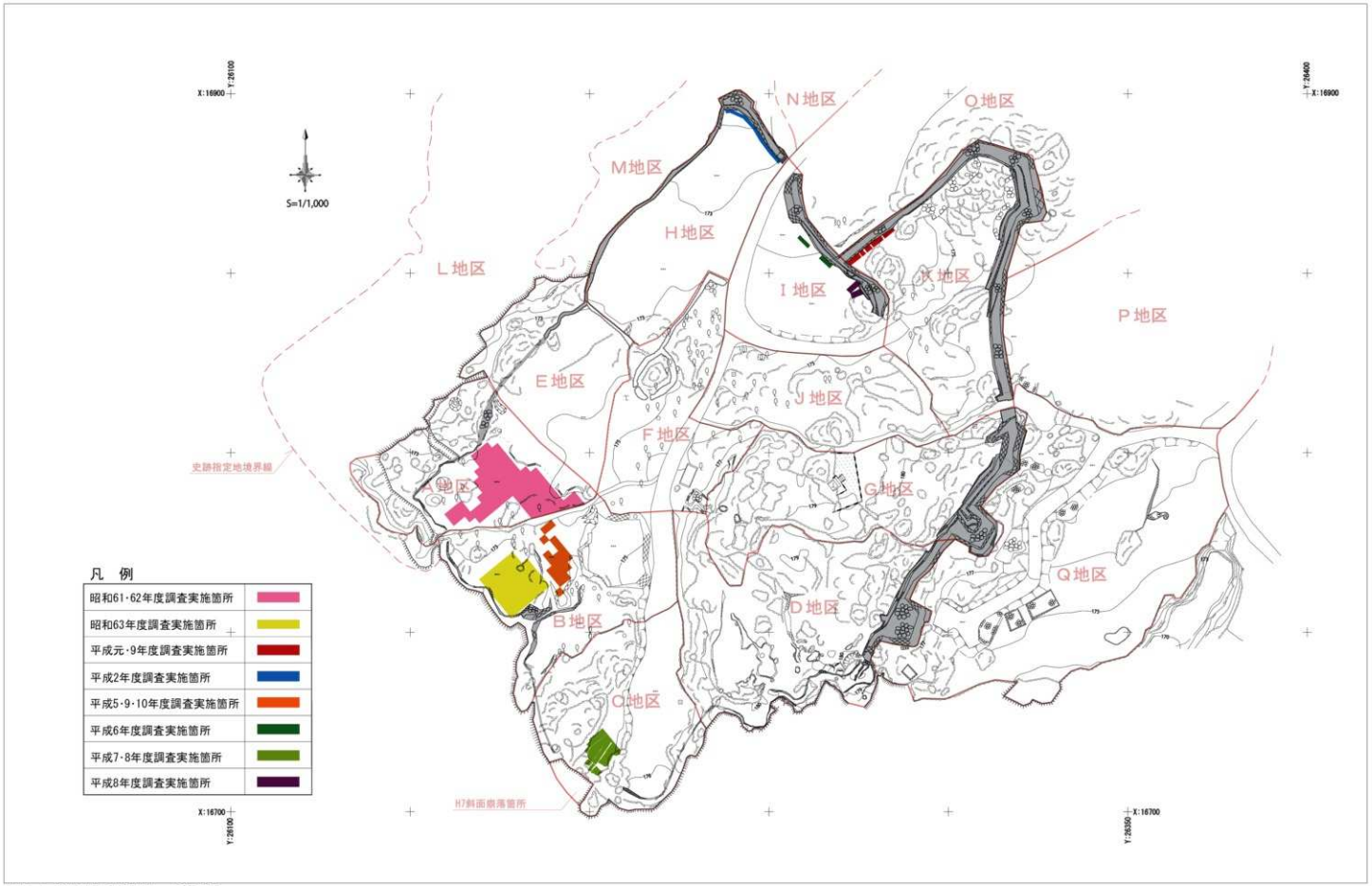
【収入の部】		【支出の部】	
国庫補助金	9,472,000 円	賃　　金	4,131,750 円
県費補助金	1,184,000 円	報 償 費	44,500 円
一 般 財 源	1,193,168 円	旅　　費	406,418 円
		需 用 費	683,000 円
		委 託 料	1,575,000 円
		工 事 費	4,725,000 円
		使用料及び賃借料	283,500 円

第２表　糸数城跡保存修理事業年度別一覧表

年度	総事業費（円）	国庫補助金（円）	県費補助金（円）	市負担（円）	主な内容
昭和 61	5,005,860	4,000,000	500,000	505,860	・遺構調査 ・写真測量 ・城壁立面図縮小版作成
昭和 62	10,001,150	8,000,000	1,000,000	1,001,150	・遺構調査 ・写真測量及び基準点測量 ・城壁修復工事 ・植生調査
昭和 63	12,015,490	9,600,000	1,200,000	1,215.490	・遺構調査 ・写真測量 ・城壁修復工事 ・植生調査
平成元	12,193,173	9,688,000	1,211,000	1,294,173	・遺構調査 ・写真測量
平成 2	10,055,199	8,000,000	1,000,000	1,055,199	・遺構調査 ・写真測量 ・発掘調査報告書刊行
平成 3	8,055,410	6,400,000	800,000	855,410	・遺構調査 ・写真測量
平成 4	10,054,354	8,000,000	1,000,000	1,054,354	・写真測量 ・城壁修復工事
平成 5	12,062,709	9,600,000	1,200,000	1,262,709	・遺構調査 ・城壁修復工事
平成 6	12,019,156	9,600,000	1,200,000	1,219,156	・遺構調査 ・城壁修復工事
平成 7	45,639,857	38,141,000	3,718,000	3,780,857	・遺構調査 ・斜面崩落防止工事
平成 8	12,005,264	9,600,000	1,200,000	1,205,264	・遺構調査 ・城壁修復工事
平成 9	15,048,485	12,000,000	1,500,000	1,548,485	・遺構調査 ・城壁修復工事
平成 10	12,036,007	9,600,000	1,200,000	1,236,007	・遺構調査 ・城壁修復工事
平成 11	11,849,168	9,472,000	1,184,000	1,193,168	・遺構調査 ・城壁修復工事
合計	188,041,282	151,701,000	17,913,000	18,427,282	



第10図　糸数城跡年度別整備箇所



第11図　糸数城跡発掘グリッド設定図

第３章　各整備状況

第１節　昭和 61 年度整備

史跡糸数城跡保存修理事業始動にあたる当該年度は、昭和 55 年度から 59 年度にかけて公有化した指定地内の遺構調査、城壁の写真測量を実施した。実施内容は以下のとおりである。

１．遺構調査

遺構調査は、城内の裏門北西側（A 地区）約 350 m² を対象として実施した。詳細については、『糸数城跡－発掘調査報告書Ⅰ－』(1990 年）において成果を報告している。遺構から 32 基の柱穴が確認されており、これらは掘立柱の建物跡と考えられている。遺物は伊波式土器、グスク土器、白磁、青磁、褐釉陶器、瓦質土器、金属製品、玉類、骨製品、貝製品等が出土した。

また、A 地区発掘調査後は、4 地区の城壁下の集石除去作業に着手し、城壁の形態や石積工法等の確認を行った。

P 地区では、正門南側城壁下の集石除去の際、城壁は野面積だが、下部は高さ 1m 程の切石積で積まれ、二層積になっていることが確認できた。また、集石は切石積を保護するように、城壁から幅 3m 程の範囲に斜面を形成するように積まれていた。

K 地区においては、正門から北側に約 5m の箇所で包含層の一部発掘を行ったところ、グスク土器や青磁片等が出土した。また、正門において、表土より 10～15cm 程の発掘したところ、歩道には自然の岩盤が利用されており、石畳等の状況は確認できなかった。遺物は、グスク土器や青磁・白磁等が若干出土した。

G 地区では、正門南側城内の集石除去を行った際に、集石は全体的に径 25cm 程の自然礫で構成されているが中には切石も若干見られた。集石の下部では遺物が多量に出土しており、青磁・瓦器・貝・獣魚骨等、種類も豊富であった。マガキガイが主体の貝だまりの検出や石材（ニービ）1 点が出土した。

H 地区の殿舎跡とされる場所では、地表面にて琉球石灰岩の礎石を確認した。

２．写真測量

整備事業開始当初の正門の現況は、雑木等の樹根が石垣の隙間や割れ目に食い入り、5～25cm も隙間のある崩れがあり、城壁も相当傾いていたことから崩落の危険があった。また、正門から北のアザナへ向かう石垣には、戦後建設された道路（現在は道路廃止により里道）開通のため幅約 5.5m にわたって完全に破壊、撤去された箇所があり、これらの箇所の原状回復の必要があることから、この範囲を含む北のアザナ南側城壁から南の虎口北側城壁までの城壁写真測量を実施した（第 13～20 図）。また、その成果を基に城壁立面図の縮小版を作成した。

図版 3. 測量箇所（正門南側城壁　南側より）

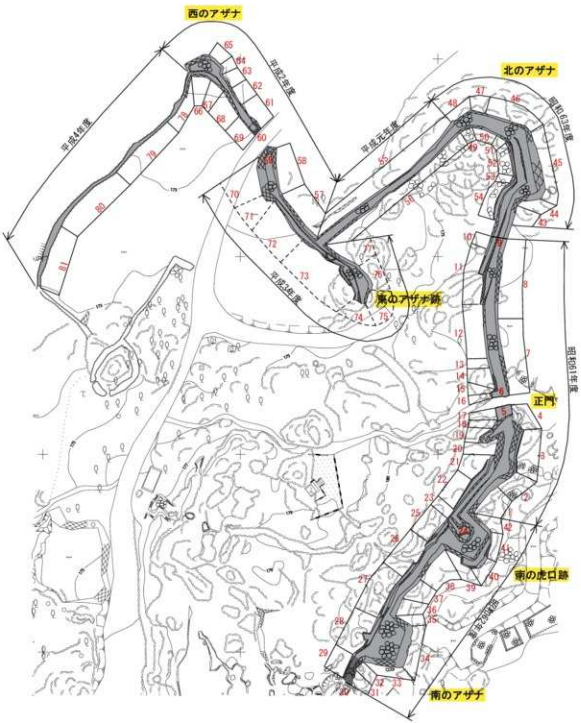
図版 4. 測量箇所（南の虎口跡　北側より）

図版 5. 測量箇所（正門北側　南側より）

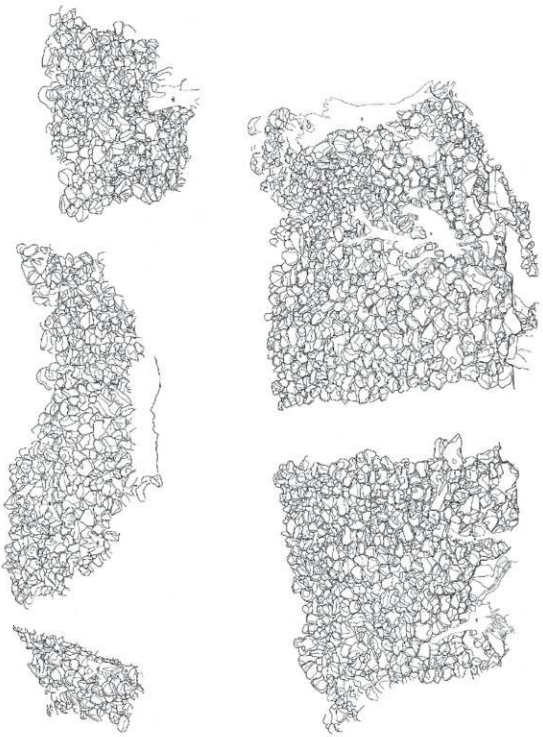
図版 6. 測量箇所（城外正門　東側より）

図版 7. 測量作業状況（北側より）

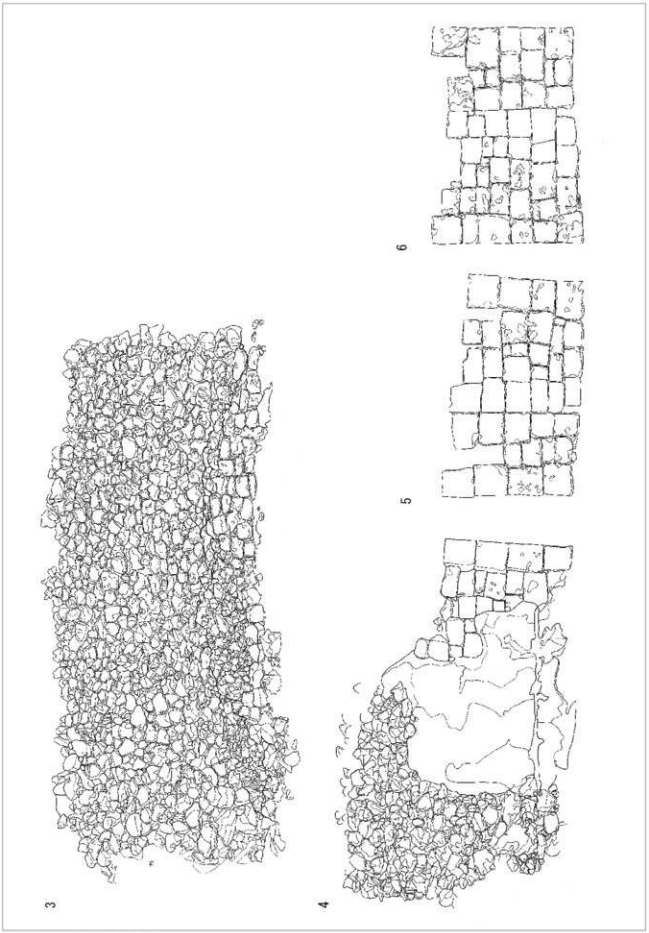
図版 8. 測量箇所（城内正門北側　南側より）



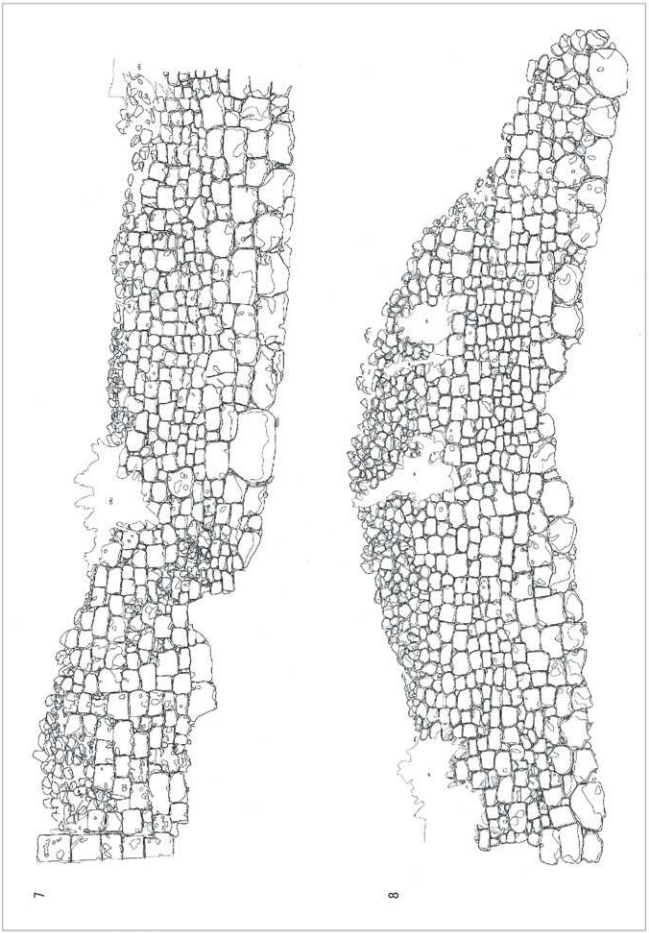
第12図　年度別測量箇所一覧図



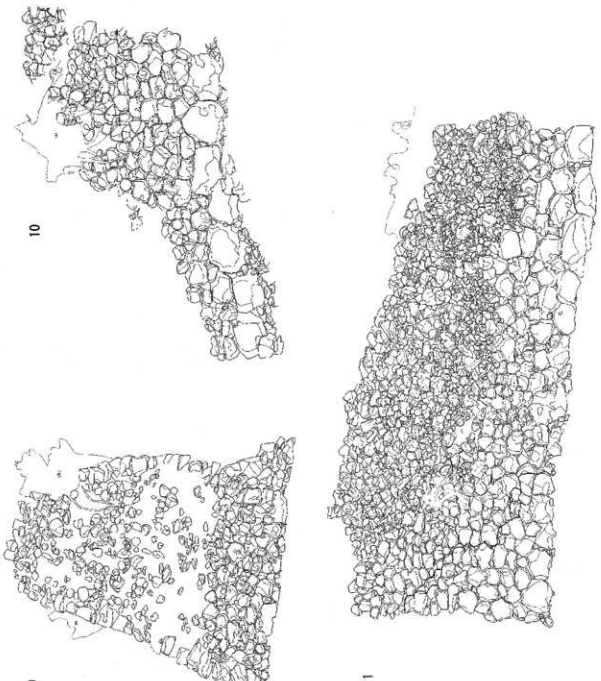
第13図　昭和61年度 城壁立面図1



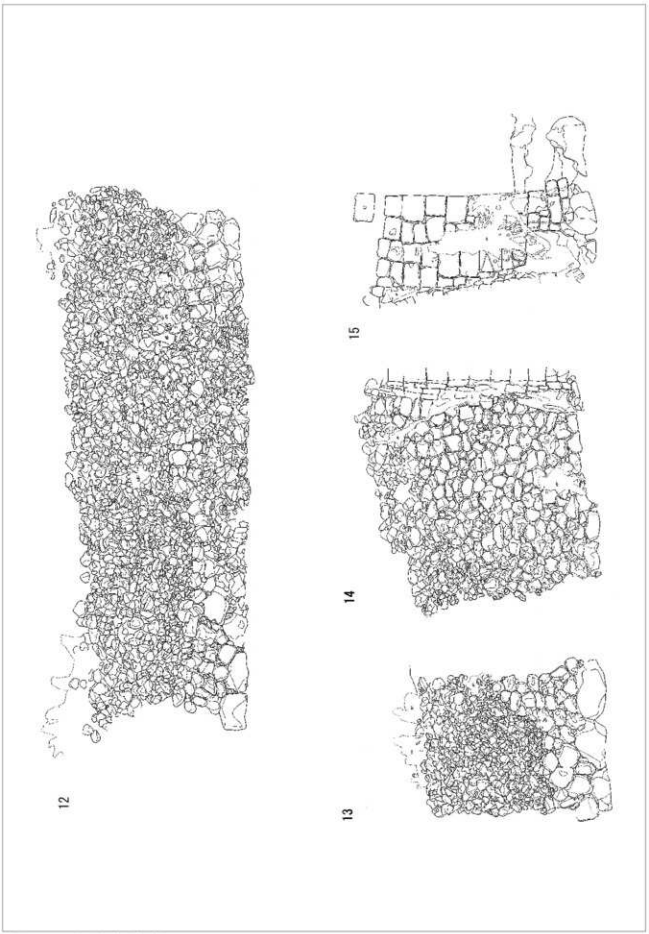
第14図　昭和61年度 城壁立面図2



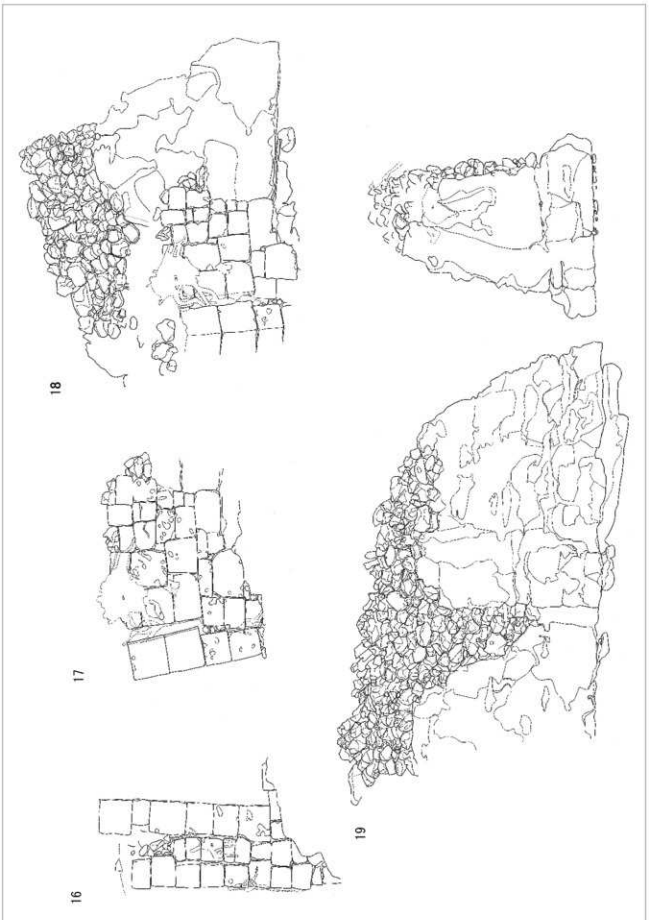
第15図　昭和61年度 城壁立面図3



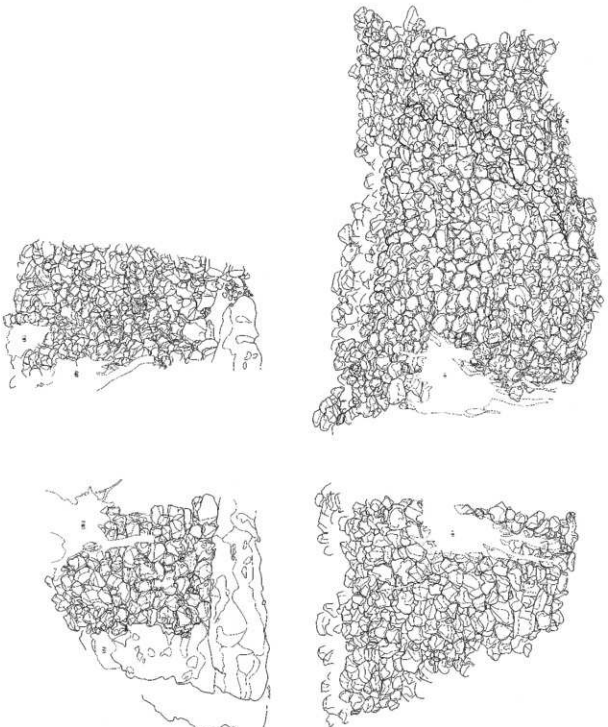
第16図　昭和61年度 城壁立面図4



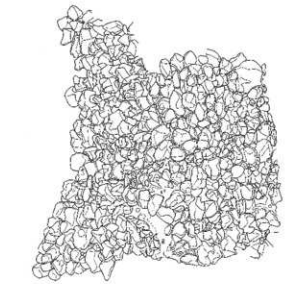
第17図　昭和61年度 城壁立面図5

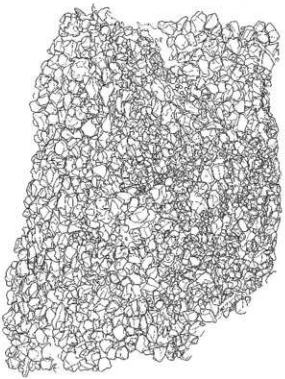


第18図　昭和61年度 城壁立面図6

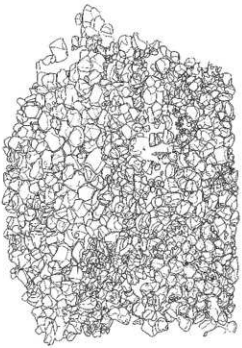


第19図　昭和61年度 城壁立面図7





22



23

第20図　昭和61年度 城壁立面図8

第２節　昭和 62 年度整備

当該年度は、遺構調査、城壁写真測量、城壁修復工事、植生調査を実施した。実施内容は以下のとおりである。

１．遺構調査

前年度に引き続き、城内の裏門北西側（A 地区）グリッドをさらに東西に調査区を広げて遺構調査を実施した。また、D・Q 地区にて草木の伐採及び城壁露出作業を行い、崩れた石の除去を実施した。その際、グスク土器、白磁、青磁、カムィヤキ、褐釉陶器、陶質土器、沖縄産施釉陶器等を表土から採取した。

２．城壁写真測量一式及び基準点測量委託業務

前年度測量箇所の南側に位置する南の虎口跡から南のアザナ南側城壁の現況を把握するため、写真測量とその図化を昭和 62 年 12 月 10 日～昭和 63 年 3 月 25 日にわたって実施した（第 21～第 27 図）。また、城内の 6 箇所に基準点を設置した。

３．城壁修復

正門は東に向いて開いた門であり、櫓門造りの古い形式のものである。現在、櫓はなく両側に切石積が残っている。城壁が前方に大きく傾き、崩落の危険があったため、2 年にわたって、教育委員会が合資会社我喜屋石材造園（現：株式会社がきや興産）の石工を雇用し、修復工事を実施した。本年度は、昭和 62 年 11 月 6 日～12 月 26 日の期間で、城外から正門に向かって南側の城壁修復工事を実施した。正門の解体時、面石にはナンバリングを行い、積み直しの際には元の位置に戻すようにした。裏込め材を除去し、城壁の底部清掃を行ったところ、平石が置かれていることを確認した。勾配及び修復天端高については、残存する遺構を根拠として積み直しを実施した。工事の際、修復された範囲を明示するため、遺構との境界にはステンレス板を設置した。

４．植生調査

糸数城内の拝所（糸数城之嶽）周辺を対象とした植生調査が松本好郎氏により実施された。その成果を『糸数城跡の植生調査報告書』（1988 年 3 月）にまとめている。

図版 9．正門修復前（城外　北東側より）

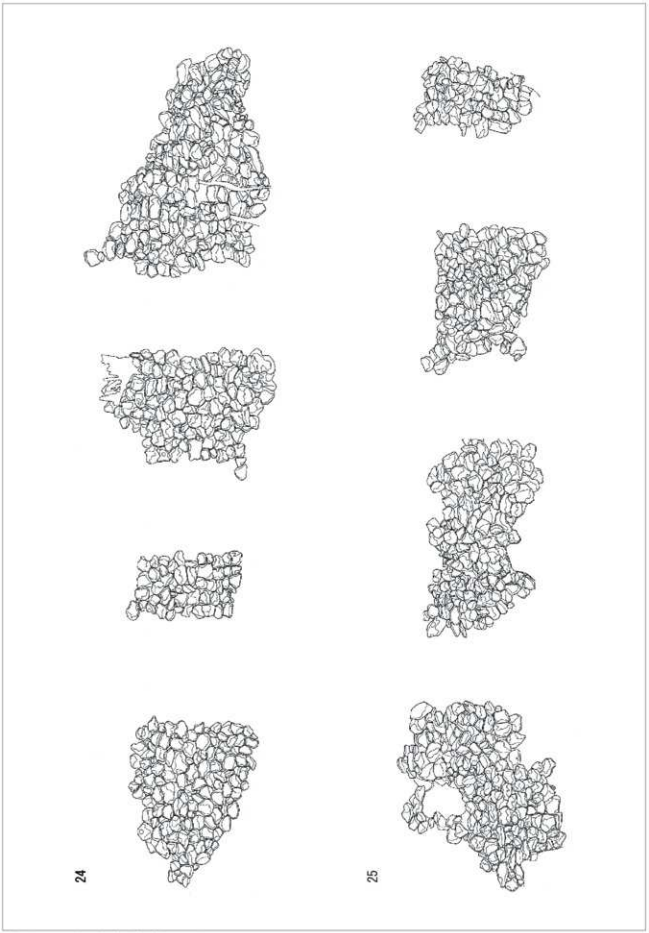
図版 10．正門修復前（城外　南東側より）

図版 11．測量箇所（南のアザナ　北側より）

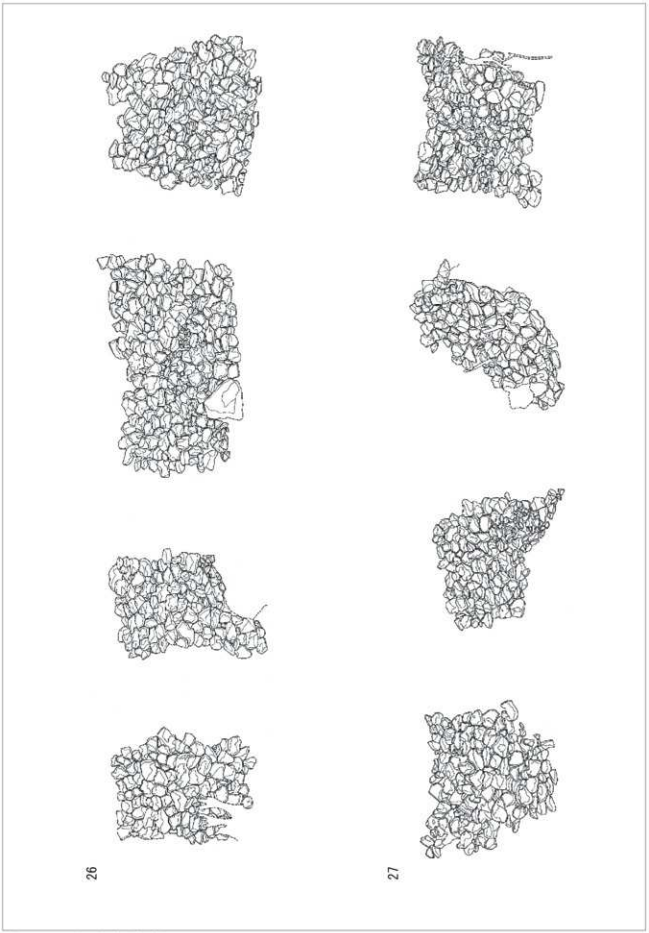
図版 12．測量箇所（南の虎口跡　東側より）

図版 13．城壁露出作業（D地区　南側より）

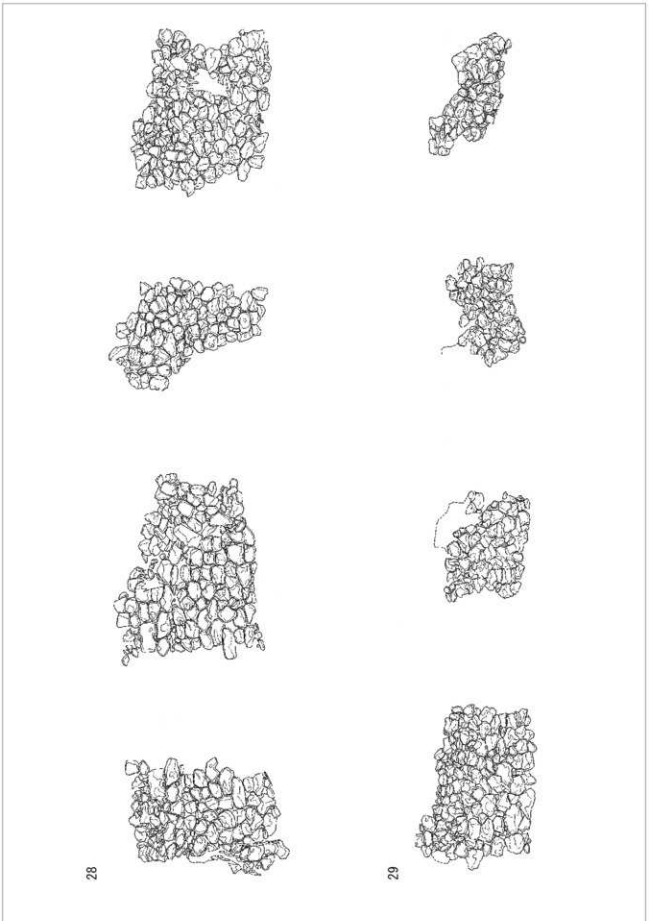
図版 14．城壁露出作業（Q地区　南側より）



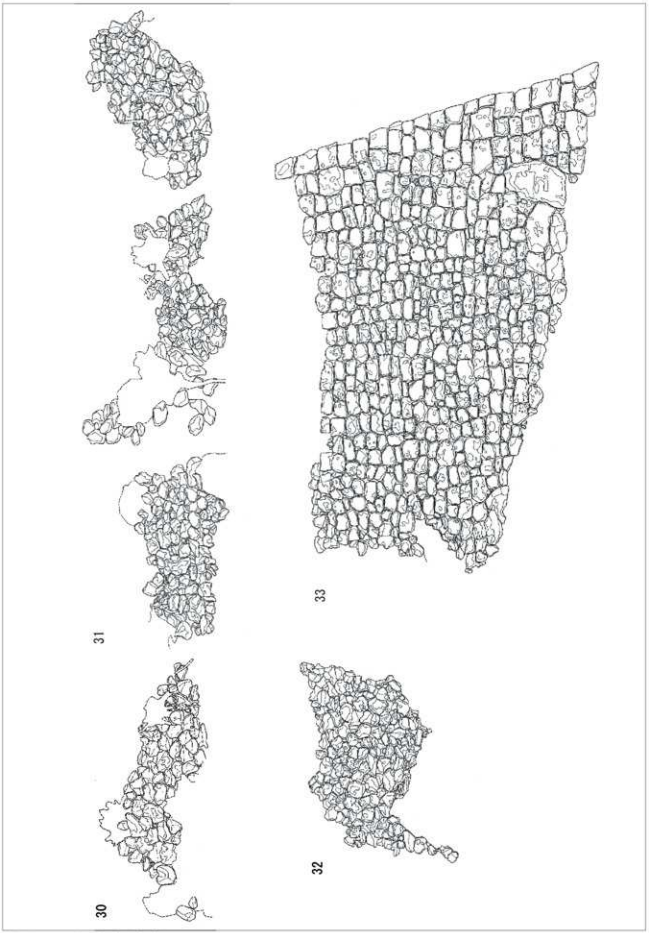
第21図　昭和62年度 城壁立面図1



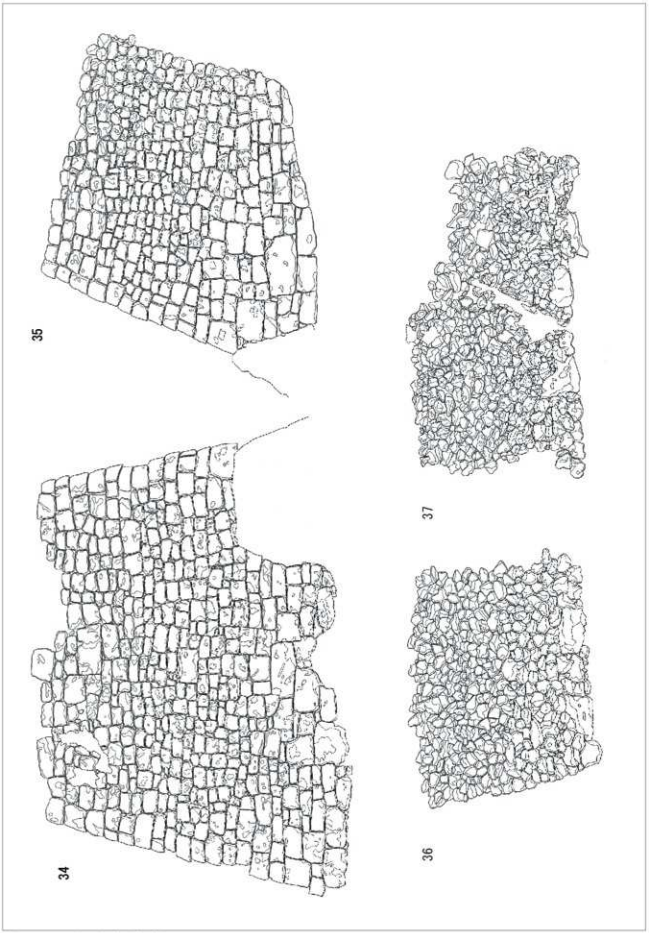
第22図　昭和62年度 城壁立面図2



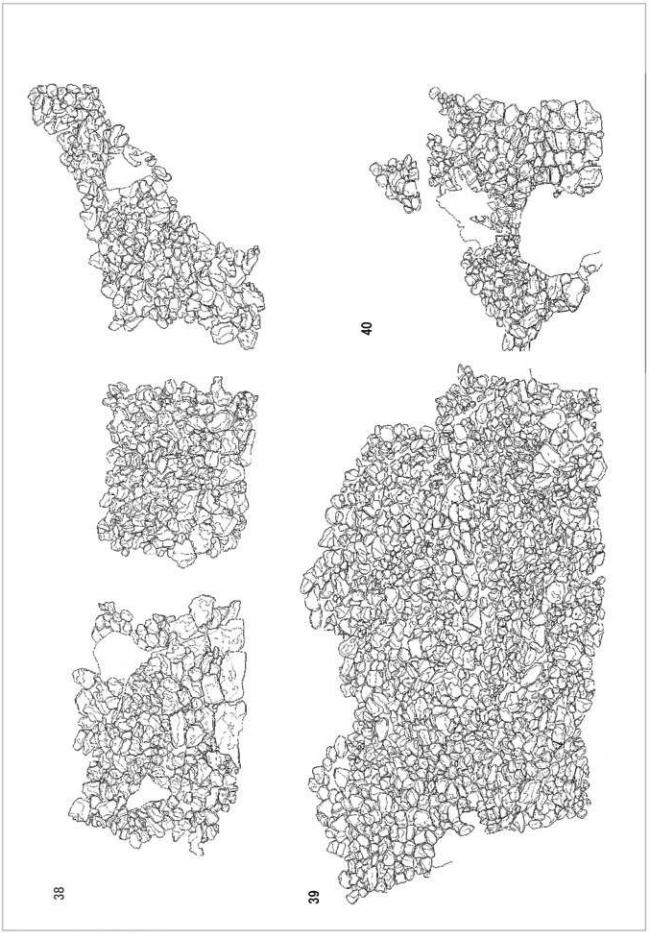
第23図　昭和62年度 城壁立面図3



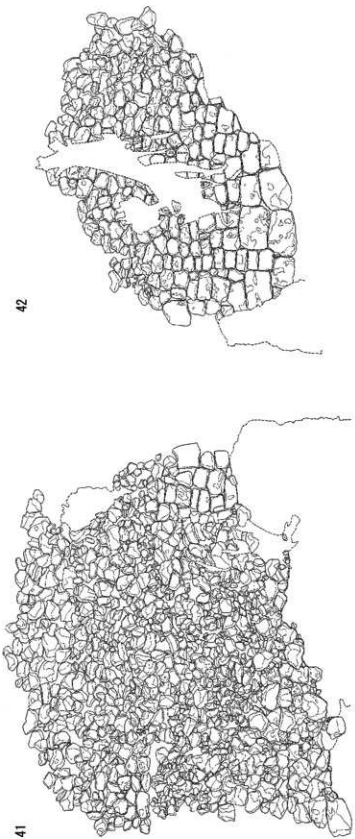
第24図　昭和62年度 城壁立面図4



第25図　昭和62年度 城壁立面図5



第26図　昭和62年度 城壁立面図6



第27図　昭和62年度 城壁立面図7

第３節　昭和 63 年度整備

当該年度は、遺構調査、城壁写真測量、城壁修復工事、植生調査を実施した。実施内容は以下のとおりである。

１．遺構調査

城内の裏門南西側（B 地区）を対象とし、昭和 63 年 5 月 1 日～平成元年 3 月 31 日の期間で実施した。詳細については、今後刊行予定である発掘調査報告書にて記述する。遺物は、グスク土器、白磁、青磁、カムィヤキ、褐釉陶器、陶質土器、沖縄産施釉陶器が出土した。

また、I 地区の城壁清掃を行っており、その際にもカムィヤキ、グスク土器、青磁、褐釉陶器等を採取した。

２．城壁写真測量

前年度測量箇所の北側に位置する北のアザナ城壁の現況を把握するため、城壁の写真実測と図化を昭和 63 年 11 月 1 日～平成元年 3 月 25 日にわたって実施した（第 28～32 図）。

３．城壁修復

前年度に引き続き、平成元年 1 月 11 日～2 月 13 日の期間で、城外側から正門に向かって北側城壁の修復工事を実施した。前年度と同様に、面石にはナンバリングを行い、勾配及び修復天端高についても残存する遺構を根拠として解体、積み直しを実施し、遺構との境界にはステンレス板を設置した。正門の石積は、首里城より貰ってきた切石を上部の不足している部分の積み直しに利用した。当該年度で、正門の修復工事が完了した。

４．植生調査

1989 年 1～3 月にかけて、糸数城跡城郭内の植生調査を日越国昭氏が実施した。城内 C～F・H・J・K 地区を調査対象とし、各地区に出現する植物の記録を行った。調査結果は、本地域で見られるススキ群落と常緑広葉樹林は、沖縄本島南部地域の琉球石灰岩地域で広く見られるリュウキュウガキ－ナガミボチョウジ群団に含まれることが判明した。詳細については、『糸数城跡の植生調査報告書』（1989 年 3 月）にまとめられている。

図版 15．正門修復工事（城内　南西側より）

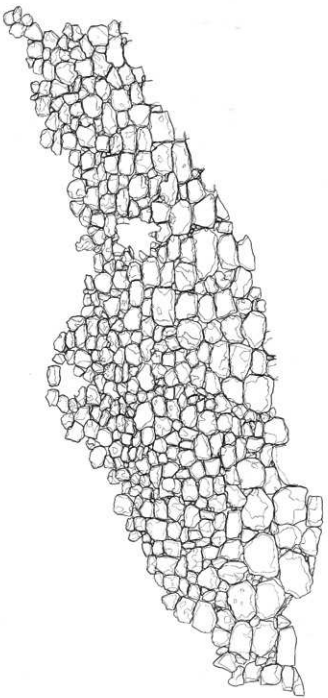
図版 16．正門修復工事（城内　南西側より）

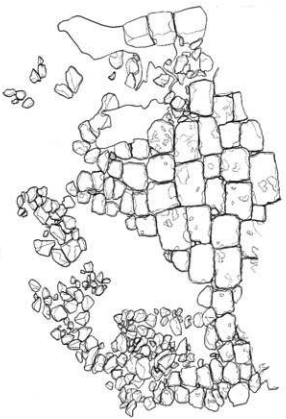
図版 17．正門修復工事（南側より）

図版 18．ナンバリング状況

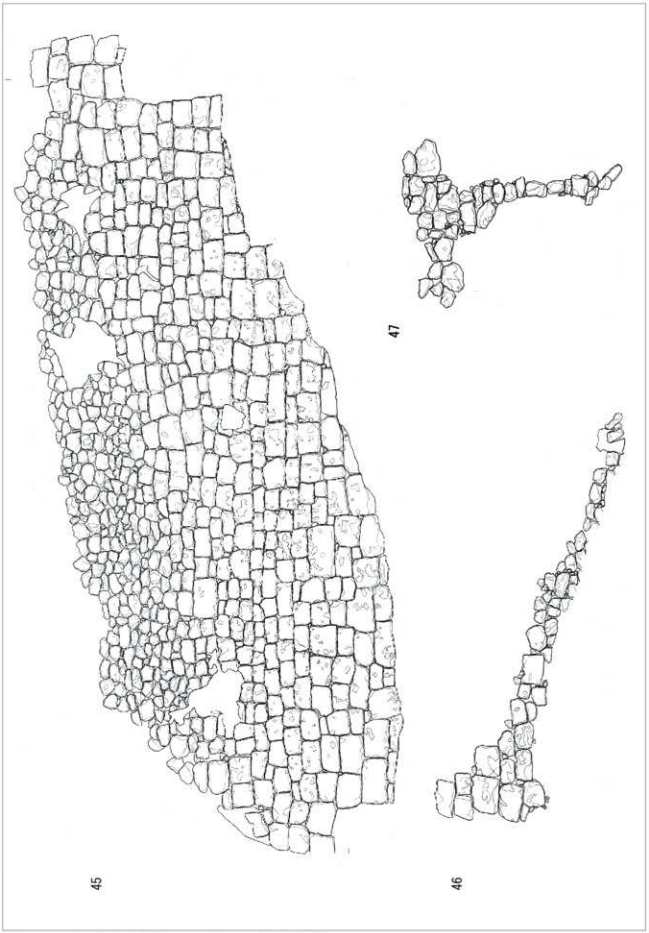
図版 19．工事竣工状況（城外　東側より）

図版 20．工事竣工状況（城内　南西側より）



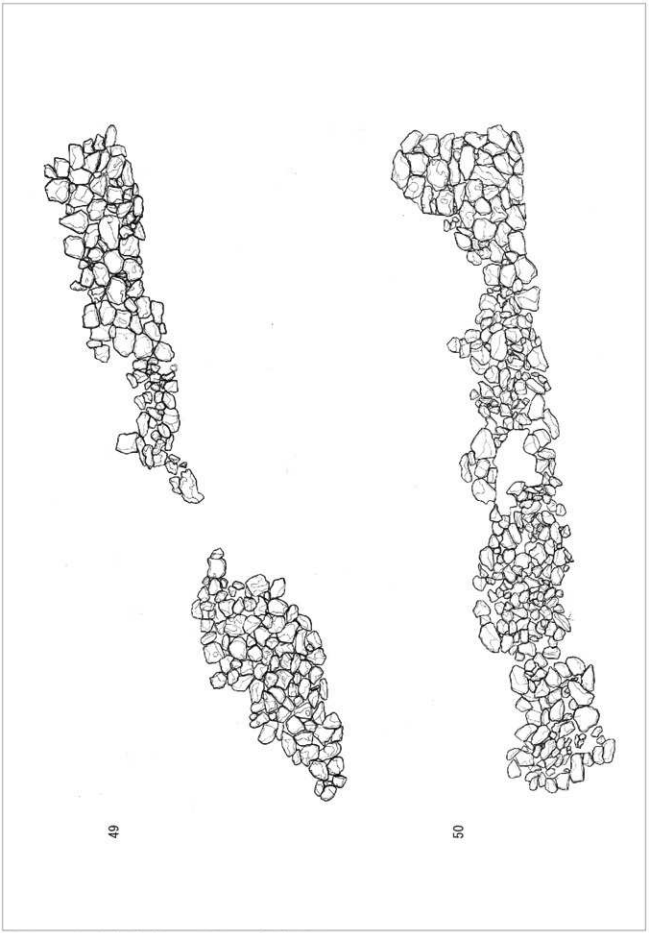


第28図　昭和63年度 城壁立面図1(北のアザナ城外側)

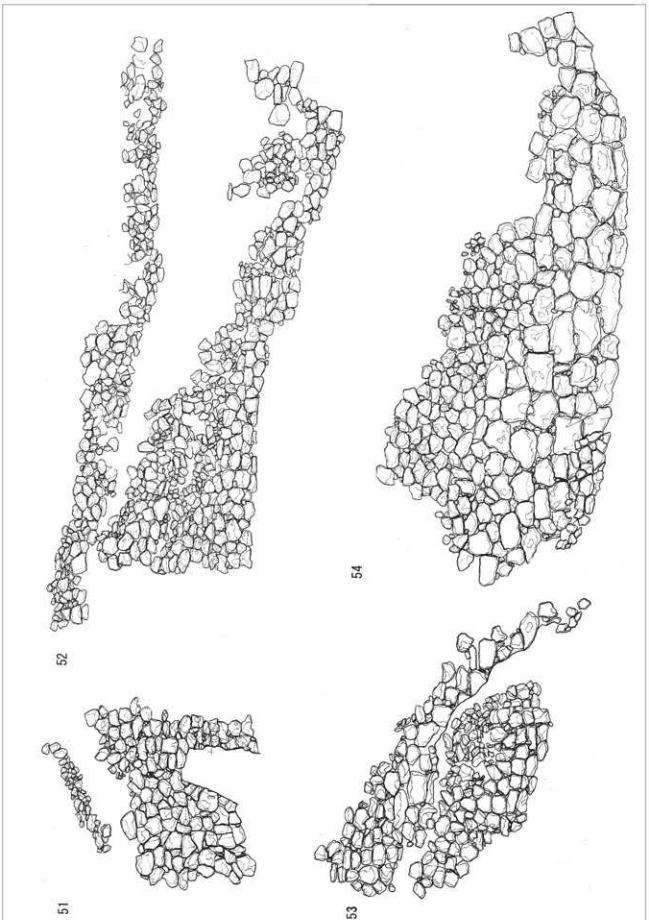


第29図　昭和63年度 城壁立面図2(北のアザナ城外側)

第30図　昭和63年度 城壁立面図3(北のアザナ城外側)



第31図　昭和63年度 城壁立面図4(北のアザナ城内側)



第32図　昭和63年度 城壁立面図5(北のアザナ城内側)

第４節　平成元年度整備

当該年度は、遺構調査、城壁写真測量、植生調査を実施した。実施内容は以下のとおりである。また、『糸数城跡及び周辺基本構想』を策定した。

１．北のアザナ遺構調査

前年度に写真測量を実施した K 地区の北のアザナの北西側城内側城壁の発掘調査を実施した。詳細については、今後刊行予定の整備事業に伴う発掘調査報告書にて記述する。また、北のアザナ北西側城外側城壁及び南東側（道路側）城壁を対象とし、根石の検出及び城壁から崩れた石の除去を実施した。遺物は、発掘調査のテストピット内からグスク土器、青磁、染付、褐釉陶器、沖縄産施釉陶器、沖縄産無釉陶器等が出土した。

２．城壁写真測量

前年度測量箇所の続きである北のアザナ北西側城壁の現況を把握するため、城壁の写真実測と図化を平成元年 12 月 15 日～平成 2 年 3 月 26 日にわたって実施した（第 33 図）。

３．城壁内の写真撮影

クレーン車を借用し、50m 上空から城内の撮影を行った。

４．植生調査

前年度の調査に引き続き、委託によって植生調査を実施した。今回は、城外 L～Q 地区を調査対象とした。その成果を『糸数城跡の植生調査報告書（2）』（1990 年 3 月）にまとめている。

図版 21．根石確認調査（O 地区　南側より）

図版 22．根石確認調査（K 地区　北側より）

図版 23．石材集積状況（P地区　南側より）

図版 24．測量箇所（城外正門北側　北側より）

図版 25．根石確認調査（K地区　南側より）

図版 26．スカイマスター撮影（北東側より）

図版 27．スカイマスター撮影（西側より）

図版 28．スカイマスター撮影（北のアザナ）

図版 29．スカイマスター撮影（正門）

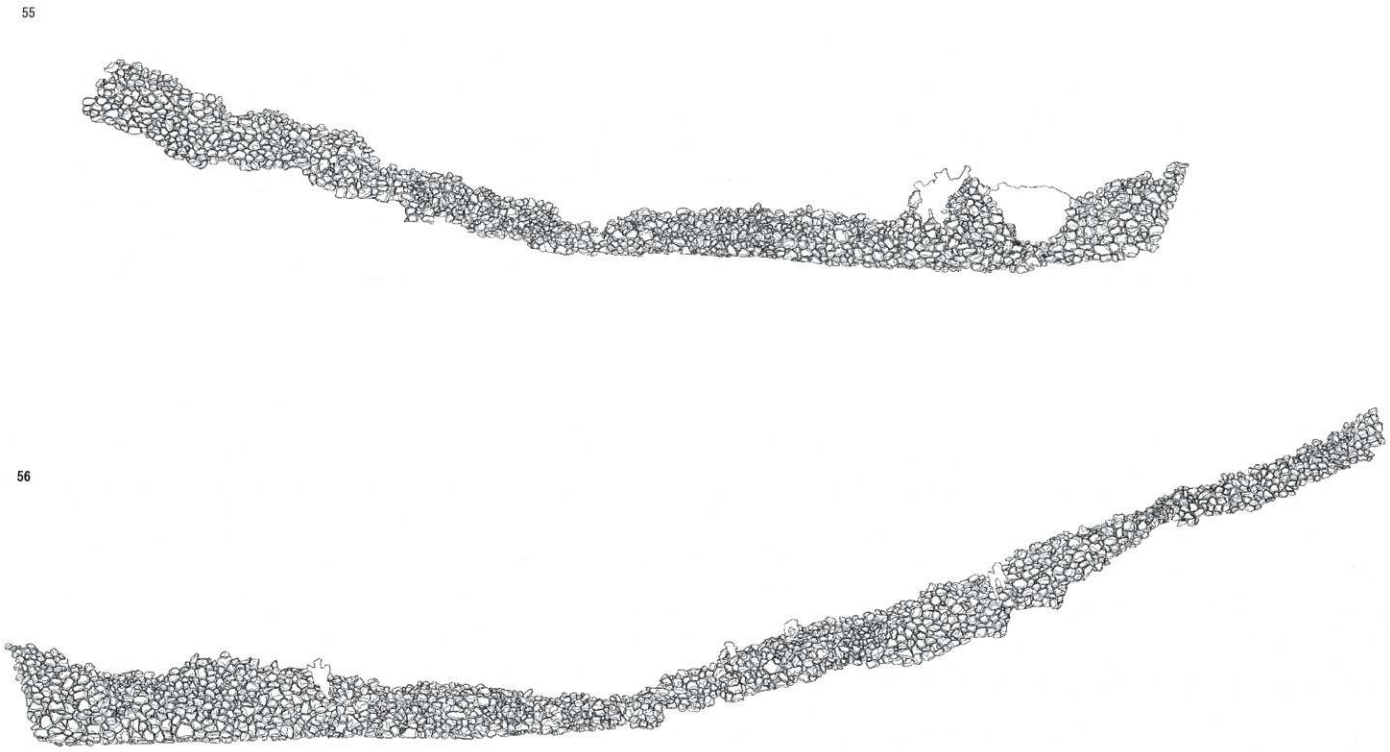
図版 30．スカイマスター撮影（南の虎口跡）

図版 31．スカイマスター撮影（南のアザナ）

図版 32．スカイマスター撮影（殿舎跡南側）

図版 33．スカイマスター撮影（C 地区）

図版 34．スカイマスター撮影（A・B 地区）



第33図　平成元年度 城壁立面図(合成)

第５節　平成２年度整備

当該年度は、遺構調査、城壁写真測量を実施した。実施内容は以下のとおりである。

１．西のアザナ遺構調査

殿舎跡との伝承がある H 地区の北西側城壁内側を対象とし、遺構調査及び根石の検出を実施した。その際、城壁の北西側にて新しいアザナが検出されたことから、このアザナを「西（イリ）のアザナ」とした。

西のアザナの検出作業中には、南西隅に戦時中に砲弾が直撃した箇所が確認された。この付近は、砲弾直撃で、アザナの基礎は 1～3 段程しか残っていなかった。張り出しは約 2.5m、幅 7m で内側沿いに幅 40～60cm の武者走りも確認された、また、この内側部分の根石検出の際、県内でも報告例の少ない土馬が発見されている。土馬は首、前肢、胴の一部が残っており、祭祀や遊具などの遺物として考えられる。その他に、グスク土器や白磁、青磁、褐釉陶器等が出土しており、時期的には 14 世紀中頃から 15 世紀前半に位置づけられる。

２．城壁写真測量

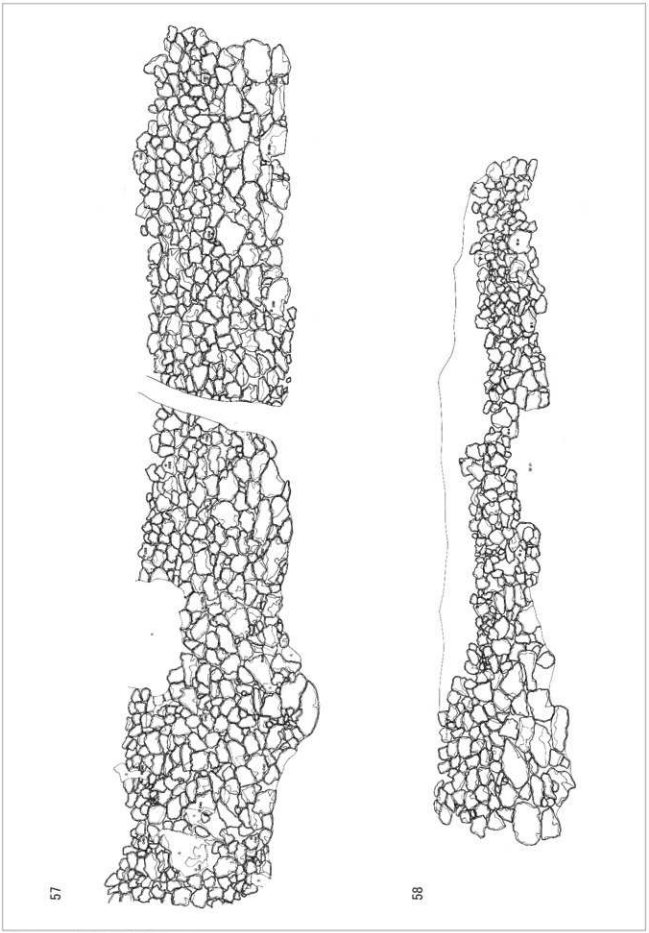
西のアザナから北のアザナに至る城外側城壁の現況を把握するため、城壁の写真実測と図化を平成 3 年 1 月 21 日～3 月 26 日にわたって実施した。（第 34～37 図）

図版 35．測量箇所（I 地区　西側より）

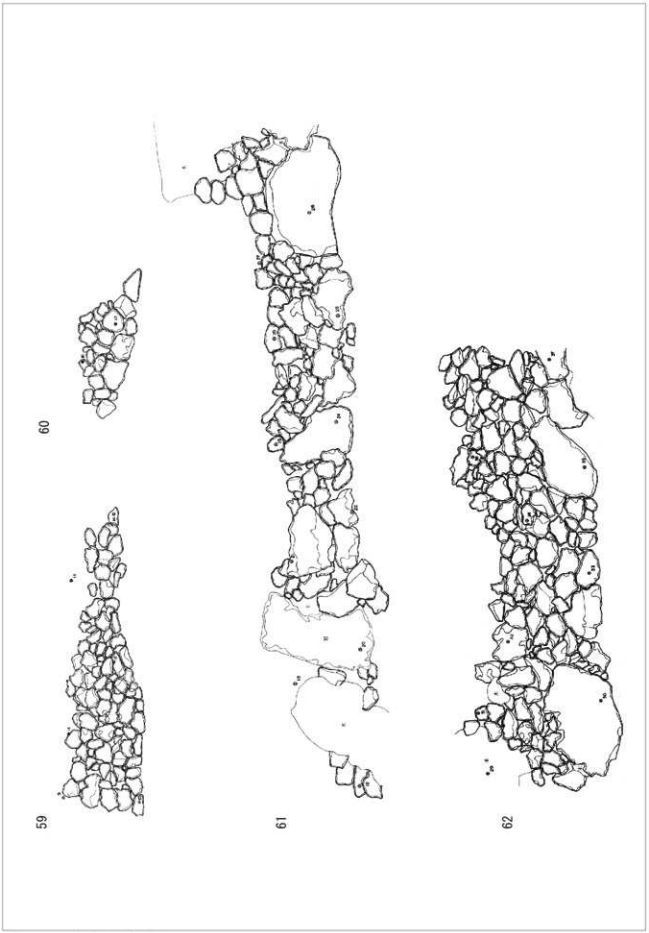
図版 36．測量箇所（I 地区　西側より）

図版 37．測量箇所（I 地区　南西側より）

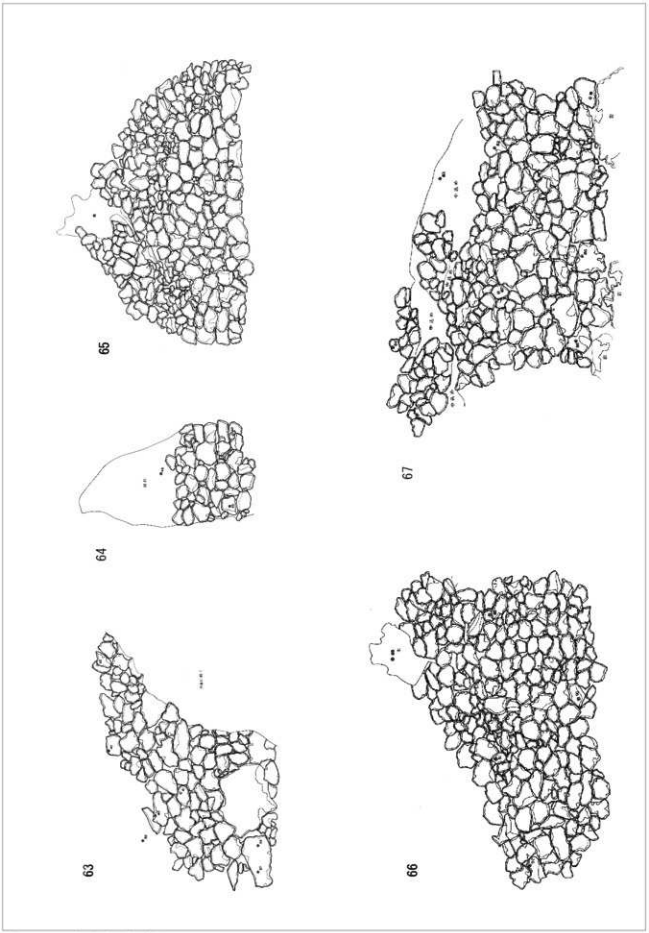
図版 38．測量箇所（H～J 地区　北側より）



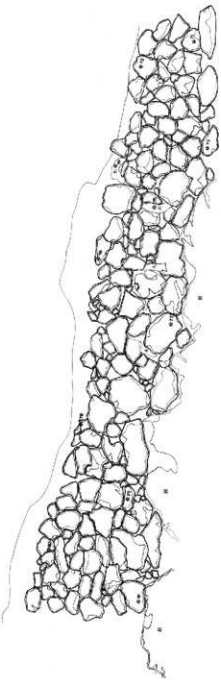
第34図　平成2年度 城壁立面図1



第35図　平成2年度 城壁立面図2



第36図　平成2年度 城壁立面図3



68

69

第37図　平成2年度 城壁立面図4

第６節　平成３年度整備

当該年度は、遺構調査及び城壁写真測量を実施した。実施内容は以下のとおりである。

１．遺構調査

Ⅰ地区の城壁を対象とし、城壁遺構調査及び城壁を覆っている残土処理を実施した。整備事業開始前に城内で行われていた畑作業の際、石や土が城壁へ大量に投げ込まれていたようである。残土処理にて野面積の面出しを実施していたところ、現道路に面した部分から約 2m の箇所で、面石が傾いた状態で検出された。この城壁の中には、一部に切石積を使用した箇所があり、切石積の並び具合から古い時代の門が存在した可能性が考えられる。現在の正門建造以前の門とみられ、H 地区に殿舎跡があることから、西側から出入りするための門があった可能性が考えられ、城跡の拡張等によってこちらの小さい古い門を廃棄したと考えられる。そのため、東のアザナ跡（平成６年度確認・詳細は後述記載）に関しても、城壁拡張前のアザナであると考えることができる。残土処理の際に、グスク土器、白磁、青磁、染付、褐釉陶器、沖縄産施釉陶器、沖縄産無釉陶器等が出土した。

２．城壁写真測量

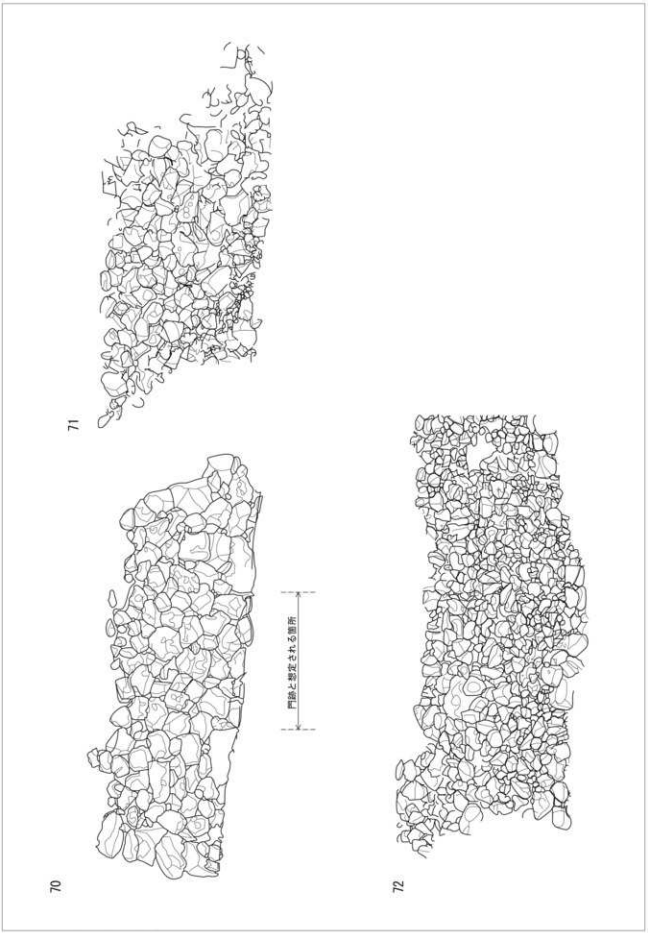
Ⅰ地区城壁の残土処理後に、東のアザナ跡から道路に至る城壁の現況を把握するため、城壁の写真実測と図化を平成３年１月 21 日～３月 26 日にわたって実施した。（第 38～40 図）

図版 39．測量箇所（東のアザナ跡 南側より）

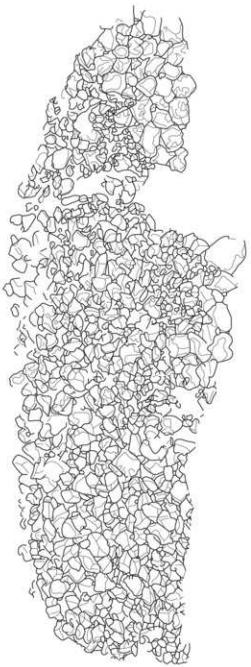
図版 40．門跡と想定される箇所（Ⅰ地区 南側より）

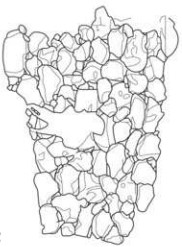
図版 41．残土処理作業（Ⅰ地区 西側より）

図版 42．残土処理完了状況（Ⅰ地区 西側より）

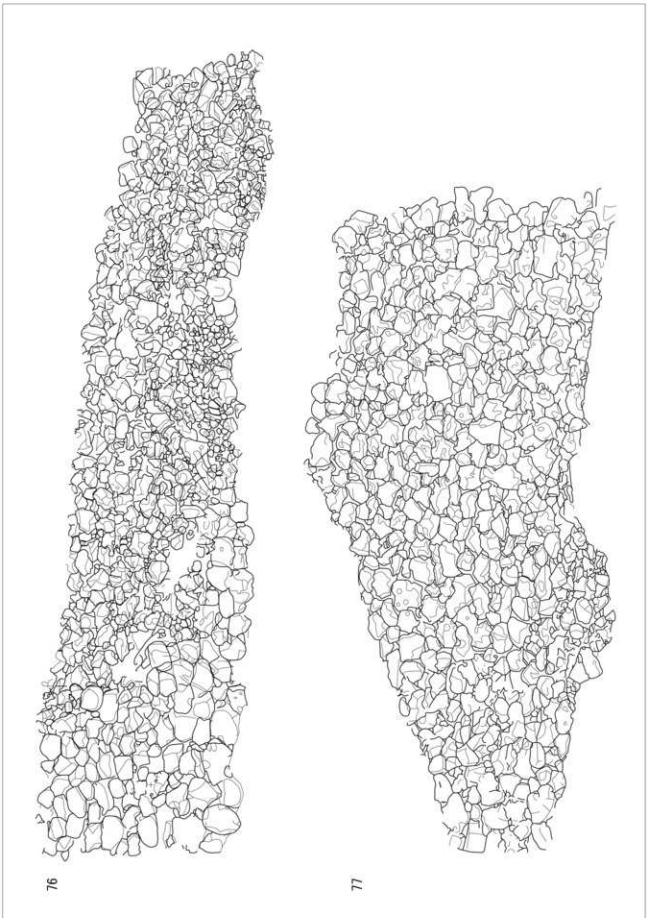


第38図　平成3年度　城壁立面図1（成果品を再トレース）





第39図　平成3年度　城壁立面図2(成果品を再トレース)



第40図　平成3年度　城壁立面図3(成果品を再トレース)

第７節　平成４年度整備

当該年度は、城壁写真測量、城壁修復工事を実施した。実施内容は以下のとおりである。

１．城壁写真測量

H 地区の殿舎跡の西側崖沿いに残る城壁の現況を把握するため、城壁の写真測量を平成 5 年 2 月 23 日～3 月 25 日にわたって実施した。（第 41 図）

２．城壁修復

南のアザナ南側の接続部分 10.5m の修復を平成 5 年 2 月 23 日～3 月 25 日にわたって実施しており、基本的には現状の城壁の最高位と最低位を結ぶラインを修復高とした。また、天端には崩落を防ぐ目的で 5～15cm 程度の裏込石を使用している。

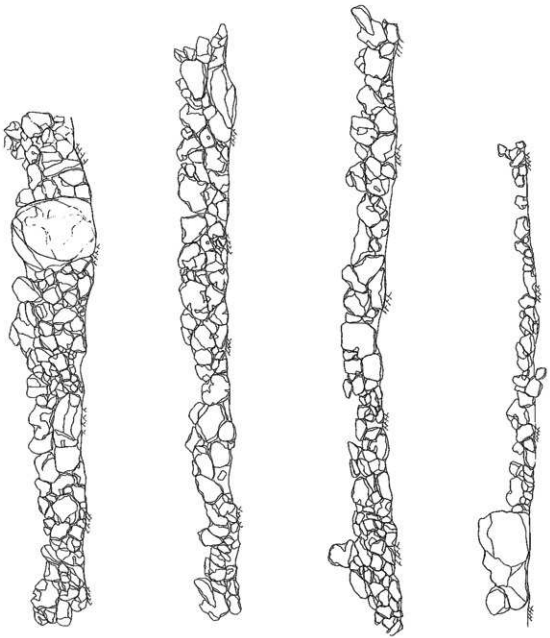
工事区間 10.5m、現状の高さが城内側最大 2.05m、最小 0.47m、城外側高さ最大 4.2m、最小 1m、天端幅が最大 3.15m、最小 1.8m、下端幅が最大 3m、最小 2m である。修復後の高さが城内最大 2.76m、最小 0.8m、城外側最大 4.2m、最小 1.1m となっている。（第 41～45 図）

図版 43．城壁修復工事着工前（東側より）

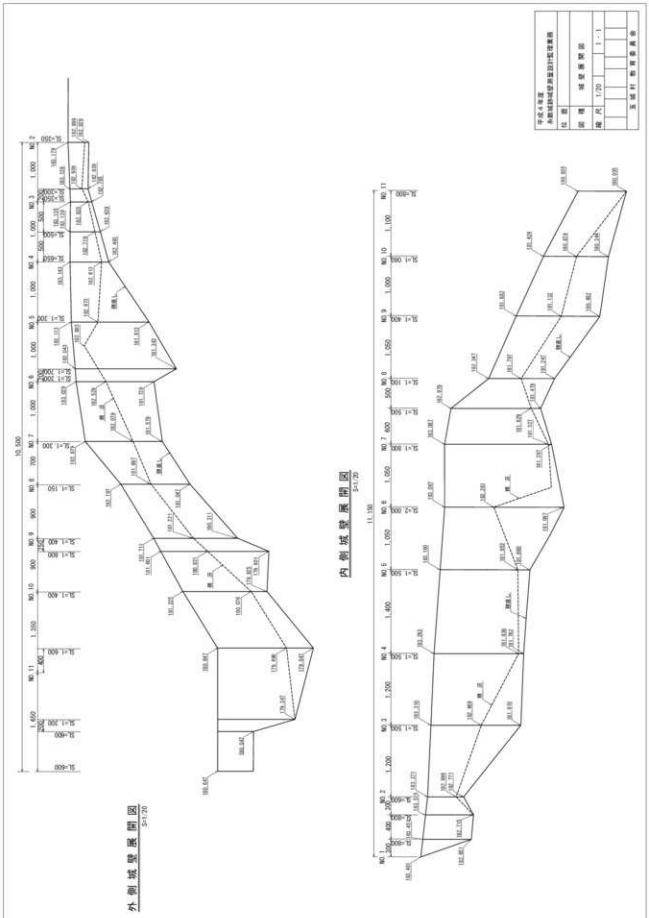
図版 44．城壁解体状況（北側より）

図版 45．城壁修復工事竣工（東側より）

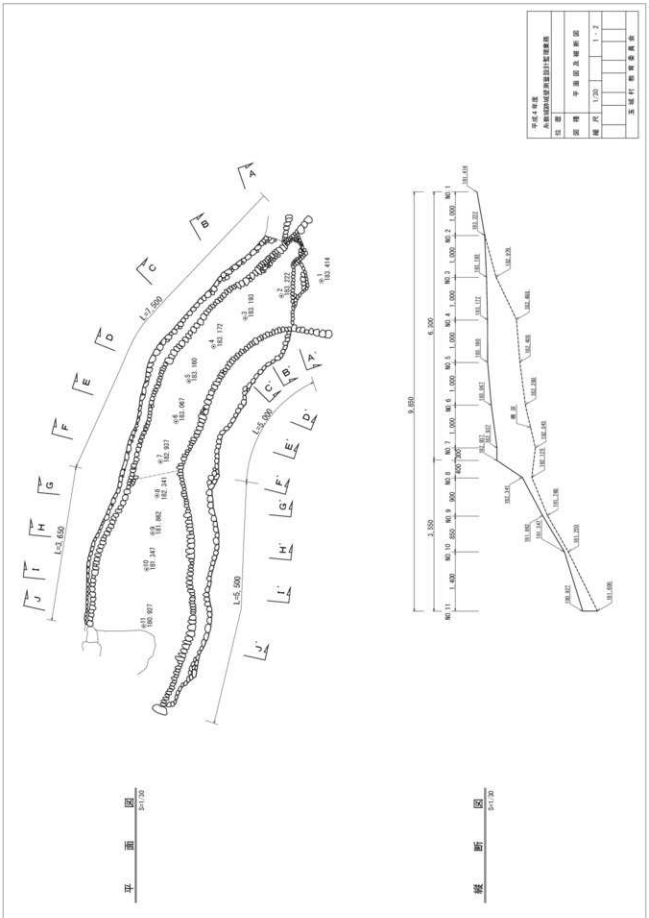
図版 46．城壁修復工事竣工（北東側より）



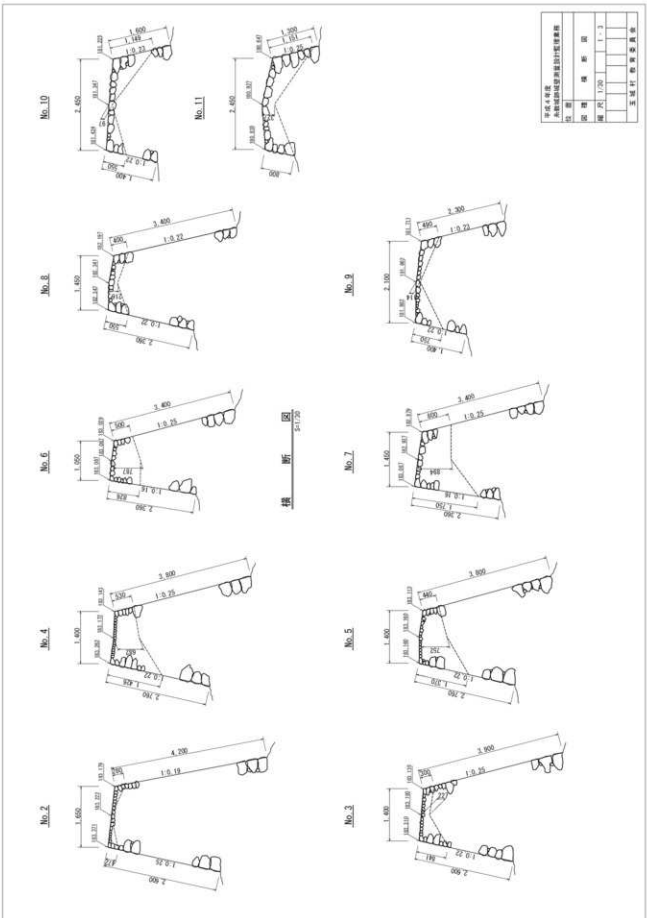
第41図　平成4年度 城壁立面図



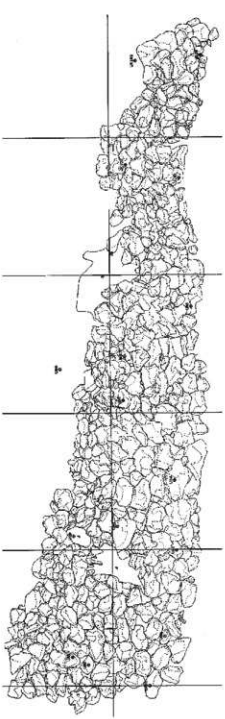
第42図　平成4年度　城壁展開図(成果品を再トレース)

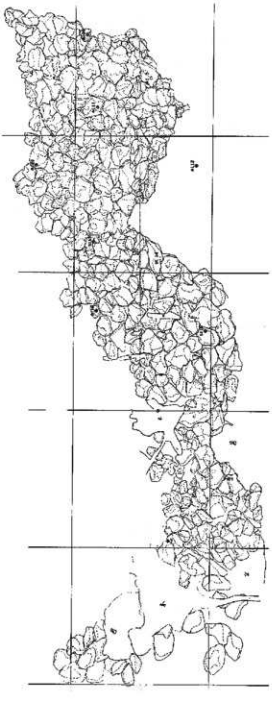


第43図　平成4年度 平面図及縦断図(成果品を再トレース)



第44図　平成4年度 横断図(成果品を再トレース)





第45図　平成4年度 城壁修復箇所

第８節　平成５年度整備

当該年度は、遺構調査及び城壁修復工事を実施した。実施内容は以下のとおりである。

１．遺構調査

遺構調査は、昭和 63 年度調査箇所の東側、約 110 m² の発掘調査を平成 5 年 11 月 2 日～12 月 25 日の期間にわたって実施された。

B 地区は糸数城跡の南西部に位置し、地形は東側から西側にかけて緩やかに傾斜しており、堆積層も東側から西側にかけて厚くなっていた。地元の方によると、戦後ここで芋が栽培されていたということであった。実際に調査した結果、表土から深さ 10～30cm は撹乱を受けており、出土する遺物も小破片がほとんどであった。調査期間の関係で撹乱層の掘り下げにとどめた（平成 10 年度に同地区の再発掘を実施）。今回の調査で出土した遺物は、沖縄貝塚時代前期系土器、グスク土器、白磁、青磁、カムィヤキ、褐釉陶器、古銭、鉄器、獣骨、貝等である。詳細については、今後刊行予定の糸数城跡 B 地区の発掘調査報告書にて記述する。

２．城壁修復

平成 2 年度に遺構調査と写真測量を実施した西のアザナの城壁修復を平成 6 年 1 月 20 日～3 月 20 日にわたって実施した。西のアザナは、未完成のままで放棄されたアザナと考えられ、伝承にあるようにグスクの作事中に滅ぼされたことを裏付けるものと思われる。また、殿舎跡西側の崖沿いの城壁が低すぎることから、胸壁の可能性が考えられる。基本的には現状の城壁の最高位と最低位を結ぶラインを修復高として修復工事を実施した。アザナの城外側がすぐ崖地となっていることから、一部に補強材としてモルタルの流し込みを行った。また、天端に崩落を防ぐ目的で 5～15cm 程度の裏込石を使用した。

工事区間が城外側 33.55m、城内側 25.9m、修復後の高さが城内側最大 2.72m、最小 1.0m、城外側最大 3.65m、最小 0.8m となっている。（第 46～48 図）

図版 47．城壁修復工事着工前（東側より）

図版 48．城壁修復工事着工前（南側より）

図版 49．城壁解体状況（南側より）

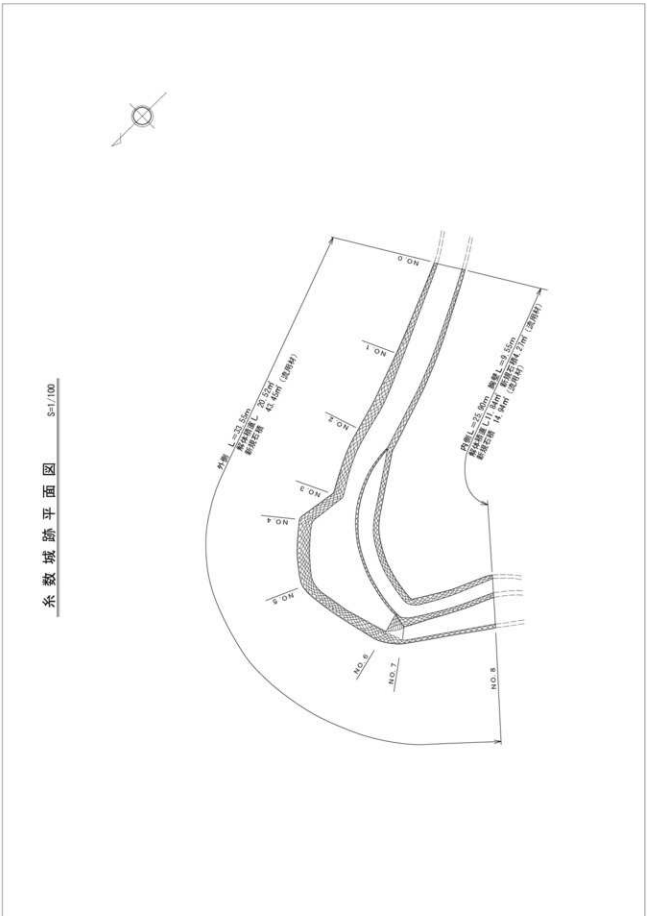
図版 50．城壁積直し状況（南西側より）

図版 51．モルタル流し込み状況（南西側より）

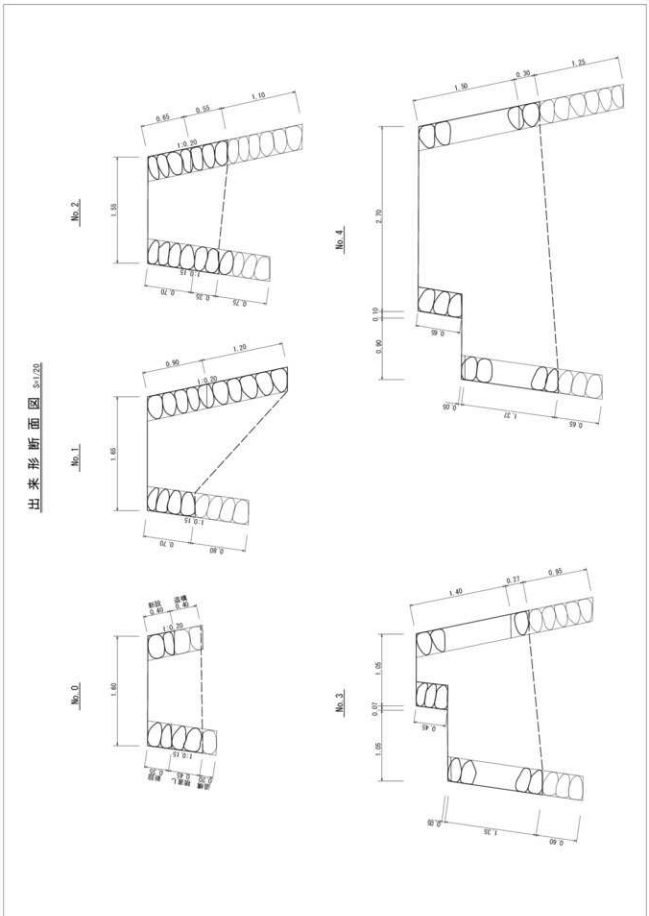
図版 52．城壁修復工事竣工（北東側より）

図版 53．城壁修復工事竣工（南側より）

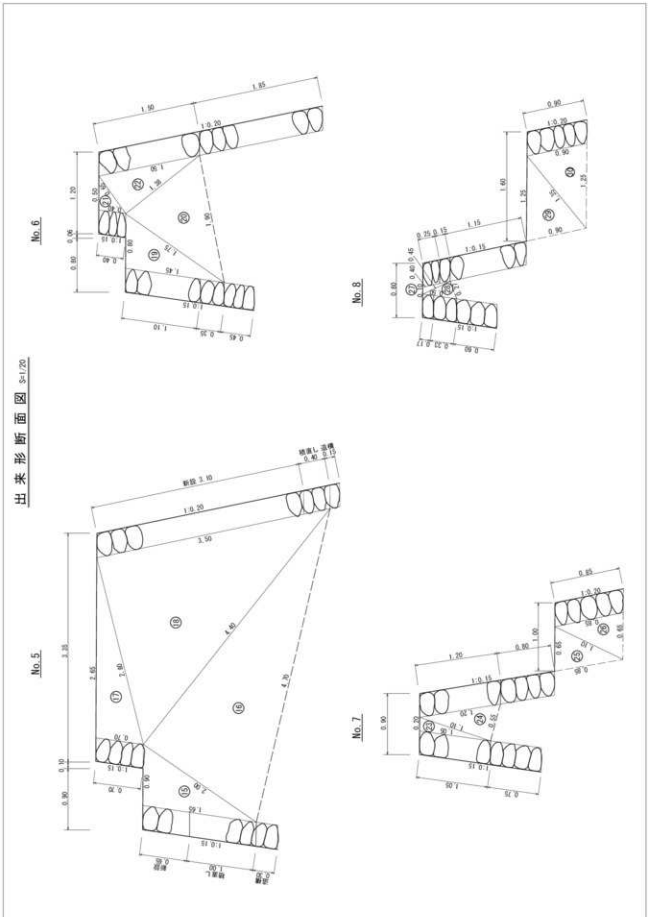
図版 54．城壁修復工事竣工（南東側より）



第46図　平成5年度　平面図(成果品を再トレース)



第47図　平成5年度　出来形断面図1(成果品を再トレース)



第48図　平成5年度　出来形断面図2（成果品を再トレース）

第９節　平成６年度整備

当該年度は、遺構調査と城壁修復工事を実施した。実施内容は以下のとおりである。

また、平成６年７月 29 日には『史跡整備にかかる石積技術等検討会議』を開催しており、糸数城跡石積関係資料として、過年度整備箇所及び発掘調査についての報告を行っている。

１．遺構調査

遺構調査は、Ⅰ地区にて、グスクヌカー横の城壁をまたいで反対側（南側）になる城内側及びその西側にグリッドを２箇所設定し、根石確認のための発掘調査を実施した。調査から、根石を積む際の基礎工事部分と、土砂の流出を防ぐための石列遺構が確認できたが、西側に残っている石については地山まで掘り下げたが性格を把握するに至らなかった。遺物は、カムィヤキ、グスク土器、白磁、青磁、褐釉陶器、獣骨、魚骨等が出土している。

また、調査の際にⅠ地区にて胸壁及び武者走り、補強用石積と３段構造になった城壁を確認した。さらに、その西側の武者走りに人１人が立てるような物見台を確認したことから、かつてはアザナとして機能していたと考え、12 月に糸数城跡保存修理事業の中間報告として東のアザナ跡を確認したと発表を行った。東のアザナ跡は、城内に位置していることから、縄張りを拡大する以前のアザナと考えられる。北のアザナ完成に伴ってその機能を失ったとみられ、グスクの規模が拡大したことを裏付けるものであると考えられる。

また、城壁は東のアザナ跡までで途切れているが、離れた場所から根石が見つかっていることから、東のアザナ跡から南の虎口跡へ延びていたと考えられる。南の虎口跡についてはこれまでアザナと考えられていた遺構であるが、城壁がコの字型に回るような形をとっていることから、かつてはここが正門であったと考えられる。糸数城跡拡張の際に、現在の位置に正門が造られたため口を塞ぎ、アザナとしての機能を持たせるようになったと考えられる。

２．城壁修復

遺構確認後、同箇所の城壁修復を実施した。城外側城壁 12.8m、城内側城壁及び胸壁 15.0m を対象範囲とし、整備の高さについては両端の城壁遺構にそれほど高低差が無かったため、相互に結ぶ形で修復工事を行った。そのため、修復後の高さは、城内側最大 2.6m、最小 2.2m、城外側最大 3.2m、最小 3.0m となっている。また、城内の胸壁については、地表面から 70 ㎝の高さに揃えた。今回の修復箇所西側部分の道路と接する城壁については、門跡があった可能性があることから、さらなる調査が必要なため、今回の修復工事範囲には含まれておらず、今後の整備にて実施する予定となっている。（第 49 図）

図版 55．城壁修復工事着工前（南西側より）

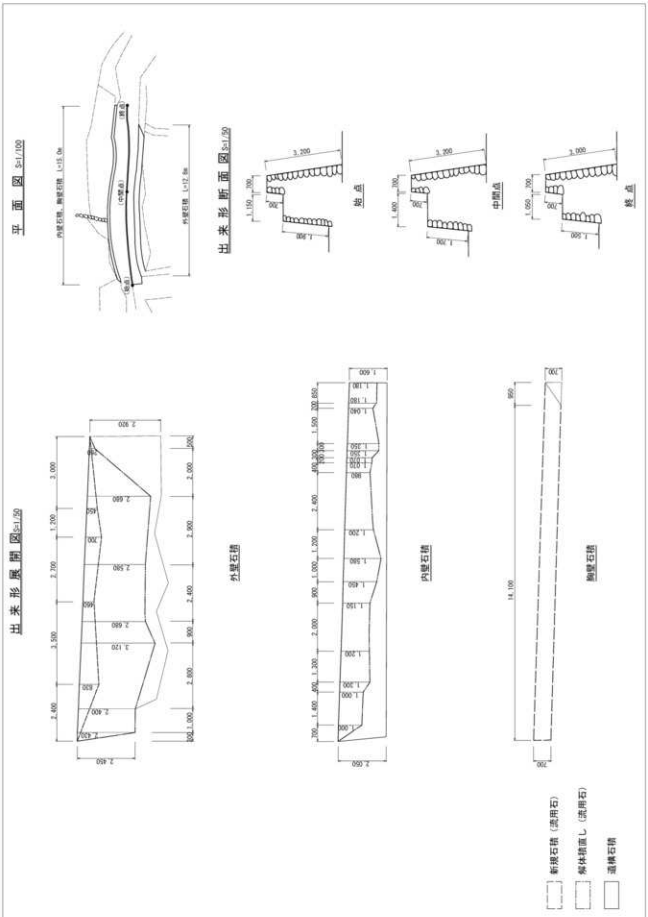
図版 56．城壁積直し状況（北東側より）

図版 57．城壁積直し状況（南東側より）

図版 58．城壁勾配確認状況（北西側より）

図版 59．城壁修復工事竣工（南東側より）

図版 60．城壁修復工事竣工（南西側より）



第49図　平成6年度　城壁修復工事図面(成果品を再トレース)

第10節　平成7年度整備

平成7年4月1日未明、集中降雨の影響で幅約20mにわたり南縁に位置する崖が崩落した。この原因は過去の採石時の振動や岩盤自体の風化によって生じた亀裂の剥離によるものと見られる。今後も当該箇所において継続して発生する可能性が高く、緊急に崩落防止工事を実施することとなった。そのため当該年度は、遺構調査、土質調査、城壁修復工事を実施した。実施内容は以下のとおりである。

1．遺構調査

城内南側（C地区）の発掘調査を実施した。遺物は、カムィヤキ、グスク土器、白磁、青磁、褐釉陶器、黒釉陶器（天目様）、獣骨、魚骨等が出土した。

2．土質調査

斜面崩落防止工事箇所の土質調査を実施した。ボーリング調査は4箇所で実施し、1箇所当たり10mを基準とし解析まで行った。

3．斜面崩落防止工事

糸数城跡の南側斜面において、亀裂により分離された幅6m、奥行き6m程度の不安定な独立岩塊がある。この岩塊がさらに崩壊する恐れがあるため、アンカー工により独立岩を固定する崩落防止工事を実施した。

（1）磁気探査（第55図）

斜面崩落防止工事に先立ち、工事の安全を図るため、モルタル注入区域及び洞窟内区域の2区域において水平磁気探査を実施した。区域をくまなく探査した結果、磁気異常反応は検出されず、埋没不発弾等の危険物は発見されなかった。

（2）抑止杭工（第50・51図）

①掘削機の据付

油圧式25tクレーンを使用する。据付は杭芯にスパイラルオーガーの先端を合わせ、リーダーを降ろし直角2方向からトランジットによりリーダーが垂直になるよう据付けを行った。

②掘削

所定の位置にクレーンを設置後、リーダーの鉛直度とスパイラルオーガーの曲がり濃霧を確認して掘削を実施した。掘削土の排土はバックホウにて行った。

③スパイラルオーガーの引き上げ

所定の深さまで掘削完了後、引き続きスパイラルオーガーを正転させながら孔壁の崩壊に注意して引き上げを行った。

④杭の建込み

杭を建込んだ後、杭芯と杭天端の高さを確認し、モルタル注入の際に杭が動いたりしないよう鋼材等を使用し固定した。

・工事数量

抑止杭　φ500、H＝10.5m、N＝4 本

H 鋼　　H＝350×350×12×19、L＝10.5m

中詰材　モルタル 1：3

（3） アンカー工

崩落防止崖面に対し、削孔角度 20 度、上下 2 本の 2 列、計 4 本のアンカー（L＝14.5m／本、φ32）を挿入した。（第 50・52・53 図）また、アンカーの性能確認のため、実際のアンカーを用いて適正試験を 3 本（設計荷重＝50.6t、最大試験荷重＝68.76t）、確認試験を 1 本（設計荷重＝50.6t、最大試験荷重＝68.76t）を実施し、アンカーが設計荷重に対して充分に安全であることを確認した。

（4） 地盤改良工（薬液注入）

糸数城跡南側は落差 20m 程度で琉球石灰岩が屹立する自然傾斜である。幅 2m 間隔で 30 本のグラウト注入（セメントミルク）を実施した。30 本の内、崖側の 8 本については、鉄筋（L＝9m）を挿入した。

（5） 仮設工

斜面崩落防止工事の間、落石防護網（被覆式ロックネット）及び仮設足場を設置した。工事完了後に撤去を行った。（第 54 図）

図版 61．斜面崩落箇所遠景（南西側より）

図版 62．斜面崩落箇所（南西側より）

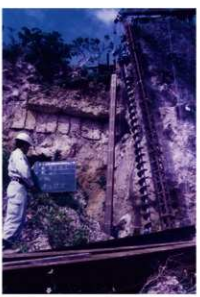
図版 63．探査状況（モルタル注入区域内）

図版 64．探査状況（洞窟内区域）

図版 65．落石防護網

図版 66．使用機材（リーダー）

図版 67．材料検収（H型鋼）



図版 68．H型鋼建込状況

図版 69．削孔径

図版 70．モルタル充填状況

図版 71．杭間確認

図版 72．抑止杭工完了

図版 73．アンカー工仮設足場設置

図版 74．アンカー体挿入状況

図版 75．適正試験

図版 76．適正試験

図版 77. ボーリングマシーン穿孔角度

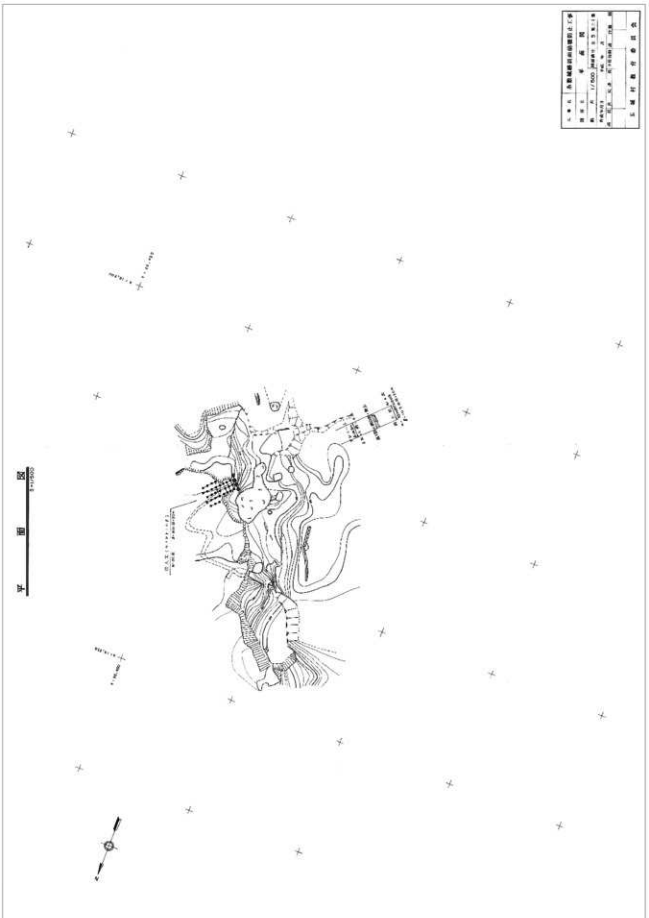
図版 78. 確認試験

図版 79. 防錆材孔口確認

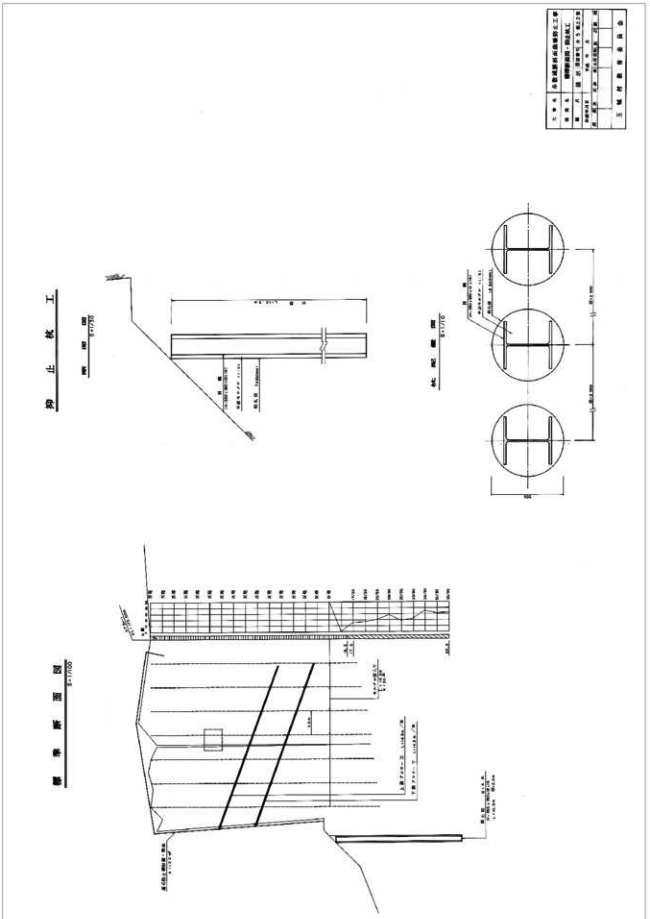
図版 80. 地盤改良工注入口間隔確認

図版 81. グラウト注入

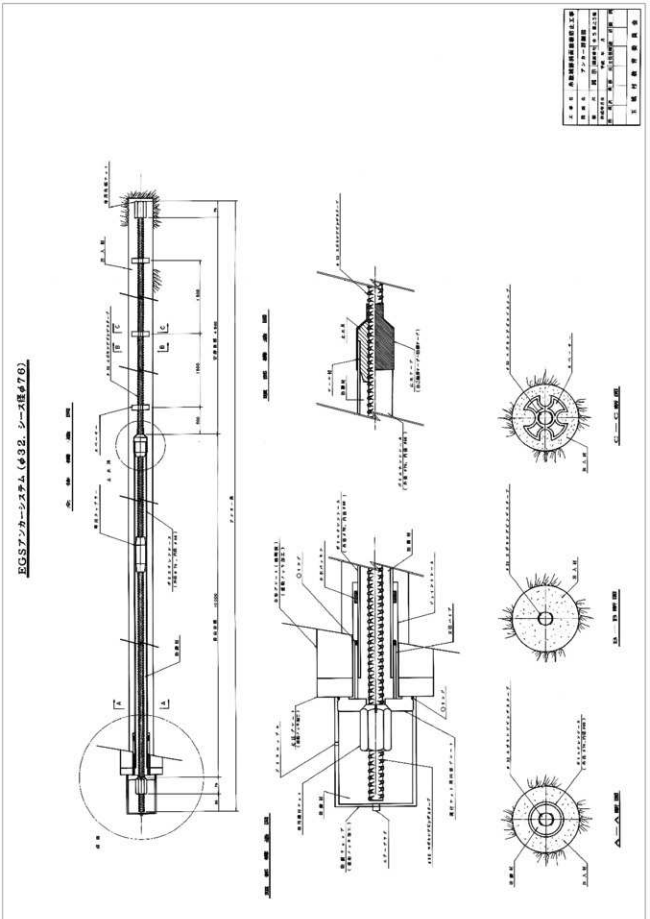
図版 82. 材料検収（転落防護網）



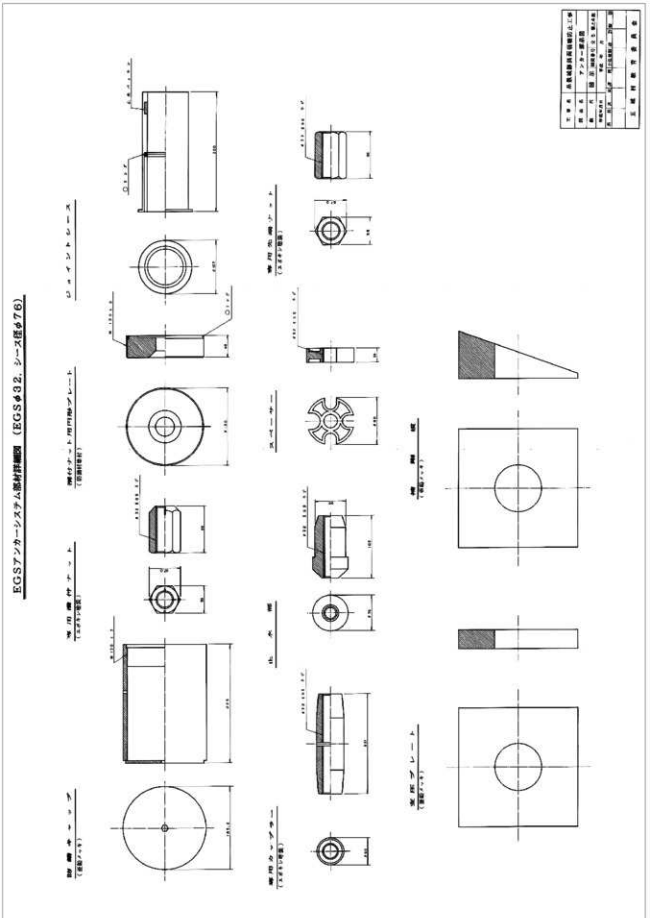
第50図　平成7年度　平面図



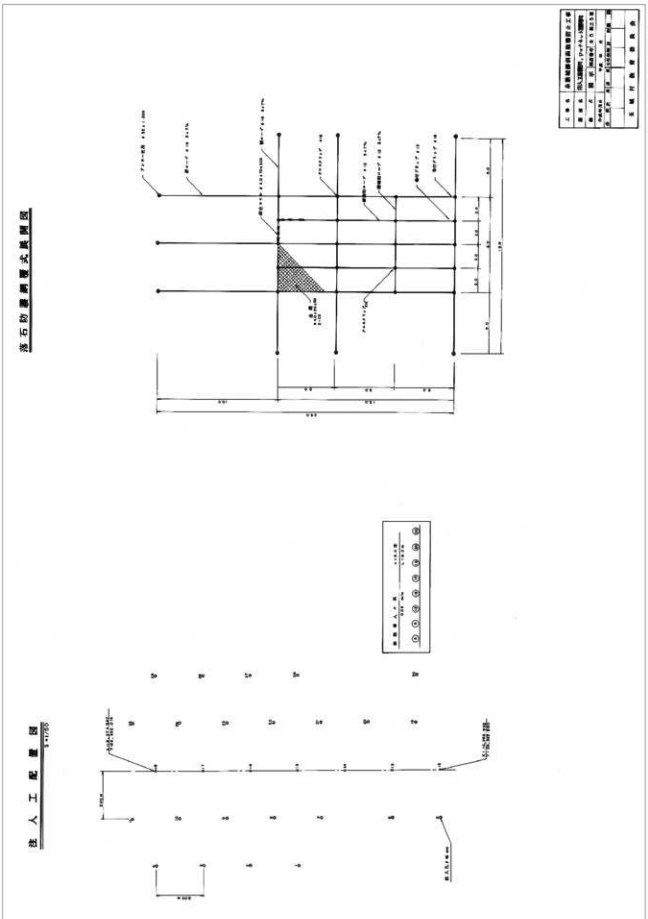
第51図　平成7年度　標準断面図・抑止杭工



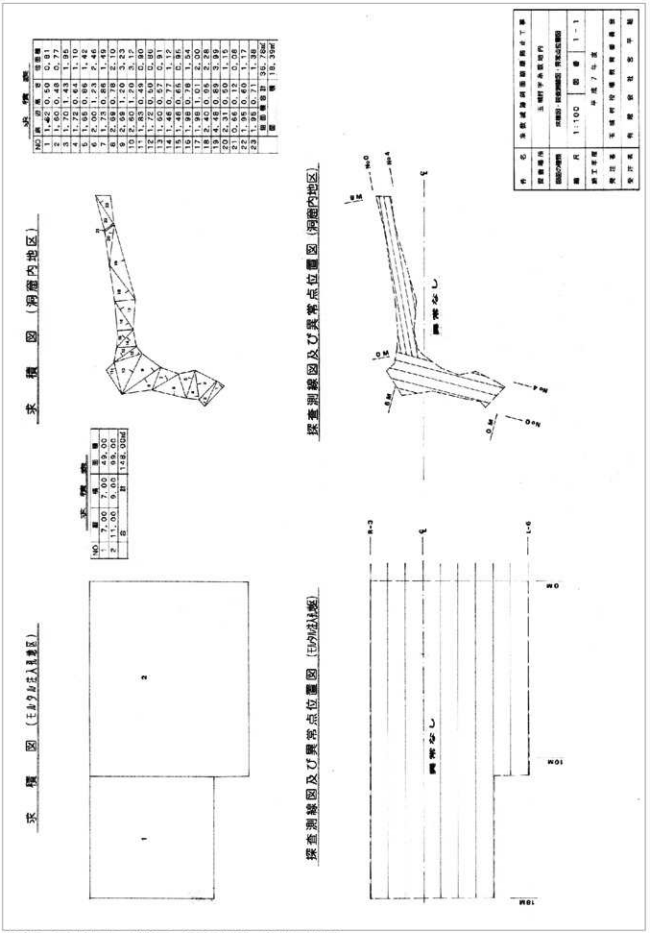
第52図　平成7年度　アンカー詳細図



第53図　平成7年度　アンカー部品図



第54図　平成7年度　注入工配置図・ロックネット展開図



第55図　平成7年度　求籍図・探査測線図・異常点位置図

第 11 節　平成 8 年度整備

当該年度は、遺構調査や城壁修復工事等を実施した。実施内容は以下のとおりである。

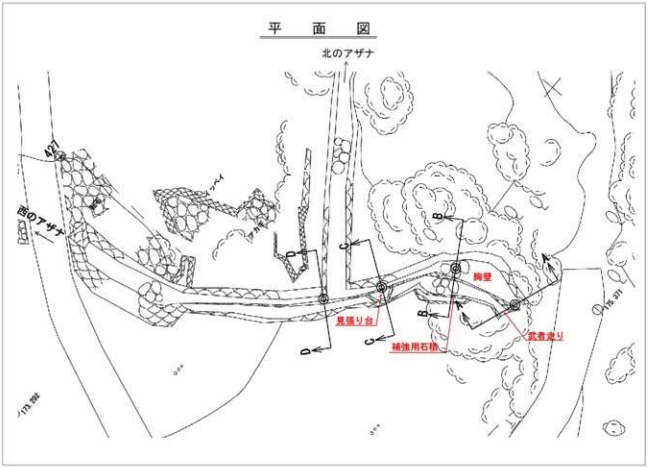
また、関連事業として、蔵屋敷地区が追加指定となった。

1．遺構調査

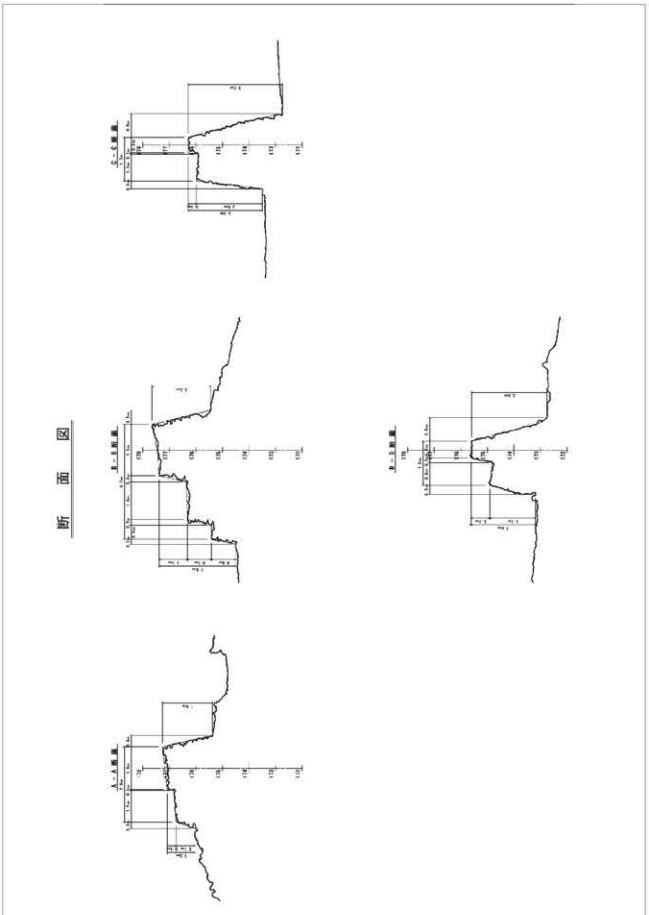
昨年度に引き続き C 地区の調査と当該年度の城壁修復箇所である I 地区の根石の検出調査を行った。遺物は、C 地区でグスク土器、青磁、陶質土器が数点出土した。I 地区では、カムィヤキ、グスク土器、白磁、青磁、青花、褐釉陶器、瓦質土器、貝、獣骨、魚骨等が出土した。

2．城壁修復

I 地区の根石検出後、東のアザナ跡において城壁修復工事を平成 9 年 2 月 3 日～3 月 25 日の期間で実施した。平成 6 年度の城壁修復工事の続きであり、基本的には現状の城壁の最高位と最低位を結ぶラインを修復高とした。全長約 20m を対象範囲とし、修復後の高さは、I 地区側城壁 B－B 断面において、胸壁 2.9m、武者走り 1.8m、補強用石積 0.9m となっている。見張り台についても、I 地区側城壁 C－C 断面において、見張り台 2.5m、胸壁 2.8m の高さで修復しており、工事の際は、修理規模・範囲の境界を明示するため、柔軟な鉛版を設置した。（第 56・57 図）



第56図　平成8年度　平面図（令和5年度糸数城跡石垣悉皆調査成果品を基に作成）



第57図　平成8年度　断面図（令和5年度糸数城跡石垣悉皆調査成果品を基に作成）

図版 83．城壁修復工事着工前（南西側より）

図版 84．城壁積直し状況（南西側より）

図版 85．城壁積直し状況（南側より）

図版 86．城壁修復工事竣工（南東側より）

図版 87．城壁修復工事竣工（南西側より）

図版 88．城壁修復工事竣工（南西側より）

第 12 節　平成 9 年度整備

当該年度は、遺構調査や城壁修復工事等を実施した。実施内容は以下のとおりである。

1．遺構調査

B 地区及び K 地区を対象に調査を行った。B 地区では、平成 5 年度に撹乱層の掘り下げで留めていた箇所の草刈りや調査区の杭打ち等、発掘調査前の軽作業を実施した。K 地区についても、平成元年度調査箇所の再発掘調査を実施した。城壁修復工事に伴い、根石の検出を行い、確認を行った上で積み直しが行われた。遺物は、グスク土器、青磁、褐釉陶器、沖縄産施釉陶器、沖縄産無釉陶器、獣骨等が出土した。

2．城壁修復

城壁修復は平成 10 年 2 月 23 日～3 月 27 日の期間で、西のアザナから東のアザナ跡に連なり、北のアザナへ延びる城壁において、全長約 30m の修復工事を実施した。実施に当たっては、糸数城跡保存修理事業にかかる石積修復検討会を開催し、有識者、文化庁及び県文化課の指導も仰ぎながら行った。資料の中では、北のアザナ城壁修復計画高として A～C の 3 案で検討している。

・A 案：高さに高低差がほとんどない箇所に関しては、現況の両端の城壁を相互に結び、北のアザナ頂部へ向かってレベル差（段差）が大きくなる箇所に関しても緩やかなスロープ状に結び整備を行う。

・B 案：現況の城壁が 1～2 段崩落していることを想定し、北のアザナ頂部へ向かって天端を A 案より石材 1～2 段程、やや高く保ちながら整備範囲の両端を結ぶ形で整備を行う。

・C 案：現況の高さに沿って、細かく天端を結び整備を行う。

検討の結果、B 案を採用している。根石部分については、根石から上段 2～3 個程度の城壁を残し、解体積み直しを行った。復元の高さに関しては、両端の城壁遺構に高低差が無い部分に関しては天端を 1～2 段高くした上で相互に結び、北のアザナへと続く部分に関しても同様に、天端をやや高く保ちながらスロープ状に結ぶ整備を実施した。工事の際は、修理規模・範囲の境界を明示するため、柔軟な鉛版を設置した。（第 58・59 図）

図版 89．城壁修復工事着工前（東側より）

図版 90．城壁積直し状況（東側より）

図版 91．城壁積直し状況（北東側より）

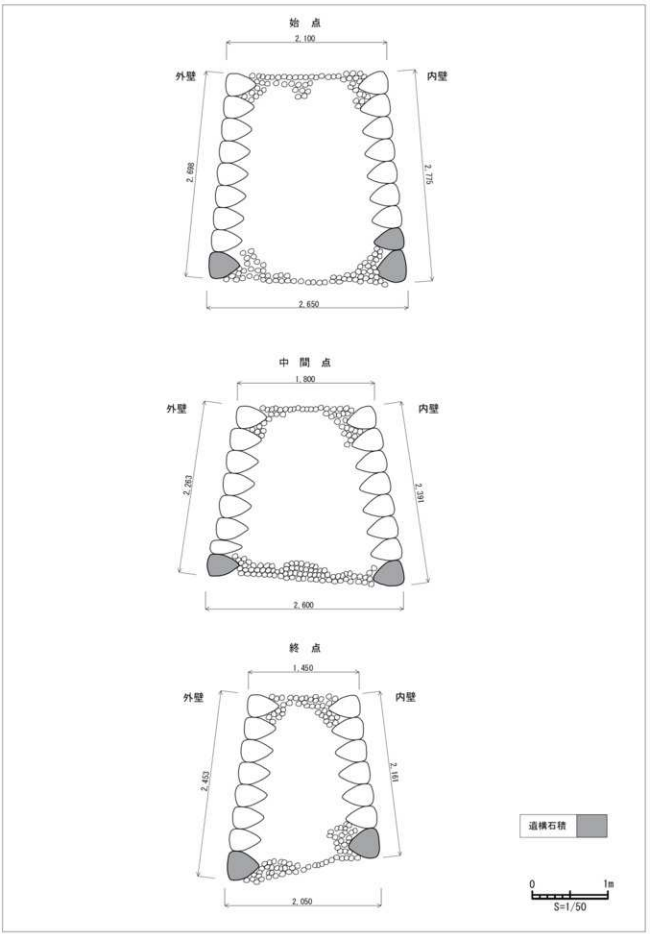
図版 92．城壁積直し状況（南側より）

図版 93．鉛板設置状況

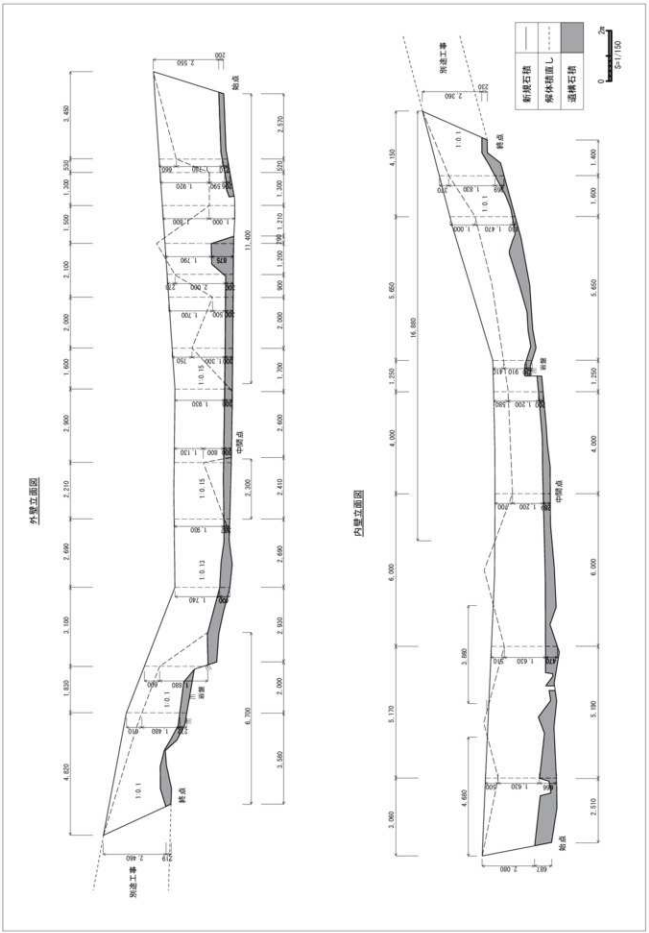
図版 94．城壁修復工事竣工（南側より）

図版 95．城壁修復工事竣工（南西側より）

図版 96．城壁修復工事竣工（北西側より）



第58図　平成9年度　工事竣工図1(断面図)(成果品を再トレース)



第59図　平成9年度　工事竣工図2(外壁・内壁立面図)(成果品を再トレース)

第 13 節　平成 10 年度整備

当該年度は、遺構調査や城壁修復工事等を実施した。実施内容は以下のとおりである。

また、関連事業である糸数城跡史跡等買上げ事業にて、蔵屋敷地区 10 筆の買上げを行い、公有化を実施した。

1．城内南西側及び北のアザナ遺構調査

糸数城跡 B 地区の発掘調査と K 地区北のアザナ西側城壁修復箇所の根石検出調査を実施した。B 地区の発掘調査の詳細については、今後刊行予定の糸数城跡 B 地区の発掘調査報告書にて報告する。K 地区については、根石の検出及び平成元年度の測量成果に基づき、平面図及び横断図を作成し、城壁修復案を作成した。

2．城壁修復

城壁修復は平成 11 年 3 月 10 日～3 月 30 日の期間で、前年度修復箇所の続きである北のアザナ北東側全長約 20m の修復工事を実施した。実施に当たっては、整備委員会の決定に基づき、文化庁・県文化課の指導も仰ぎながら行った。

城壁のラインは、残存城壁のラインを踏襲するものとし、城壁が崩れてラインが確認できない箇所については、両側の残存城壁を基に設定した。

城壁の高さについては 3 案から検討した。

・A 案：城外側城壁に確認できる天端の階段状のレベル変化を現況なりにスロープ状に結び整備する。

・B 案：整備済城壁天端と整備予定箇所の残存城壁天端の変化点を地形なりに緩やかなスロープ状で結び整備する。

・C 案：整備済城壁天端と「北のアザナ」の残存城壁を石材 1～2 個程度嵩上げした天端とを地形なりに緩やかなスロープ状で結び整備する。

整備委員会での検討の結果、現時点での修復は現況を重視し、今後さらに詳細な調査を続け、明らかになった時点でさらに積上げることが望ましいということから、A 案を採用した。

城壁の勾配は、残存城壁の勾配を踏襲することとした。なお、孕み箇所については、残存状態の良い部分を選定し、勾配を設定するものとし、城壁の面が凹凸形状を成している箇所や城壁崩落箇所等については、当該箇所両側の残存城壁の勾配摺りつけを行い、対処するものとした。

また、残存城壁には、構造的に弱い孕みや城壁の面が凹凸形状の箇所及び風化した石材が部分的に確認でき、城壁の安定性の面から、これらを解消する必要があったため、本整備では孕み及び凹凸形状の箇所は解体積直しを行い、風化した石材については置き換えを行うこととした。

石材を良好な状態で再利用するため、解体時に破損や欠落のないよう十分留意するとともに不足材については、現場に散在する崩落石を用いて補った。工事の際は、修理規模・範囲の境界を明示するため、柔軟な鉛版を設置した。（第 60～62 図）

図版 97．城壁修復工事着工前（西側より）

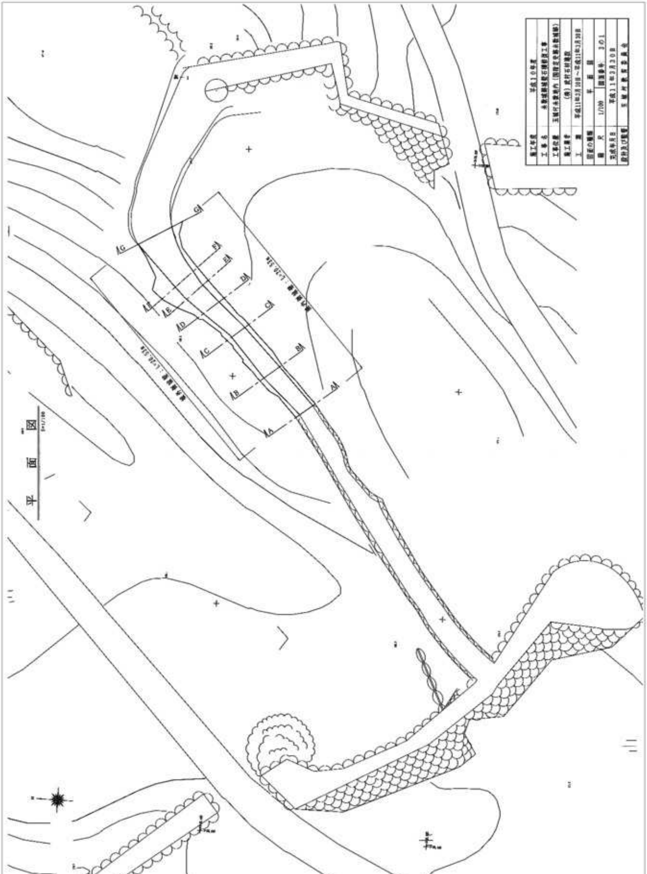
図版 98．城壁積直し状況（南西側より）

図版 99．城壁積直し状況（北東側より）

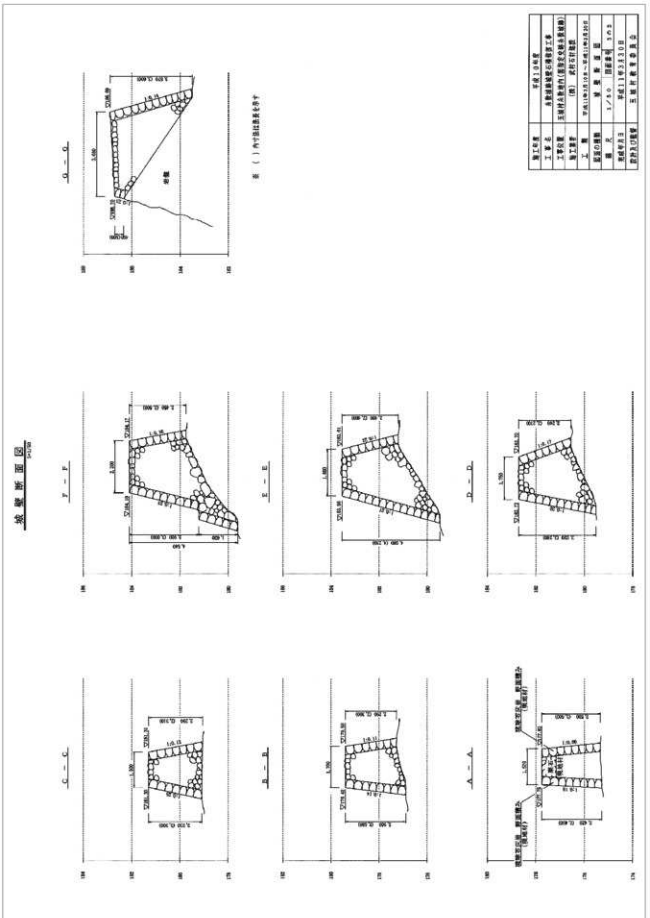
図版 100．城壁積直し状況（北東側より）

図版 101．城壁修復工事竣工（西側より）

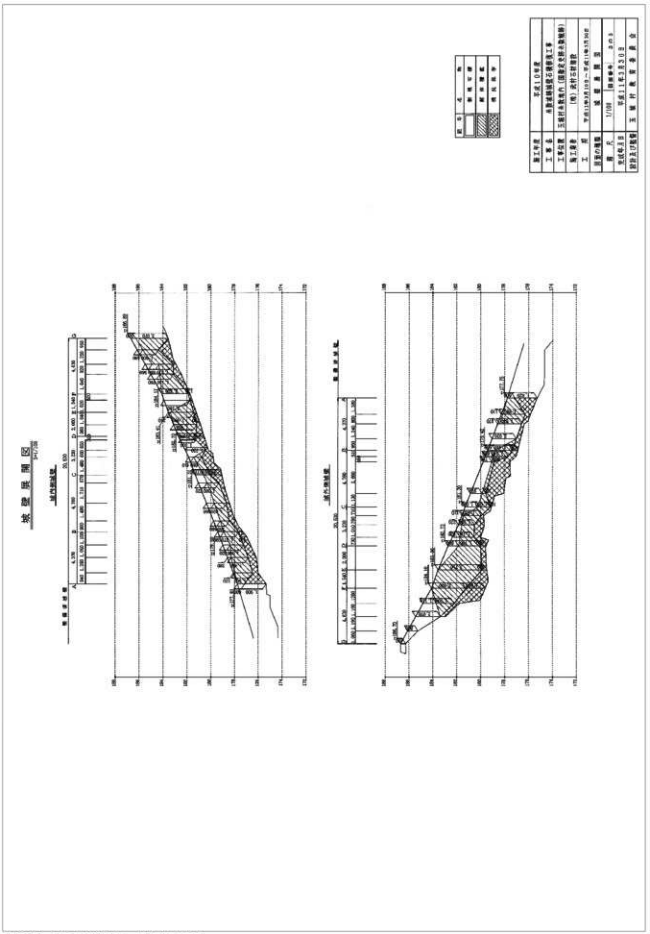
図版 102．城壁修復工事竣工（北東側より）



第60図　平成10年度　平面図



第61図　平成10年度　城壁断面図



第62図　平成10年度　城壁展開図

第14節　平成11年度整備

当該年度は、遺構調査や城壁修復工事等を実施した。実施内容は以下のとおりである。

また、関連事業である糸数城跡史跡等買上げ事業にて、蔵屋敷地区 10 筆の買上げを行い、公有化を実施した。

1．遺構調査

（1）北のアザナ遺構調査（K・O地区）

北のアザナは糸数城跡の北側、石灰岩丘陵を取り込むように城壁を配し、城跡では最も標高が高く約 190m を測る。城壁は琉球石灰岩を石材に用い、城外側を切石積で約 7m も積み上げ、城内側は主に野面積で武者走りを設けている。

今回の調査は、アザナの城壁ライン等を確認することを目的に実施した。まず、城内側城壁の根石検出のため崩落石の除去に着手したが、城壁を寸断する道路側からアザナにかけて崩落石が厚く堆積している状況であった。そのため遺構の崩落防止及び作業員の安全に配慮しながら、可能な限り城壁ラインを確認するとともに、現況平面図及び横断図作成のための測量を行った。

残存遺構は、大部分の遺構が残存状態も良く連続しており、北のアザナの胸壁箇所やアザナから道路にかけての城壁の一部は、その残存状況より往時のレベルを維持しているものと思われる。城壁の形態を見ると、城内側は道路側の城壁の一部に布積が確認できるものの、その多くが野面積となっている。城外側については、前年度修復箇所との接合箇所が野面積である以外は、布積の上に野面積が積まれる二層積となっており、特異な形態を有している。なお、アザナの建築時期を判断する遺物は得られなかったが、平成元・9年の調査等により、基礎石層より 15 世紀初頭～中頃の遺物が得られており、前述のとおり、この時期に北のアザナから正門の城壁部分が建築され、城を拡張したものと考えられる。

（2）城門北側城壁調査（K・P地区）

城門の北側から道路で寸断される城壁までの直線状に延びる城壁約 33m を対象として、遺構の現況確認を目的に調査を実施した。城外側城壁は、樹木による孕みや布積の欠損があるものの、保存状態は比較的良好であるが、城内側城壁は崩落及び孕みが著しく保存状態は極めて不良であった。そこで、崩落石の除去を行い、城壁平面ラインと断面の測量と図化を行った。

2．城壁修復

城壁修復は平成 12 年 2 月 1 日～3 月 24 日の期間で、前年度修復箇所の続きである北のアザナから城壁を寸断している道路までの全長約 40m の修復工事を実施した。なお、城壁修復の実施に当たっては、整備委員会を開催し、北のアザナ城壁調査報告及び現地視察を行うとともに、同箇所の修復について指導・検討を行った。

結果、委員会で以下の指導をいただいた。

1．既存遺構の保存に影響を及ぼさない限り、城壁の天端高は現存する遺構及び裏込めを最高とす

る。

2．崩落及び孕みの著しい箇所については、両側に残存する保存良好な遺構を参考に擦り付ける。

3．アザナ西側胸壁は、崩落により極めて保存状態が良くない。同箇所については、将来検討できるよう現状確認可能な境界に鉛板等で表示すること。

4．城壁の崩落・孕みの要因となる樹木については、基本的に解体の際に除去するが、遺構の保存状態が良好な箇所の場合、伐採等をして枯らすこととし、城壁の保全を図る。

5．不足石材は現場に散在する崩落石を用いて補い、また将来に工事規模を知らしめるため目立たないよう且つ、竣工後外れることのないよう配慮し、柔軟な鉛板を修復規模・範囲として使用する。

6．工事着工前に再度委員会を開催し、同箇所修復について最終確認と指導を仰ぐ。

7．城内側城壁の急勾配な箇所については、天端修復形状についてスロープ状と階段状の提示を行ったが、前年度修復済城壁から断面 C に関しては、B 断面位置における天端（ここでは裏込材の最高点）を基点とし、その点と両側の残存遺構の天端とを交互に結ぶこととし、断面 E から断面 H に関しては、天端を相互に結ぶこととした。（第 63～67 図）

図版 103．A'～C' 城内側積石状況（東側より）

図版 104．E'～F' 城内側積石状況（西側より）

図版 105．G'～H' 城内側積石状況（北側より）

図版 106．A～H クレーン使用状況（北側より）

図版 107．城壁修復工事着工前（南側より）

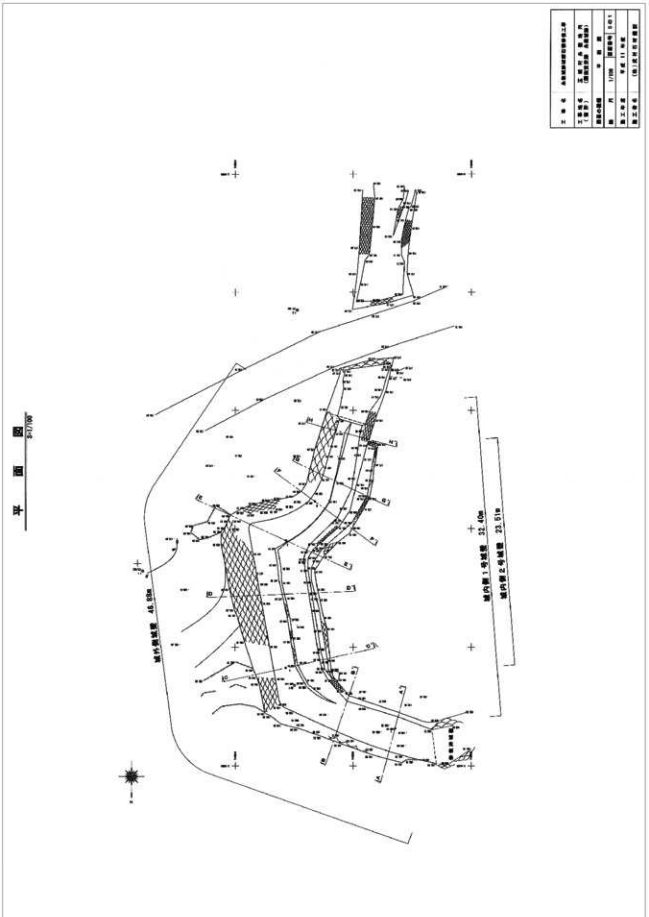
図版 108．城壁修復工事竣工（南側より）

図版 109．E付近城外側着工前（東側より）

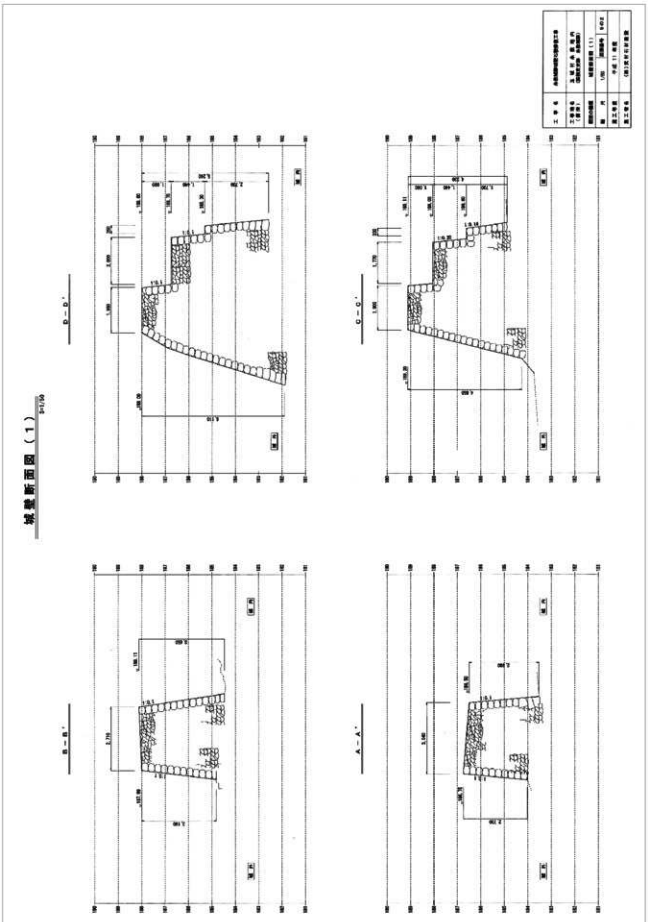
図版 110．E付近城外側竣工（東側より）

図版 111．G付近城内側着工前（南側より）

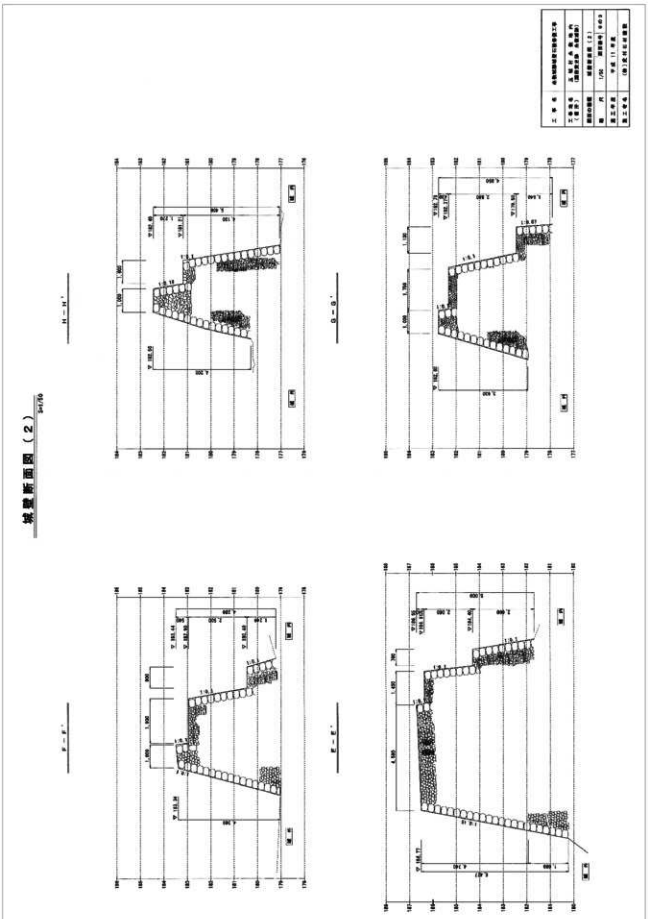
図版 112．G付近城内側竣工（南側より）



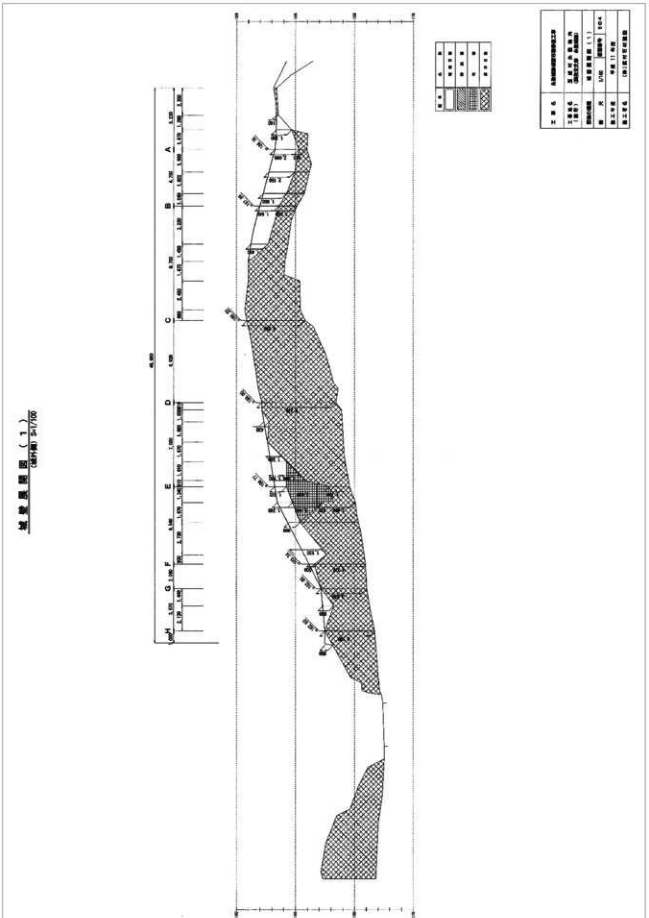
第63図　平成11年度　平面図



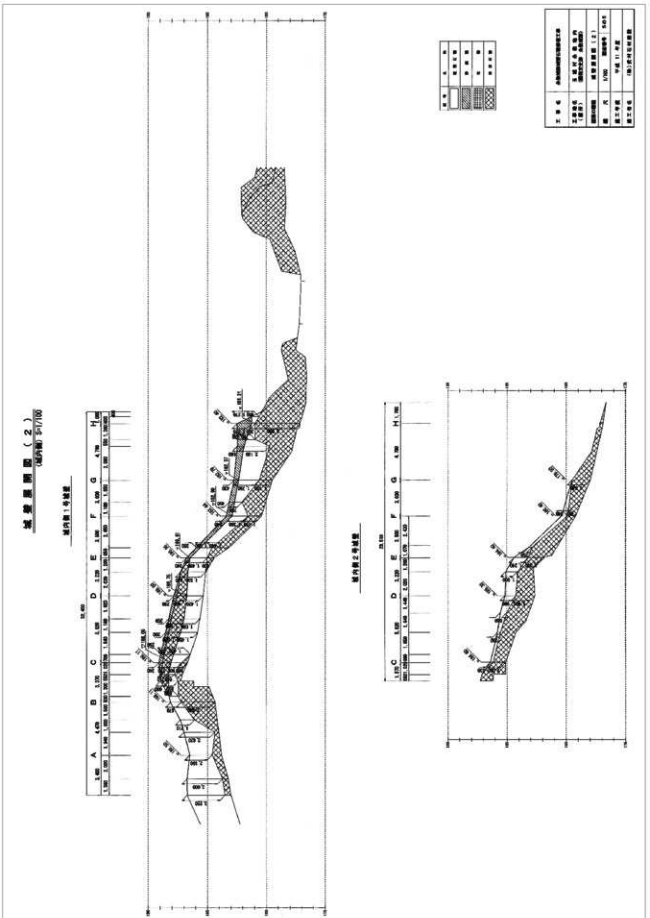
第64図　平成11年度　城壁断面図1



第65図　平成11年度　城壁断面図2



第66図　平成11年度　城壁展開図1



第67図　平成11年度　城壁展開図2

第４章　総括

前章までは、各年度における整備等についての記述を行ってきた。本章では、整備事業の成果を改めて整理することで結びとしたい。

第１節　整備事業の成果

糸数城跡は、旧玉城村時代よりその保存と整備に取り組んでおり、昭和 51 年度に策定した保存管理計画に基づいて土地の公有化や調査を進めてきた。本報告書は、昭和 61～平成 11 年度までの整備事業成果についてまとめており、平成 12～24 年度までの整備事業については、今後刊行予定である整備事業報告書Ⅱにて報告を行う。

城壁修復工事に伴う測量調査や事前の遺構確認調査により、糸数城跡の石積工法が野面積、雑割石積及び布積の 3 種類があり、北のアザナから正門にかけての城外側城壁は、布積と雑割石積との二層積という特異な形態を呈していることが判明した。

昭和 62・63 年度には、正門両脇の城壁が大きく前方に傾き、崩落の危険があったため修復工事を実施した。平成 2 年度には、殿舎跡側の後方城壁北西側に新たに西のアザナを確認した。平成 3 年度には、Ⅰ地区の残土処理を行った際、現在通用路として使用している城壁の切れ目部分から約 2m の箇所に、現在の正門建築以前に西側から出入りするための門と想定される跡を確認した。この小さい古い門は、城跡の拡張等に伴って廃棄したと考えられる。平成 6 年度には、Ⅰ地区にて 3 段構造になった城壁及び物見台を確認したことから、建造当初はアザナとして機能していたと考えられる東のアザナ跡を確認した。東のアザナ跡は、城内に位置していることから、縄張りを拡大する以前のアザナと考えられる。北のアザナ完成に伴ってアザナとしての機能を失ったとみられ、平成 3 年度に確認した門跡と合わせ、グスクの規模が拡大したことを裏付けるものであると想定する。また、南の虎口跡についても、これまでアザナと考えられていたが、城壁横断がコの字型であることから、かつてはここが正門であり、東のアザナ跡から南の虎口跡へ城壁が延びていたと考えられる。こちらも拡張の際に、現在の位置に正門が造られたことで口を塞ぎ、アザナとしての機能を持たせるようになったものと考えられる。

今回の整備事業における城壁修復工事の際には、残存状況を復元高さ設定の参考とし、城壁の安定性の確保や風格ある城郭の再生を目的に実施した。これらは、平成 12 年 3 月に策定した『糸数城跡整備実施計画報告書』の「第 1 期整備」である城壁の保存修理を行い、風格あるグスク景観の再生を図るという内容に位置付けられている。

また、西のアザナ及び東のアザナ跡の確認や、北のアザナが拡張した際に、南の虎口を閉じ、新たに正門を設けたという糸数城跡の変遷の一部を伺うことができた。これらは、糸数城跡の変遷を知る上で重要な確認であり、今後も詳細な調査を要する。

【引用・参考文献】

沖縄県うるま市教育委員会
2008『国指定史跡　勝連城跡環境整備事業報告書Ⅳ』うるま市文化財調査報告書　第 6 集
2011『国指定史跡　勝連城跡環境整備事業報告書Ⅴ』うるま市文化財調査報告書　第 13 集
2019『国指定史跡　勝連城跡環境整備事業報告書Ⅵ』うるま市文化財調査報告書　第 33 集

中城村教育委員会
2010『中城城跡～整備事業報告書Ⅱ～』中城村の文化財　第 12 集
2014『古道　ハンタ道～歴史の道環境整備事業報告書～』中城の文化財　第 16 集
2020『中城城跡～災害復旧整備事業報告書～』中城村の文化財　第 24 集

沖縄県玉城村教育委員会
1991『国指定史跡　糸数城跡－発掘調査報告書Ⅰ－』玉城村文化財調査報告書　第 1 集
2000『糸数城跡整備実施計画　報告書』

沖縄県南城市教育委員会
2017『糸数城跡－蔵屋敷地区発掘調査報告書－』南城市文化財調査報告書　第 19 集
2020『国指定史跡　糸数城跡保存活用計画書』
2020『国指定史跡　糸数城跡整備基本計画書』
2023『根石グスク周辺遺跡－沖縄気象台糸数気象レーダ局舎建替工事に伴う発掘調査報告書－』
南城市文化財調査報告書　第 21 集

沖縄県南城市文化財調査報告書第 23 集

糸 数 城 跡

－整備事業報告書Ⅰ－

発行日　2024(令和6)年3月
発　行　沖縄県南城市教育委員会
〒901-1495　沖縄県南城市佐敷字新里 1870
TEL　(098)917-5374
印　刷　丸正印刷株式会社
〒903-0211　沖縄県西原町字小那覇 1215
TEL　(098)835-8181